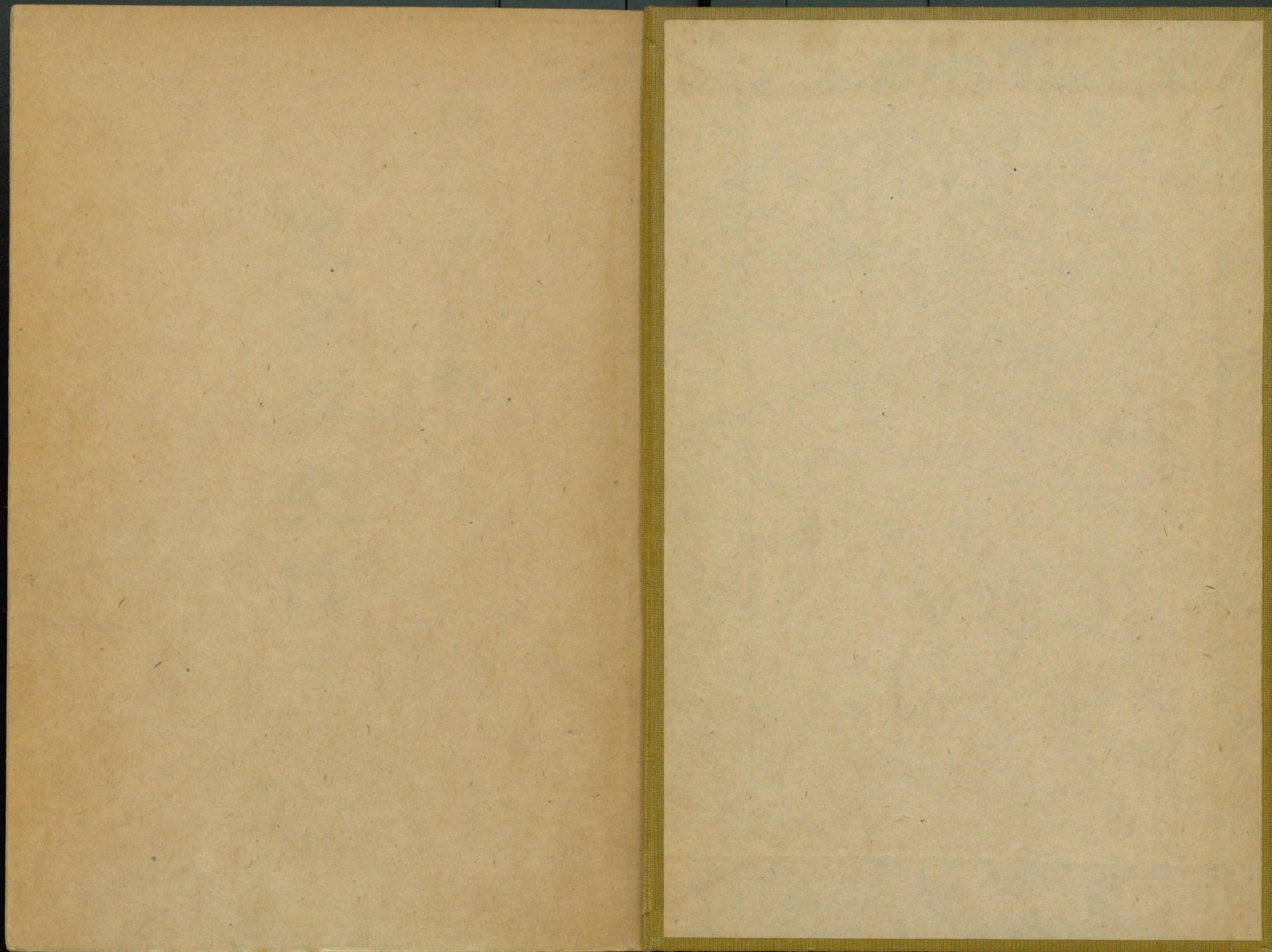


東京府史蹟

147
243

147-243
1200800107392





147-243

賜天覽旨覽



東京府史蹟



序言

一、史蹟名勝及天然紀念物ノ闡明ハ學術上最モ重要ナルノミナ
ラス、國民性ノ涵養上亦忽諸ニ付スヘカラサル事ナルヲ以テ、
本府ハ夙ニ之カ調査ト保存トニ意ヲ致シ、大正四年十一月先
ツ御大典ヲ紀念トシテ其ノ標識ヲ行ヒタリ爾來之ヲ繼續ス
ルノミナラス大正七年十月ニハ史的紀念物天然紀念物勝地
保存心得ヲ布告スルト共ニ、史蹟講演會及展覽會第一回ヲ開
催シ、大正八年二月ニハ府下ノ史的紀念物天然紀念物勝地ノ
臺帳ヲ編製スル事ニ着手シタリ、今ヤ其ノ調査ニ基キ本書ヲ
公ニスルハ、史蹟遺物其ノ他紀念物ノ保存及愛護ノ精神ノ徹
底ヲ期スルニ外ナラス。



一、本書ノ編纂ハ學務課長羽田格三郎ノ下ニ囑託小田内通敏、同
 戸川安宅、屬安倍叔吾之ニ從ヒシモ、材料ノ選擇及其ノ解説ニ
 就キテハ大熊喜邦、内田貢二氏ヲ始メ白井光太郎、山中笑、大類
 伸、鳥居龍藏、山口剛、蘆田伊人、齋藤良太郎、井下清、島田一郎諸氏
 ニ據ル所少ナカラス。
 一、本書ノ題字ハ特ニ井上府知事ノ揮毫ニ係ル。

大正八年三月

東京府

東京府史蹟目次

- 一、明治初年の江戸城址
- 一、外櫻田門
- 一、外櫻田見附平面圖
- 一、日比谷門址
- 一、日比谷見附平面圖
- 一、東京帝國大學赤門
- 一、閑院宮家門
- 一、華族會館門
- 一、高輪岩崎邸門
- 一、外務省長屋
- 一、神田橋内長屋
- 一、日枝神社
- 一、同上拜殿内部
- 一、聖堂杏壇門
- 一、聖堂平面圖
- 一、聖堂大成殿
- 一、同上孔夫子像
- 一、上野東照宮
- 一、同上拜殿内部
- 一、芝増上寺平面圖
- 一、同上三門
- 一、芝台徳院廟全景
- 一、同上位牌殿内部
- 一、同上奥院寶塔
- 一、上野寛永寺五重塔
- 一、谷中天王寺五重塔
- 一、淺草公園全景
- 一、淺草寺本堂
- 一、淺草公園西佛の板碑
- 一、同公園六地藏の石燈籠
- 一、神田神社
- 一、根津神社
- 一、龜戸神社
- 一、市谷八幡神社
- 一、塗家造りの町並
- 一、塗家造りの町家
- 一、日本橋區小舟町川岸の土藏
- 一、同上葺屋町の土藏
- 一、高輪泉岳寺四十七士墓
- 一、大塚先儒墓地
- 一、西ヶ原貝塚
- 一、芝公園貝塚
- 一、芝公園丸山の大古墳
- 一、同上古墳群
- 一、待乳山
- 一、水神の森
- 一、切支丹屋敷址
- 一、同上附近圖
- 一、津浪警戒の碑
- 一、迷子の碑
- 一、柳の井

目

次

○ 櫻の井

- 一、光圓寺の大公孫樹
- 一、善福寺の大公孫樹
- 一、市内最初の並木
- 西ヶ原一里塚
- 一、王子神社
- 一、飛鳥山の碑
- 一、静勝寺遠望
- 一、太田道灌像
- 一、大宮八幡神社
- 一、『武江産物志』の一部
- 一、本門寺仁王門
- 一、同上五重塔
- 一、深大寺全景
- 一、同上銅造釋迦像
- 一、同上鐘樓
- 一、大國魂神社表門
- 一、同上舊馬場先櫓並木
- 一、同上中門及拜殿

一、同上本殿

- 一、高安寺仁王門
- 一、國府の址
- 一、善明寺鐵佛
- 一、同上胎内佛
- 一、國分寺全景
- 一、同上藥師堂
- 一、同上古瓦
- 一、同上金堂址
- 一、小野神社
- 一、谷保天満宮
- 一、同上寶物
- 一、武田信玄軍船模型(信松院寶物)
- 一、普濟寺遠望
- 一、同上六角塔
- 一、六角塔拓本
- 一、高幡金剛寺
- 一、碑文谷圓融寺本堂
- 一、大悲願寺全景

一、伊達正宗白萩所望狀

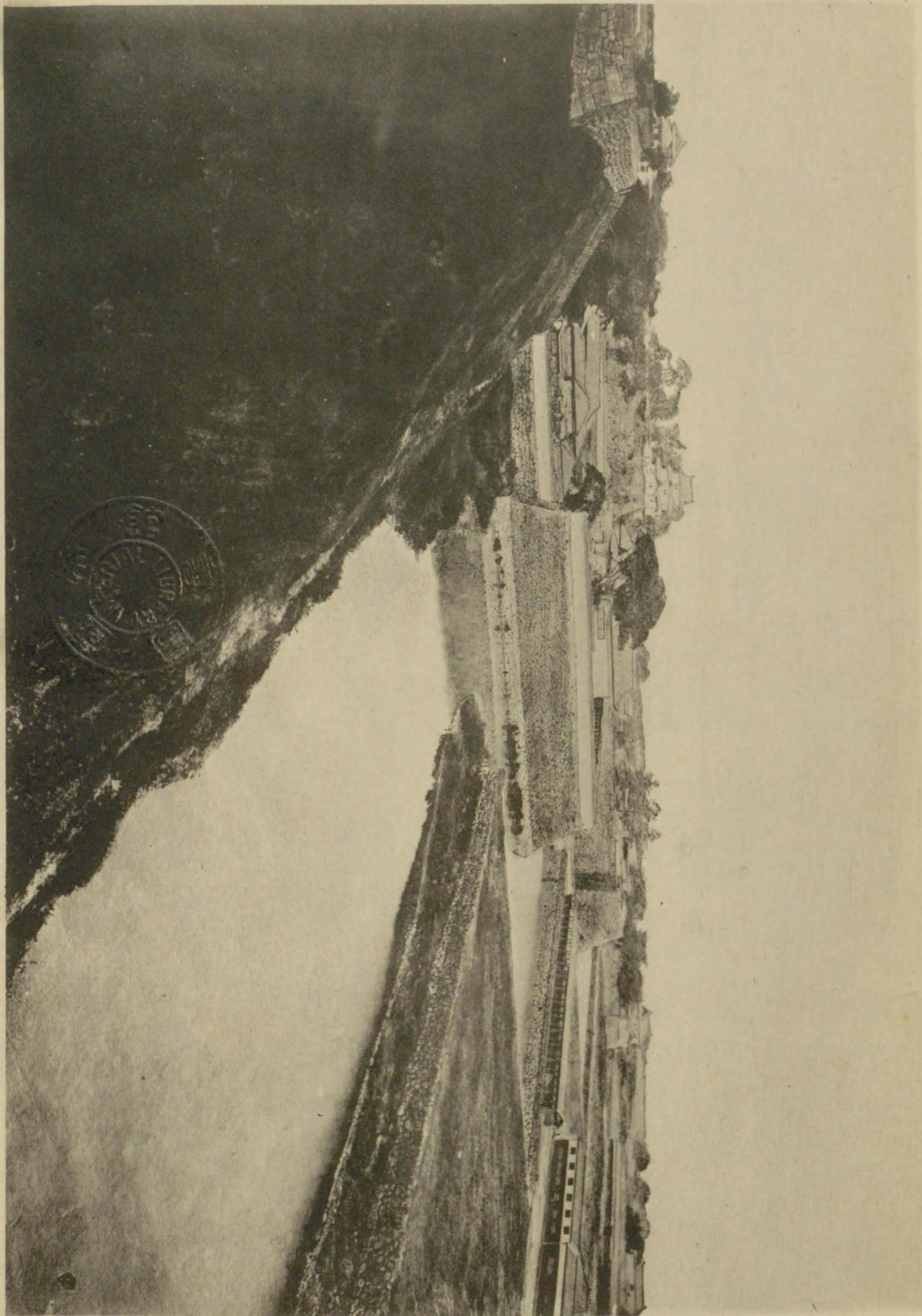
- 一、御嶽神社
 - 一、同上寶物
 - 一、久米川古戰場
 - 一、分倍河原古戰場
 - 一、瀧山城址
 - 一、同上平面圖
 - 一、高尾山見晴臺の眺望
 - 一、同上藥王院本殿
 - 一、井之頭池
 - 一、神田上水舊關口洗堰
 - 一、玉川上水路(小金井)
 - 一、水道碑
 - 一、多摩川上流
 - 一、鐘乳洞
 - 一、小金井の櫻
 - 一、荒川堤の櫻
 - 一、東京府史蹟圖
- 附録
- 史的紀念物天然紀念物勝地保存心得及同調査票記入心得

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title '目次' and various list items.)

江戸城址

舊江戸城は本丸西丸及吹上林泉を主要部分とし、二の丸三の丸之に連り、田安門内并に西丸下の一郭を加へ、之に外郭を廻らしたる規模頗る宏大なる城郭にして、本丸を以て將軍の居館に充て西丸を隠居所とし、二の丸は後世主として前將軍侍女の居館に充つ。天正十八年八月朔日徳川家康入城して其の居城となり、文祿二年西丸創建され、家康將軍となり、慶長九年江戸城増築の命あり、十一年本丸殿閣石壘二、三の丸及東北雉子橋より西南溜池落口に至る外郭成り、同十二年北側の郭、同十五年西丸石壘を修め、引續き工を起し、寛永十三年外郭成るに及びて城郭の規模全く整ひたり。殿館は本丸及西丸のもの最も主要なるものにして、寛永及萬治造營の本丸殿館を以て最も壯麗なるものとし天保度造營之に次ぐ。明治維新皇居と奠められしが、其の城壁・櫓猶ほ舊時のまゝに存するもの多し。今皇居の地は舊西丸にして、其の正門は舊西丸大手門に相當し、宮内省の位置は舊紅葉山に當り徳川氏代々靈廟のありし地に係る。而して竹橋兵營は舊田安及清水家屋敷址にして、二重橋前外苑は諸侯邸宅の舊址なり。

寫眞は二重橋内なる高壘上より北方を望みし景にして、左隅の石壘及前面の水濠は舊西丸(現皇居)東面の壘濠なり、又中央遠景の三重櫓は舊本丸の西南角に當り富士見櫓と稱す、其の右下方なる城門は坂下門、更に其の右方なる二重櫓は舊三の丸の一角、現今内閣に屬す。圖中右端遠景の城門は和田倉門にして、水濠の右なる建物は舊大名屋敷の遺構なりとす。



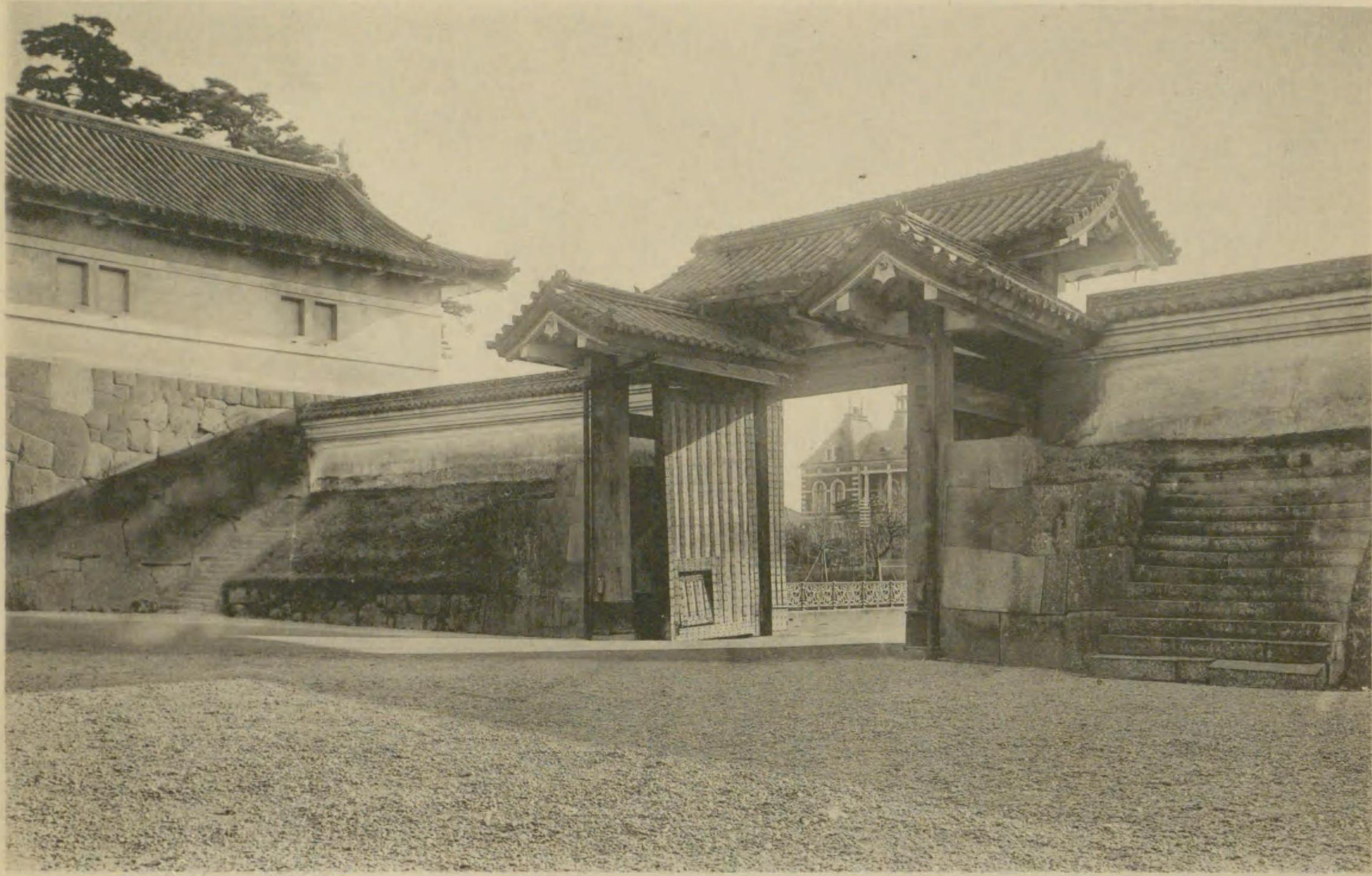
明治初年の江戸城址

外 櫻 田 門

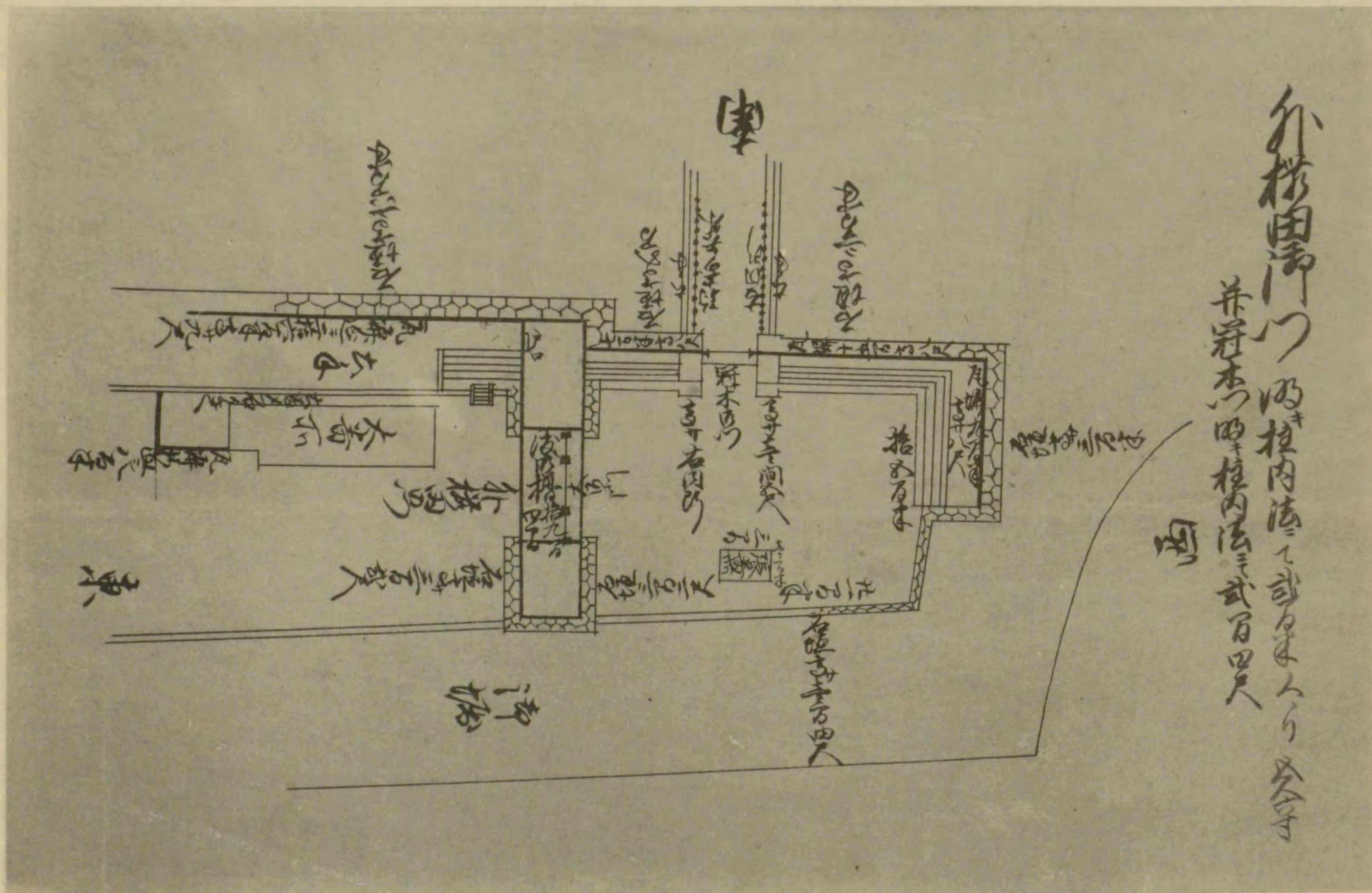
舊江戸城は内郭及外郭に諸門を開き、和田倉より外櫻田及半藏より竹橋・雉子橋・一ツ橋を経て虎の門赤坂を廻り淺草橋に至る諸門、并に芝口御門を舊時外曲輪御門と稱へて廿六門あり。

正門に冠木門を開き内に矩形の空地なる榊形を置き、冠木門の左右より石の高塀を以て繞らし、冠木門より入り屈折して大門を開き上に渡櫓を架す、冠木門の左右石塀上に女牆、高塀の上に瓦塀を置き、女牆及櫓門の内側に各石段を設くるを江戸城見附の一般の形式とし、冠木門は其の形式高麗なるを普通とす。外櫻田門及日比谷門は其の一例にして、前者は略ぼ舊形のまゝを存すれども、日比谷門は全く其の倣を失ひ僅かに石壘の一部を日比谷公園日比谷門内に存するのみ。

外櫻田門は徳川氏入城の時木戸門ありて小田原御門（寛永圖に小田原口）とあり、文祿中西九創建の時外櫻田門と稱し、寛永十三年に至り其の形式整ひしが如し。榊形は南北十五間半東西廿一間半、南に冠木門を開き東に梁間四間桁行十九間の塗籠造渡櫓を架し、下に大門あり外櫻田門と稱す。舊時は橋の東詰并に榊形内に張番所あり、櫓門の内に大番所を建つ。寫眞は冠木門と塗籠造渡櫓の一部をあらはせり。



外 櫻 田 門



外 櫻 田 門 見 附 平 面 圖

東京帝國大學赤門

徳川十一代將軍家齊の第二十一女浴姫が加州第十三代齊泰に降嫁の際建てられたるものに係り、文政十年六月二十八日着手、十一月二十七日に竣工せり。中央に三間藥醫門を立て、左右に分離して唐破風の放れ番所を置きたる特例に屬するものにして、江戸時代に於ける諸侯邸宅の門として當時の倣を窺ふに足るべき遺構なりとす。

閑院宮家門

赤坂見附内、舊雲州松平出羽守上屋敷の表門にして、唐破風造り兩番所を有する冠木門に屬し、本形式の門は國持家并に十萬石以上の諸侯にして、表門焼失後多く之を造ると傳へらる。而して本門は「出羽様の門」と稱へ、當時工匠の注目を惹きしものにして、大名邸宅の表門として好個の遺例なりとす。



東京帝國大學赤門



閑院宮家門

華族會館門

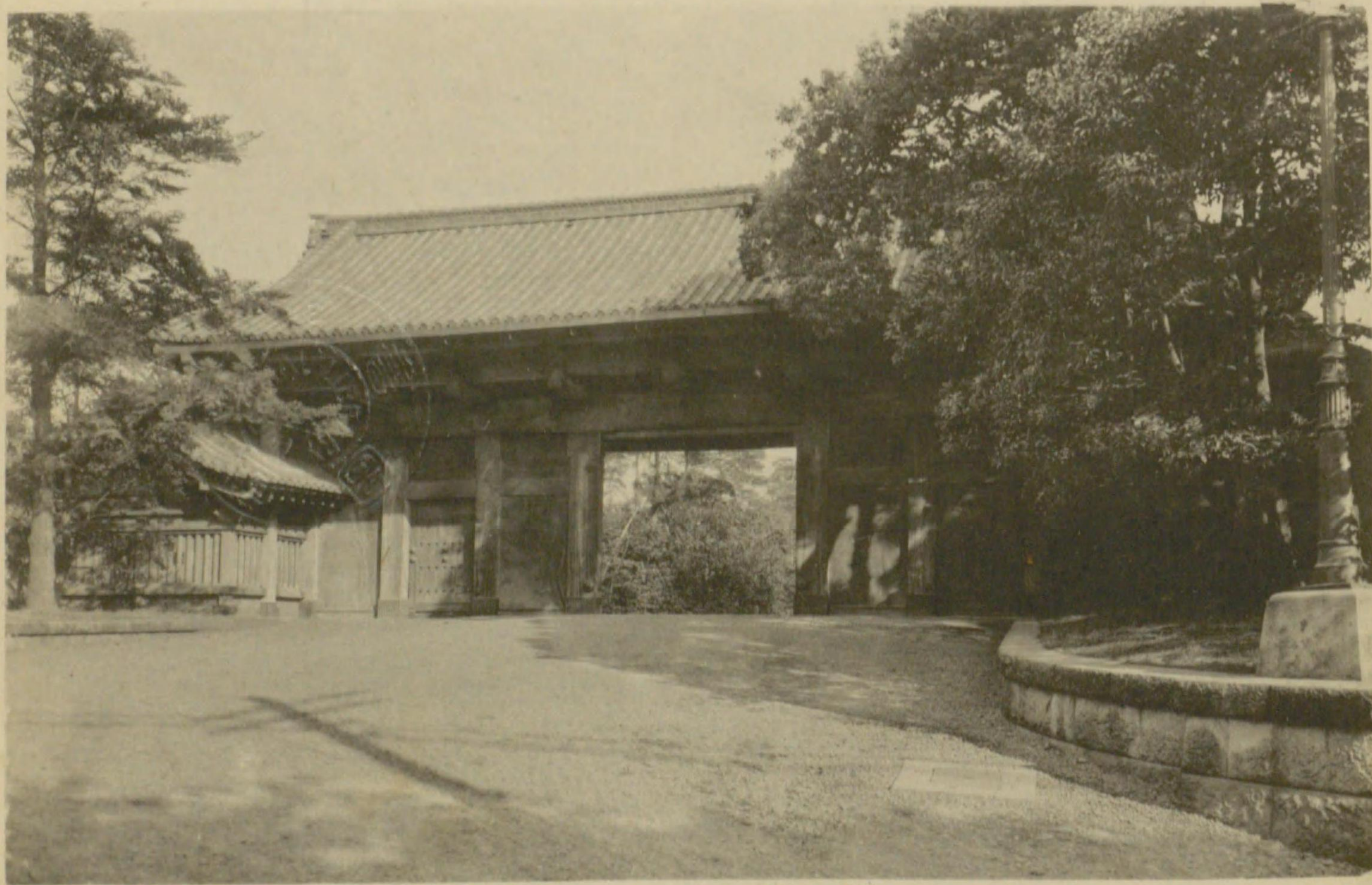
舊薩州侯屋敷俗稱裝束屋敷の門にして、唐破風兩出番所并に兩潜門を有する長屋門に係り、諸侯邸宅表門の形式中高級のものに屬す。番所の左右を全部堅瓦張の海鼠壁とせるは遺構中他に類例を見ざる所なりとす。

高輪岩崎別邸門

元丸の内藩公二門と稱せられたるもの、一なる備前岡山藩主池田侯江戸上屋敷の門にして、舊大名小路に面して設けられたりしが、明治廿三年三月九之内の地所三菱に拂下げらるゝに及びて取毀たれ、一旦高輪邸内に搬移され、後三十四年現在の位置に再建せらる。唐破風兩出番所を有する長屋門に屬し、中央に大門左右に潜門各一を開きたる壯大なる門にして、再建の際茅葺とせるも四十一年二月再び瓦葺に改められしと云ふ。従つて屋根勾配は多少舊態を失ひしものあるべしと雖も、往時諸侯上屋敷の長屋門の舊觀を窺ふに足るべき遺構なりとす。



華族會館門



高輪岩崎別邸門



外務省長屋



神田橋内長屋

外務省及神田橋内の長屋

江戸時代の武家邸宅は、長屋を以て圍繞し家臣の住居に充つるを通則とす。大名旗本は各其の身分に依り禁令を以て長屋の梁間に一定の制限ありと雖ども、江戸の長屋は形式上、腰下見張桐壁造、腰下見張塗家造、豎瓦張塗家造の三種に區別せられ、まゝ窓を設けざる部分あれども、櫺子窓武者窓、若くは與力窓を開くを普通とす。外務省の長屋は舊黒田家上屋敷の長屋にして豎瓦張塗家造に屬し、神田橋内の長屋は舊一ツ橋家の長屋にして下見張塗家造に屬す。共に舊武家屋敷長屋の遺例なりと云ふべし。

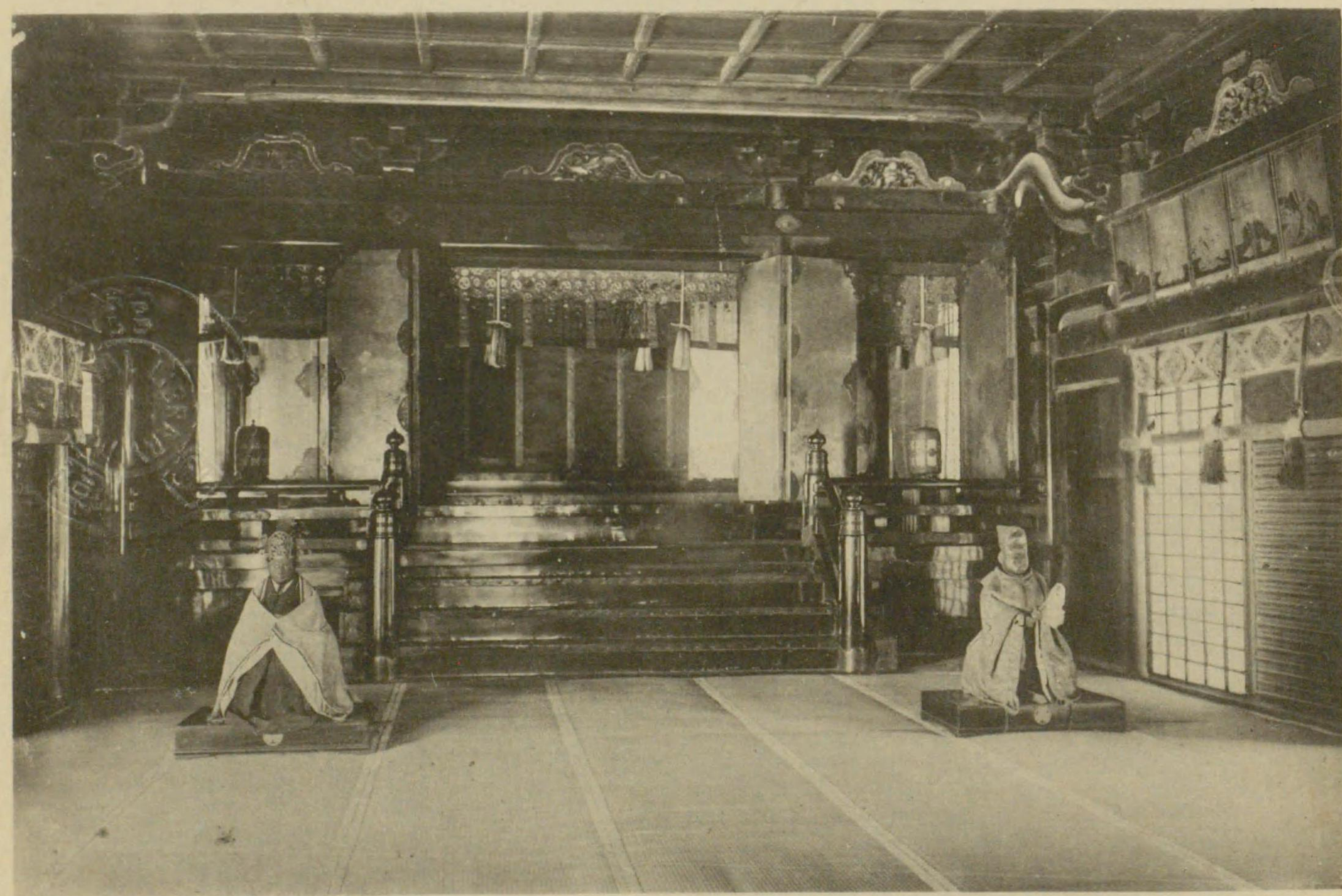
日 枝 神 社

元川越の仙波にありしを、長祿三年太田道灌之を江戸紅葉山に勸請し江戸城の守護神とせるものにして、慶長年間二代將軍秀忠之を今の麴町元山王に移し社殿を再建せしが、明暦の大火にて焼亡し、萬治二年四月更に現今の地に移され、大工頭鈴木修理長恒・木原内匠義永の設計に依り造營せられしもの今に存す。社殿の形式は權現造にして、現存神社中最も舊く最も優れたるものゝ一に屬し、江戸初期神社建築の代表的遺例なり。

祭神は大山咋神、徳川氏の産神として崇敬特に深く、其の祭禮亦將軍の觀覽に入るを以て盛大を極む。俗に天下祭或は御用祭と稱し、山車の數六十に達し、市内第一なりき。



日 枝 神 社



同 上 拜 殿 内 部

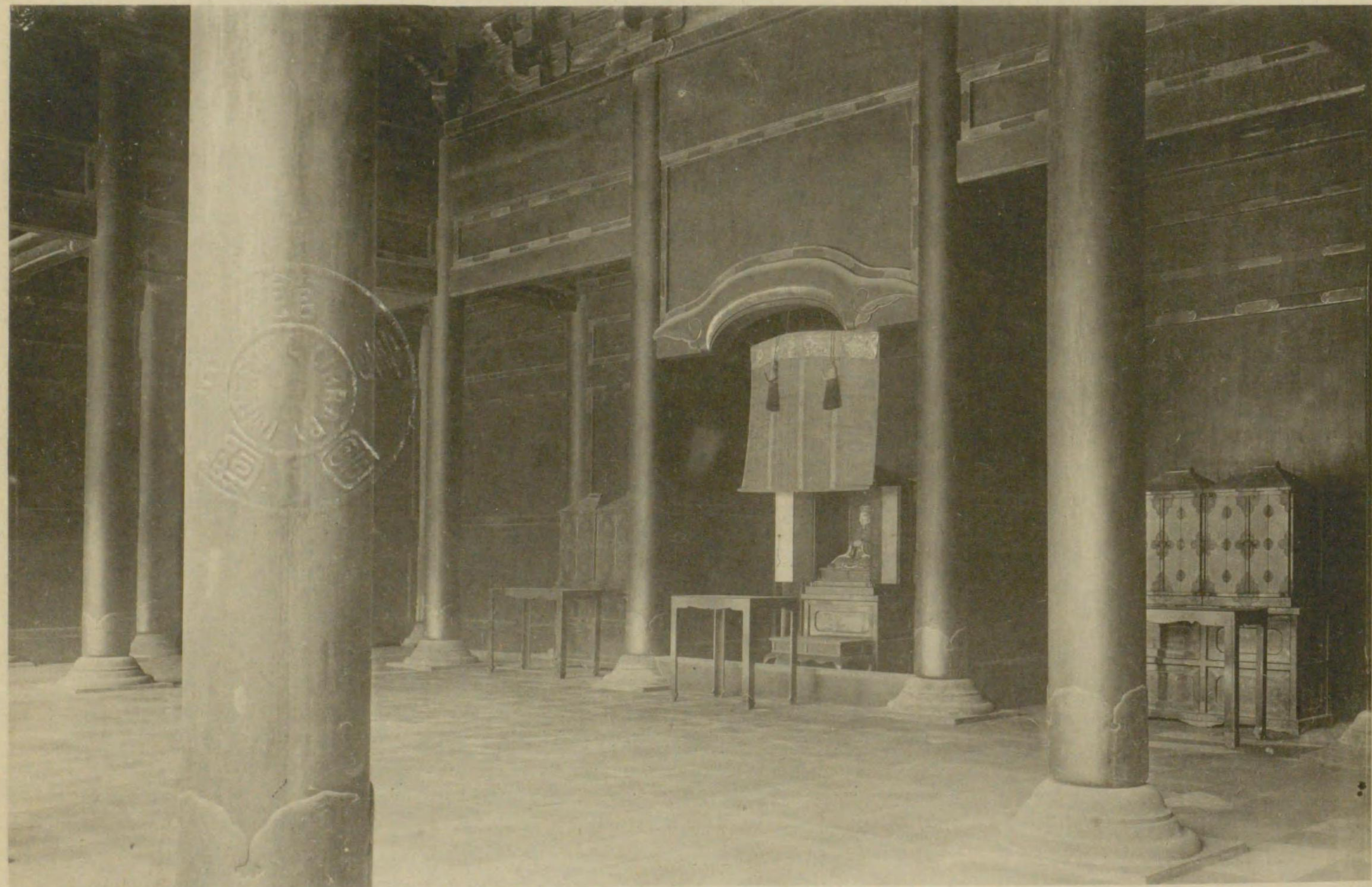
江戸時代に於て幕府の昌平疊に屬せし孔子廟にして大學頭林氏の支配する所に係り、毎年春秋二回釋尊の禮を此所に舉行せり、始め徳川家康幕府を江戸に開くや、大に儒學を奨勵し、林道春を擧げて學事に與らしめ、なほ進んで學舎を興すの意ありしが、幕府創業の際にして未だ其の事を見るに至らざりき、寛永七年に至り將軍家光道春に上野忍岡の地を與へ學舎を設けしめしが、越えて同九年尾州侯義直其の地に聖廟を建て、孔子以下四配の像を安置し自ら扁して先聖殿と稱せり、其の後三十年を経たる萬治三年より翌寛文元年に亘り、幕府工費を給して先聖殿を改造せしめしと雖も、規模猶狹少にして建築の結構亦特種の形式を具へざりしが如し、然るに將軍綱吉に至り大に廟殿及學舎の擴張を規畫し、地を湯島臺に相し、元祿三年七月松平輝貞を總奉行とし、蜂須賀隆重をして工役の費を助けしめ、同年十二月上棟式舉行、翌四年正月全く其の工を竣へ、二月忍岡の舊廟より孔子及四配の像を新廟に遷座せり、綱吉又親ら大成殿の三大字を書して聖廟正殿の扁額となさしむ、而して新廟の建築は棟梁依田伯耆の計畫に係り、殿門の制漸く整備せり、元祿十六年十一月廿九日、聖廟の殿

門廊廡悉く焼失したるを以て、寶永元年二月幕府其の再建を命じ、伊達宗贊をして工役の費を助けしめ、五月其の工を起し十一月上棟十二月工を竣へしが、安永元年二月廿九日及天明六年正月廿二日の兩度又復た祝融の災に罹り、其の都度舊制に據り、再築されしと雖も、大に工費の節約を主とせしを以て、廟殿の規模大に減殺せらるゝに至れり、越えて寛政十年に至り將軍家齊聖廟の改築を命じ、先づ其境域を擴張し、松平信明を總奉行と爲し、大工棟梁には平内大隅を任用し、同十一年三月新始めを行ひ、同年十月を以て全く竣工を告げたり、此の改築に係る廟殿は即ち現存するものにして、其の用材の堅實なるを、其の結構の精緻なるを、今猶輪奐粲然たり、而して其の殿門廊廡の配置は略、支那孔廟の制に則り、其の構造形式は從來の日本建築式に支那建築の手法を加味せるものにして、日本に於ける支那建築式の一例とも見るべきものなり、其の床に整石を布ける、柱の礎石の異形をなせる、内部の化粧屋根裏にして鞘の間に輪極を架せる、極の地飛檐共に断面圓形なる、大棟の特異なる形をなし、其の兩端に異様の魚形(鬼狀頭と稱す)を外向けに載せたる、下り棟及隅棟の止端に獸形(鬼龍子と稱す)を置きたる等、其の特徴の主なるものなり、要するに此の建物は徳川時代に於ける儒教の隆盛、孔聖尊崇の實蹟を語る貴重なる遺物にして、江戸に於ける聖廟としては唯一の例なりとす。

左の聖堂建築配置實測圖は之を研究せし齋藤良太郎氏の構圖に係る。



聖大成殿



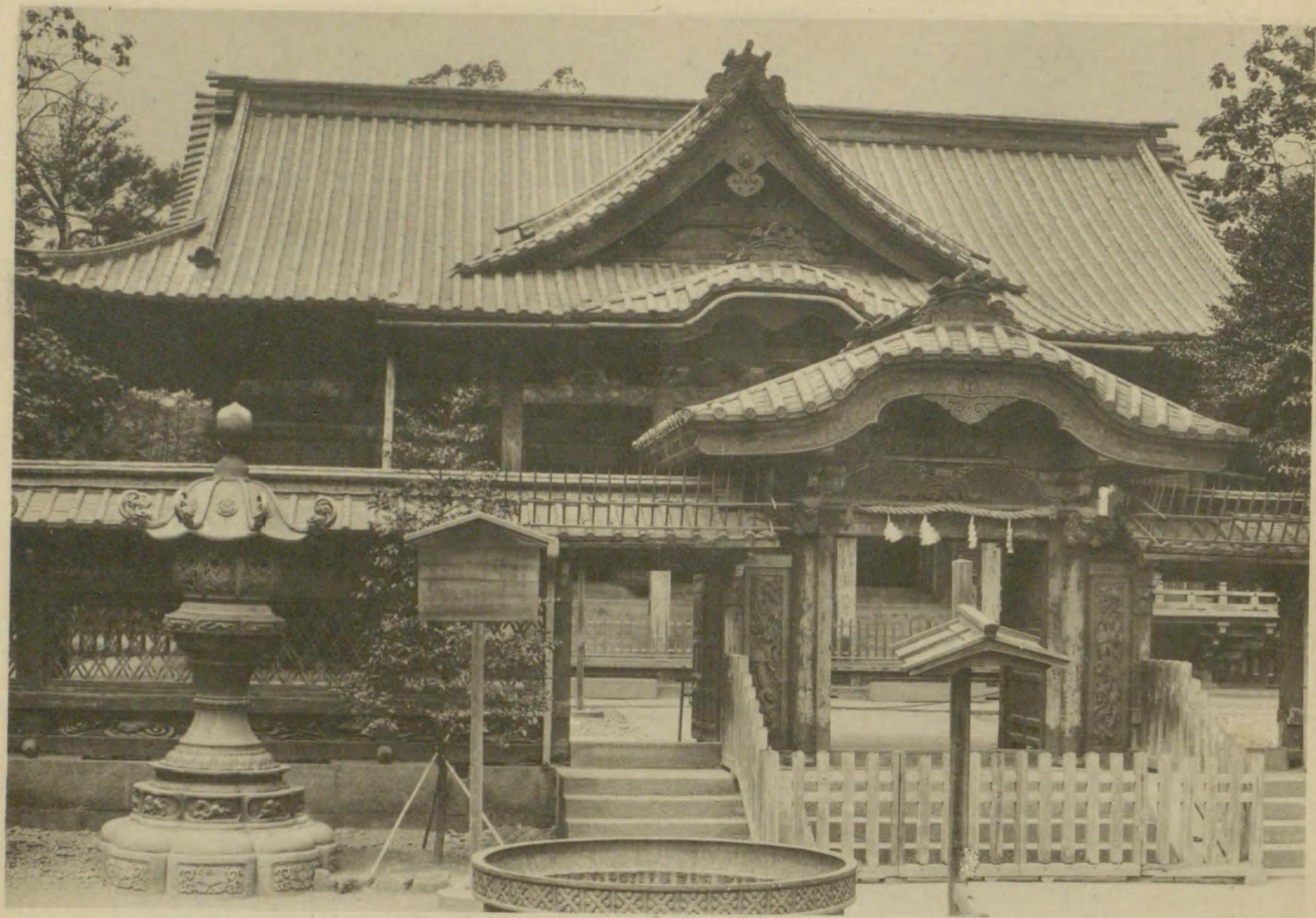
同大成殿孔子夫子像

聖大成殿

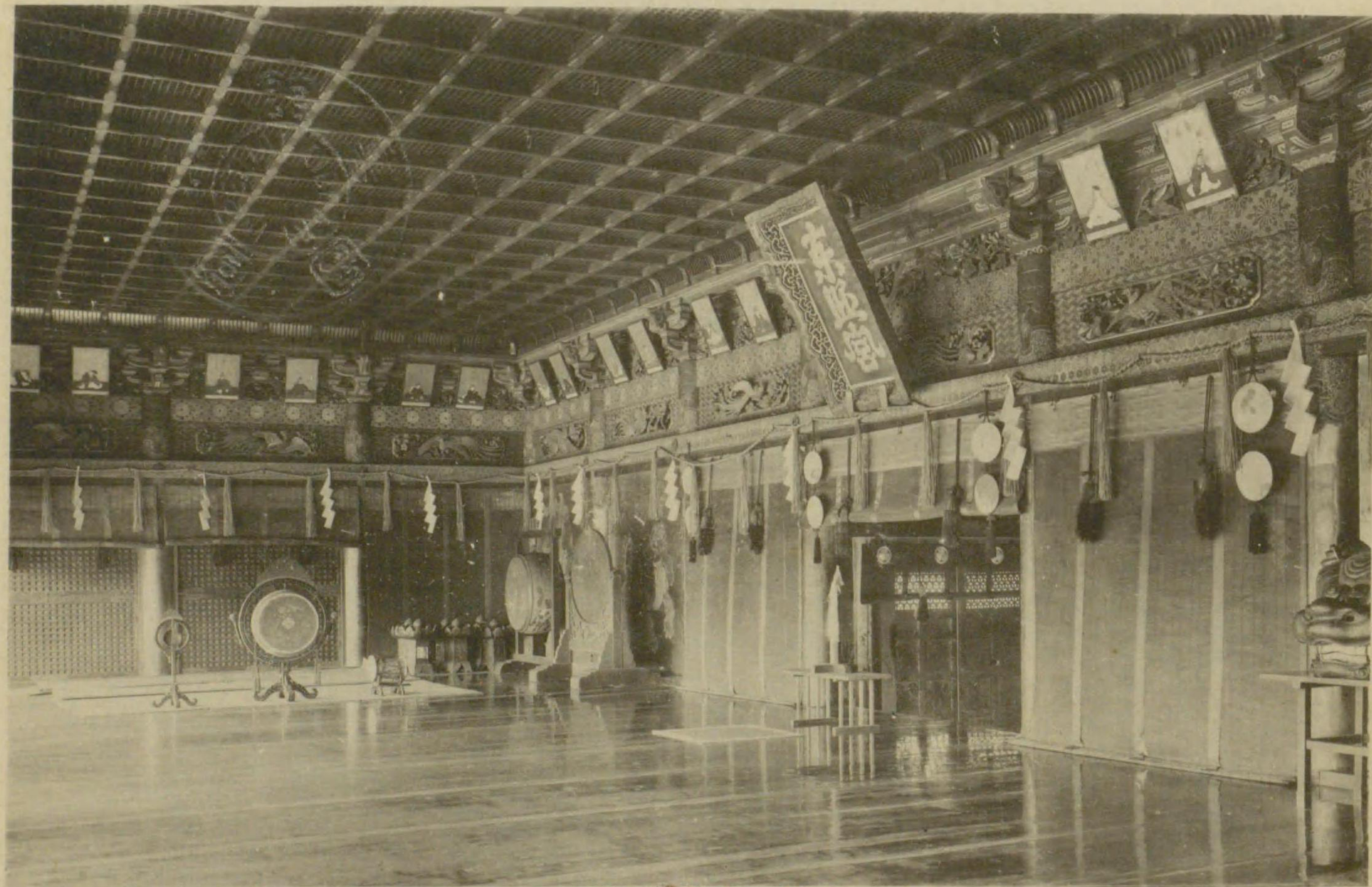


上野東照宮

元和九年四月藤堂高虎天海僧正に謀り、曾て高虎が拜領して其の下屋敷とせる忍ヶ岡の地を選び東照宮社殿を創建せんとし、將軍秀忠の許を得て其の繩張に着手したり。最初の社殿は寛永三年十一月十三日竣成し、同四年九月十七日正遷宮の式行はれたるものにして、慶安二年七月二日後光明天皇勅額を賜り勅額門に掲げられしが、慶安三年三月十五日將軍家光社殿造替の命あり、同年六月十七日外遷宮ありて改造に着手し、同年九月二日柱立の式、四年四月十七日正遷宮の式行はれたるもの即ち現今の社殿なり。勅額門は慶應三年十二月十七日焼亡せしが、社殿の構造は所謂權現造にして拜殿と本殿とを合の間を以て連ねたるもの、幕府の大工頭鈴木修理長恒木原奎之允義久の建つる所なり。明治四十四年特別保護建造物に指定せらる。



上野東照宮

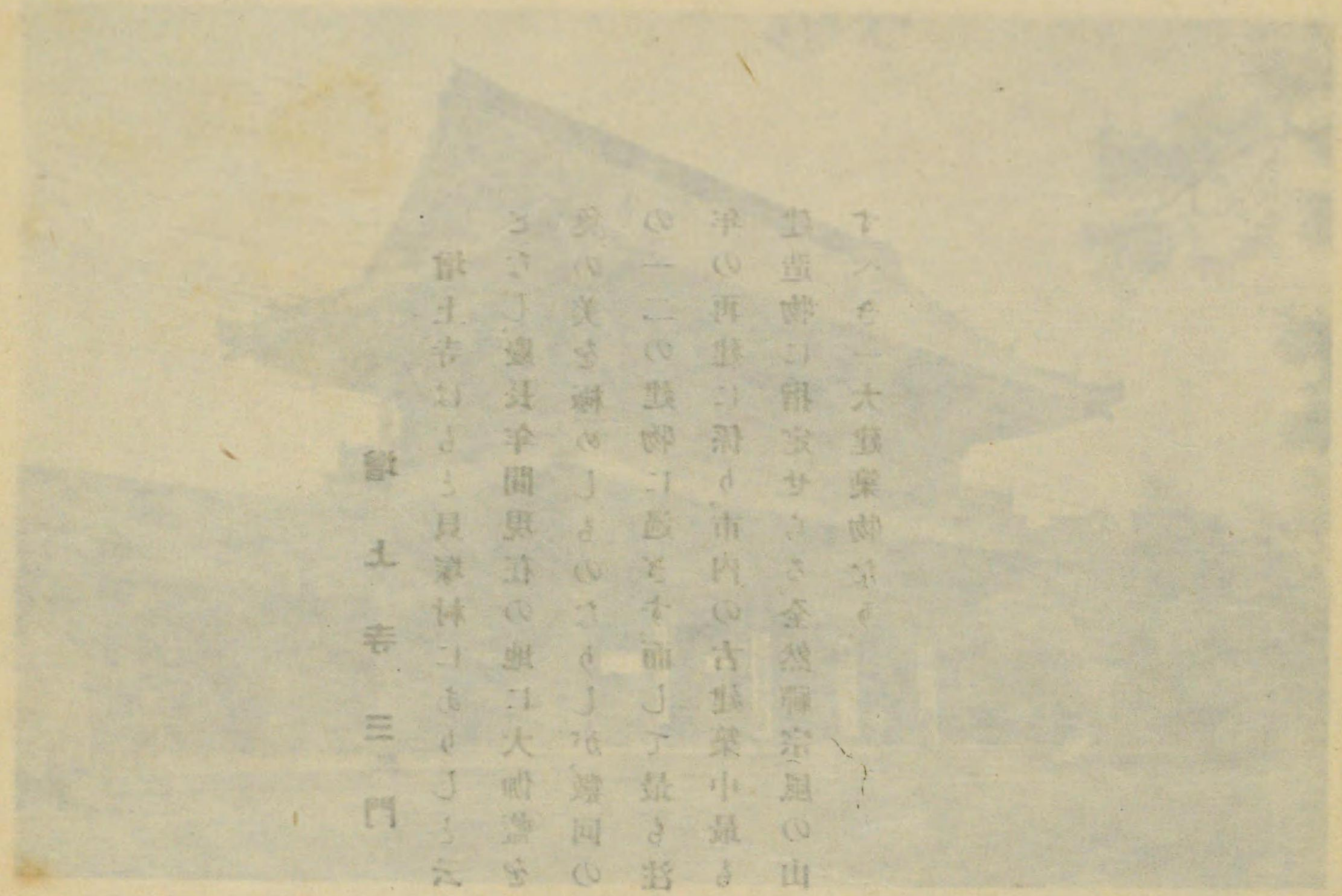


同上拜殿内



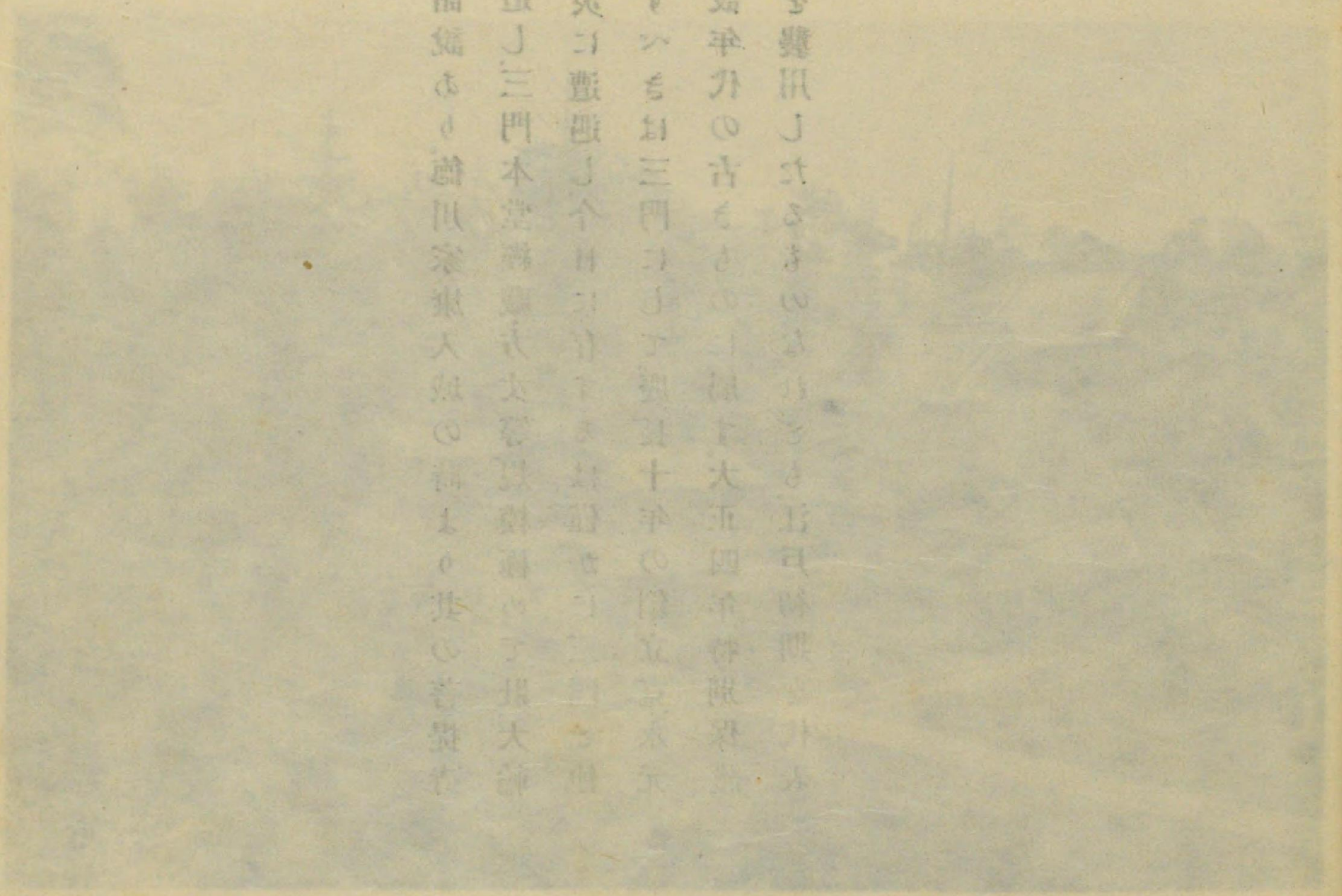
芝增上寺平面图





下へを一大集衆あり
 雲霞の御家サミに全然禪宗風の山門を構へし其の
 半の再興の御も市内の古藝業中最も盛衰争乃の古も
 の一二の藝師に藝を承而して其の若目サハも三門
 受の美を納めしものも了地境阿の火災に盡せし今
 ンに丁邊其半間興其の御に大禮堂を築きし三門本堂
 御土古のりも月津林にもりも云々蒲鑑もり御川家
 東大御の御土の其の老翁也

御土古三門

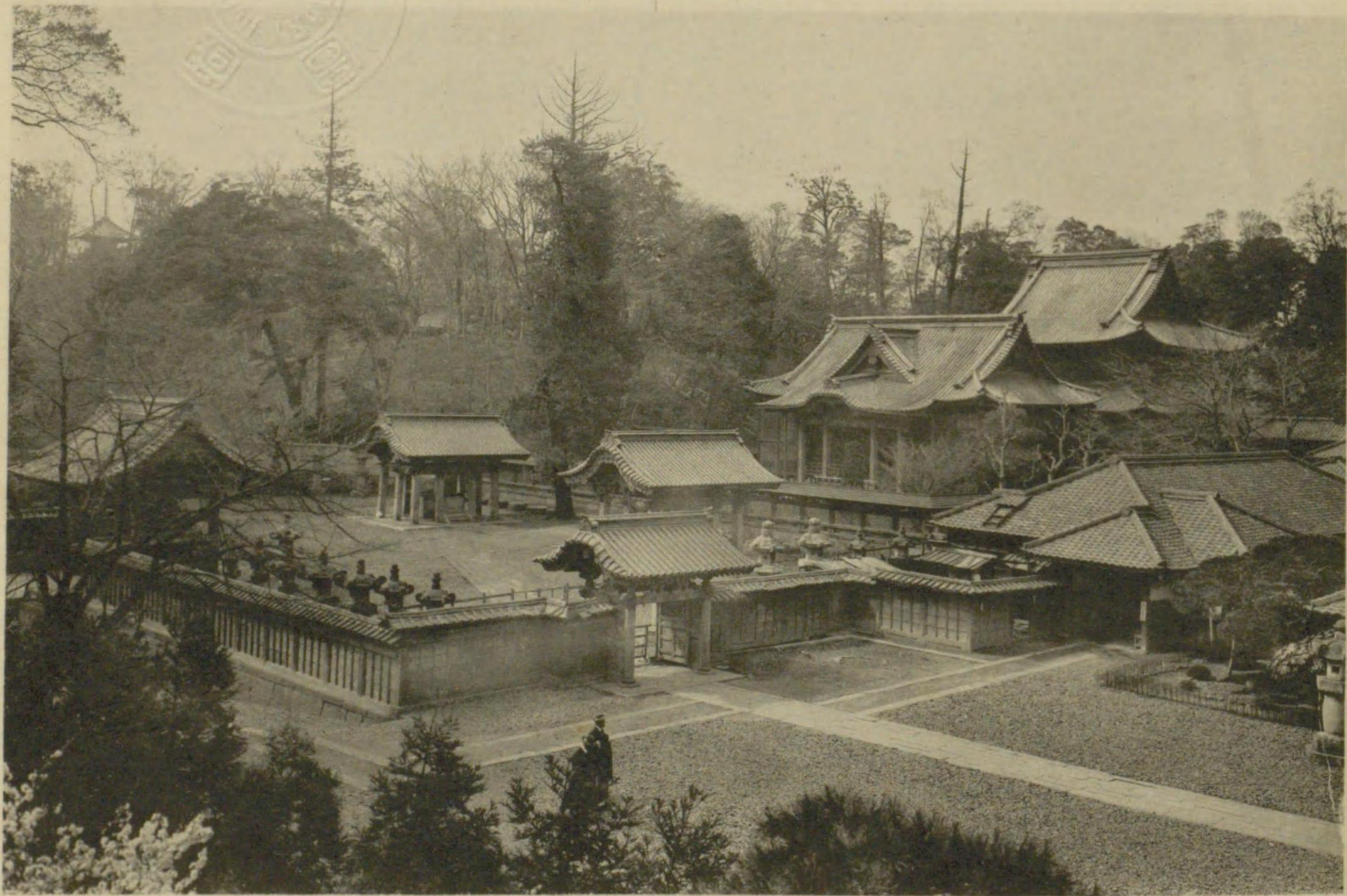


御土古三門





芝増上寺三門



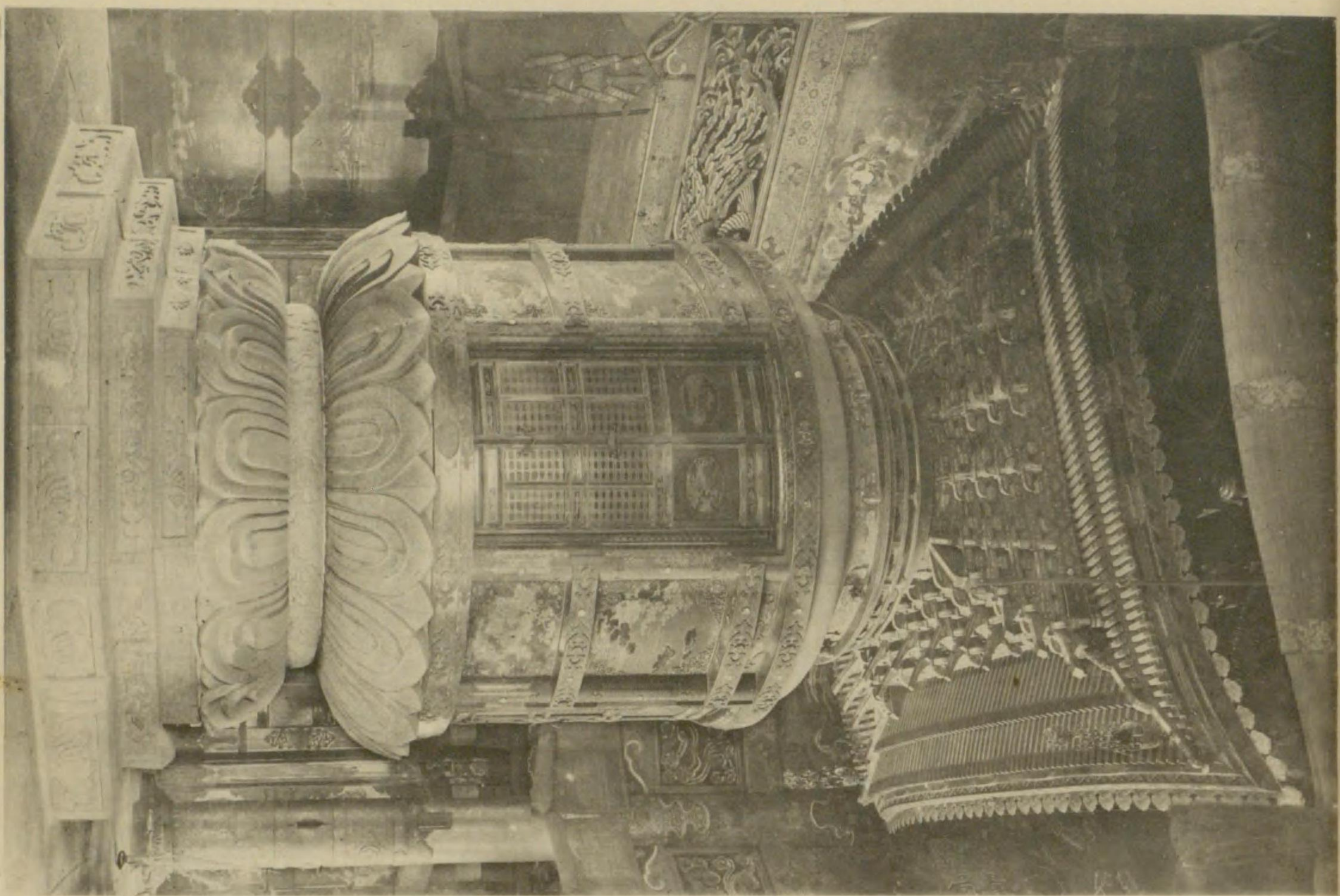
芝台徳院廟全景

増上寺三門

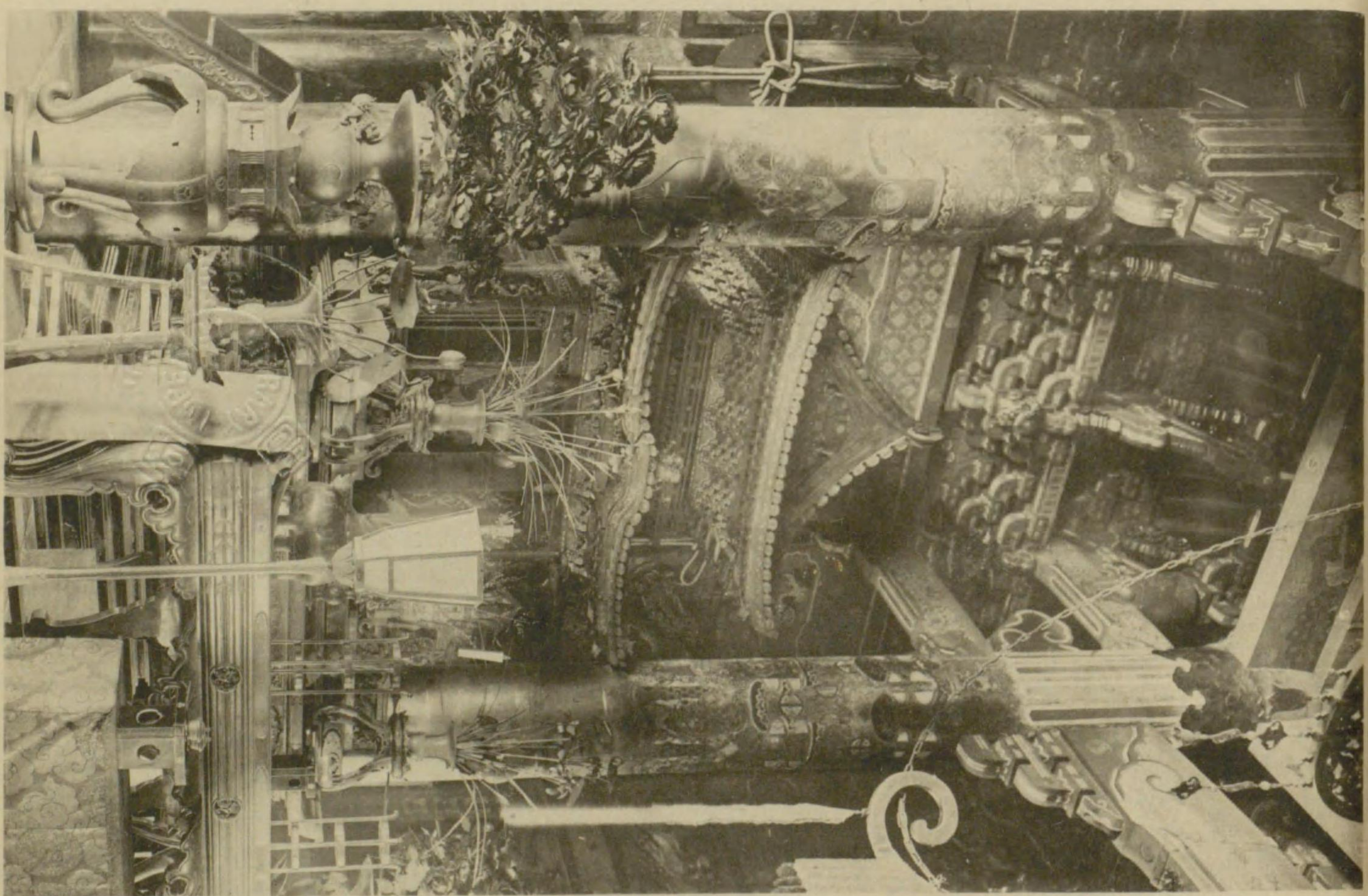
増上寺はもと貝塚村にありしと云ふ諸説あり。徳川家康入城の時より其の菩提寺となし、慶長年間現在の地に大伽藍を構造し、三門本堂經藏方丈等規模極めて壯大輪奐の美を極めしものなりしが、數回の火災に遭遇し、今日に存するは僅かに三門と他の一二の建物に過ぎず。而して最も注目すべきは三門にして、慶長十年の創立寛永元年の再建に係り、市内の古建築中最も建設年代の古きものに屬す。大正四年特別保護建造物に指定せらる。全然禪宗風の山門を襲用したるものなれども、江戸初期を代表すべき一大建築物たり。

芝 德川家 靈廟

德川家の芝靈廟として現在する重なるものは台徳院廟・文昭院廟及有章院廟の三廟にして建築として最も優れたるを台徳院廟とす。台徳院廟は二代將軍秀忠の靈廟にして、寛永九年二月十日造營に着手す。奉行は土井大炊頭利勝にして關東の諸侯其の役を助け、棟梁鈴木遠江守長次・添頭梁木原奎之允義久、作事請負人は伏屋次兵衛・石屋甚兵衛なりと云ふ。寛永九年七月二十一日上棟、同二十五日靈廟構造の賞行はれ、越えて九月更に靈廟の經營あり、寶永十二年諸堂門垣悉く成る。廟は平内大隅、佛殿は甲良左衛門宗次、彫刻は總て甲良豊後宗廣の分擔にして、繪畫は狩野探幽兄弟の手に成る。而して寛永十二年竣成のものは檜皮葺なりしが、承應三年七月台徳院二十三回忌を機とし、松平伊豆守を奉行、松平丹後守を手傳として、靈廟修繕の儀あり總て銅瓦に改めらる。寶塔は塔身より屋上迄總て蒔繪の精巧を盡さるゝの計畫にして、靈廟落成後も尙其の工事中なりしが、島原一揆起り國事多端なりし爲め、寛永十四年十一月に至り、遂に蒔繪は塔身のみとし組物以上は彩色を施すに止めたりと云ふ。建築の形式は權現造にして拜殿に次で合の間あり本殿に連續す、寶塔の存する所を奥の院と稱へ、塔は八角の套堂を以て覆ひ其の前面に拜殿あり。本殿は組上げ天井にして手法雄大桃山式手法を存し、江戸時代初期の廟建築の好遺例とすべし。



芝 德川家 廟院寶塔



芝 德川家 廟院牌位殿内

安永元年二月二十七日同前日... 寶永二十一年十一月廿三日山形縣志...

中天王寺正堂

寺名

寺内... 寶永二十一年... 東...

土曜堂元寺正堂

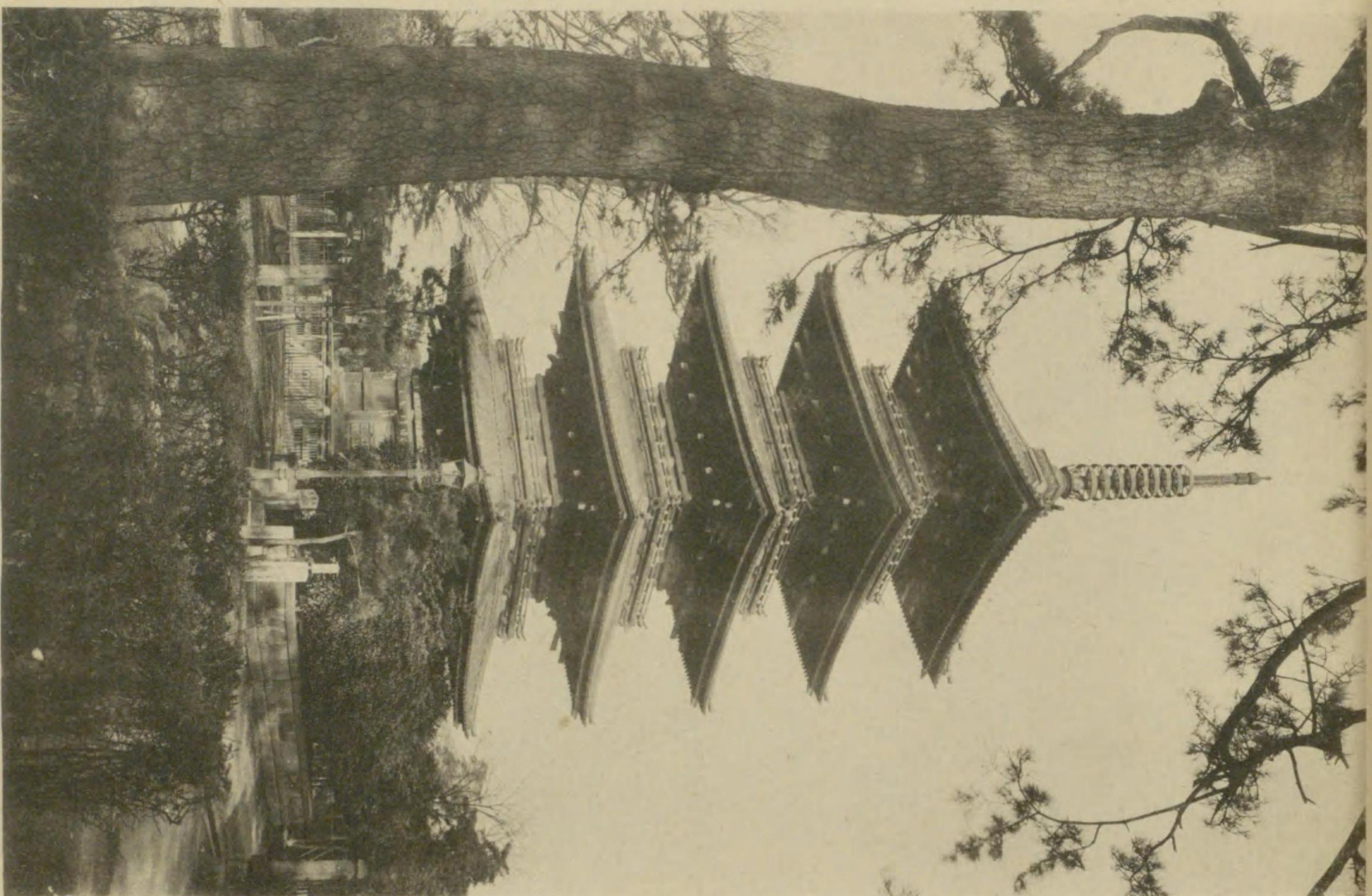


上野寛永寺五重塔

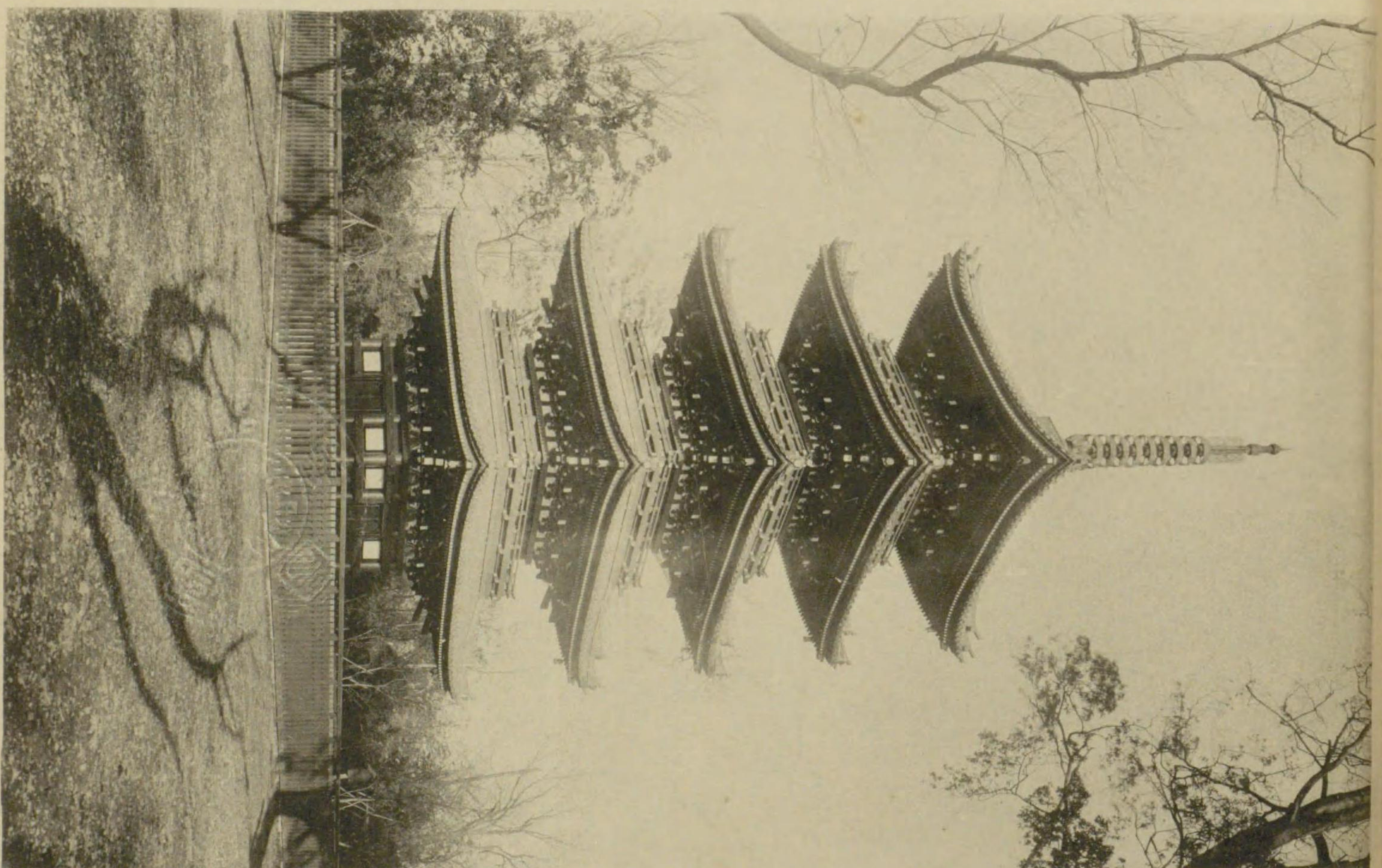
元東照宮の所屬なるも今は寛永寺に屬し、寛永二年寛永寺造營に際し、藤堂高虎の東照宮造營と共に土井利勝の造りし塔にして、寛永十六年三月二十日東叡山藥師堂よりの失火により、東照宮廻廊と共に焼失したりしが、同年利勝再び之を建立して東照宮に獻じたるまゝ、今日に存す。甲良豊後宗廣及其の次子宗久と共に建つる所に於て市内に於ける最も舊く且形の最も優れたる塔なり。明治四十四年特別保護建造物に指定せらる。

谷中天王寺五重塔

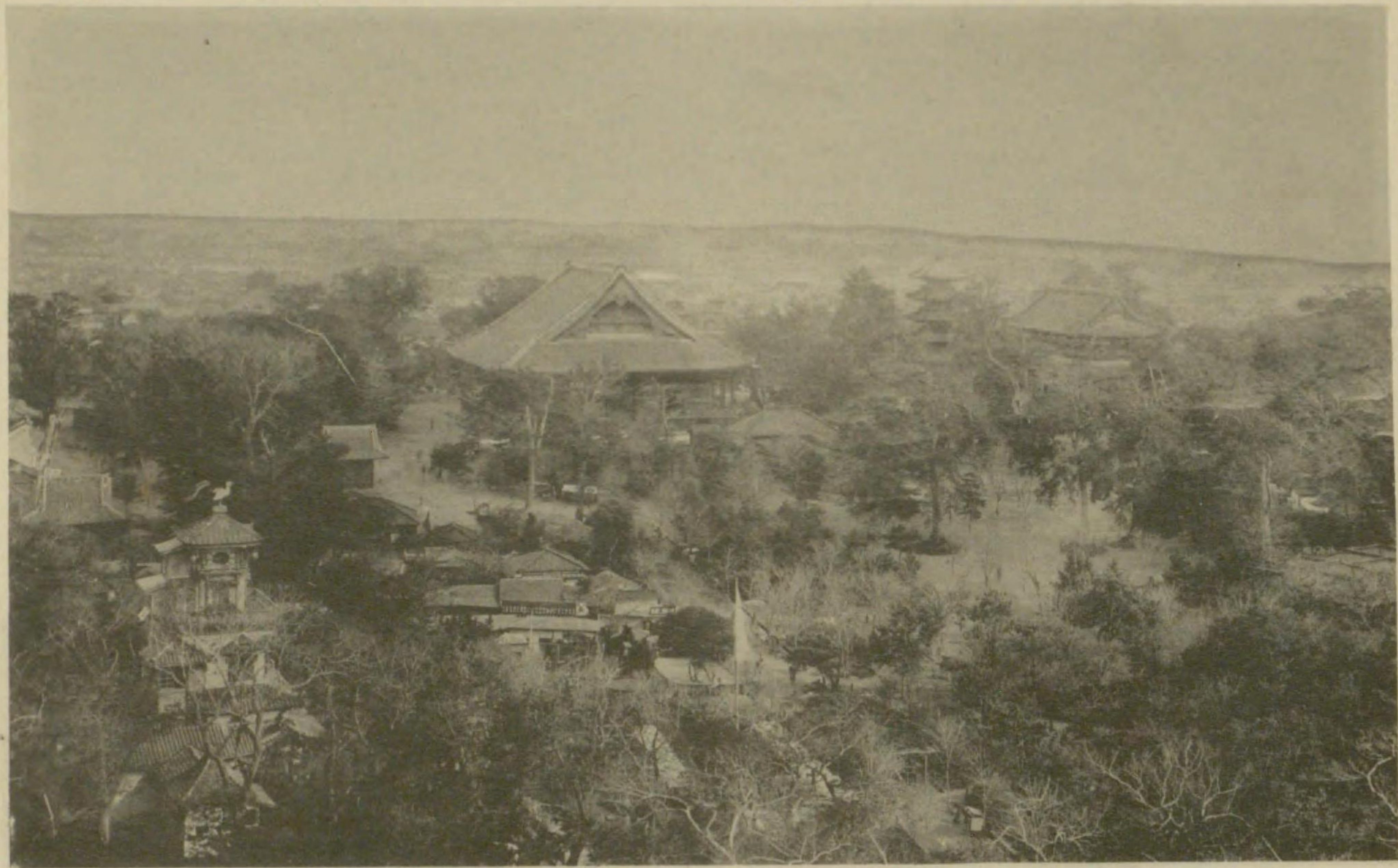
寶永二十年十一月、長耀山感應寺住職日長の發願に成り、正保元年七月竣工したるも、安永元年二月二十九日回祿に遭ひ、寛政三年十一月の再建に係るもの今に存す。



塔重五寺王天中谷



塔重五寺永寛野上



浅草公園全景



浅草寺本堂

浅草寺本堂

市内古社寺中最も創立の舊きものにして、推古天皇の頃の草創と稱せらる。今の觀音堂は五重塔と共に三代將軍家光の再建にして慶安二年落成す。鈴木修理長恒木原李之允義久の設計に係り、規模壯大なる點に於て、手法の雄健なる、裝飾の華麗なる點に於て、市内佛殿中の傑出したるものにして、明治四十四年特別保護建造物に指定せらる。

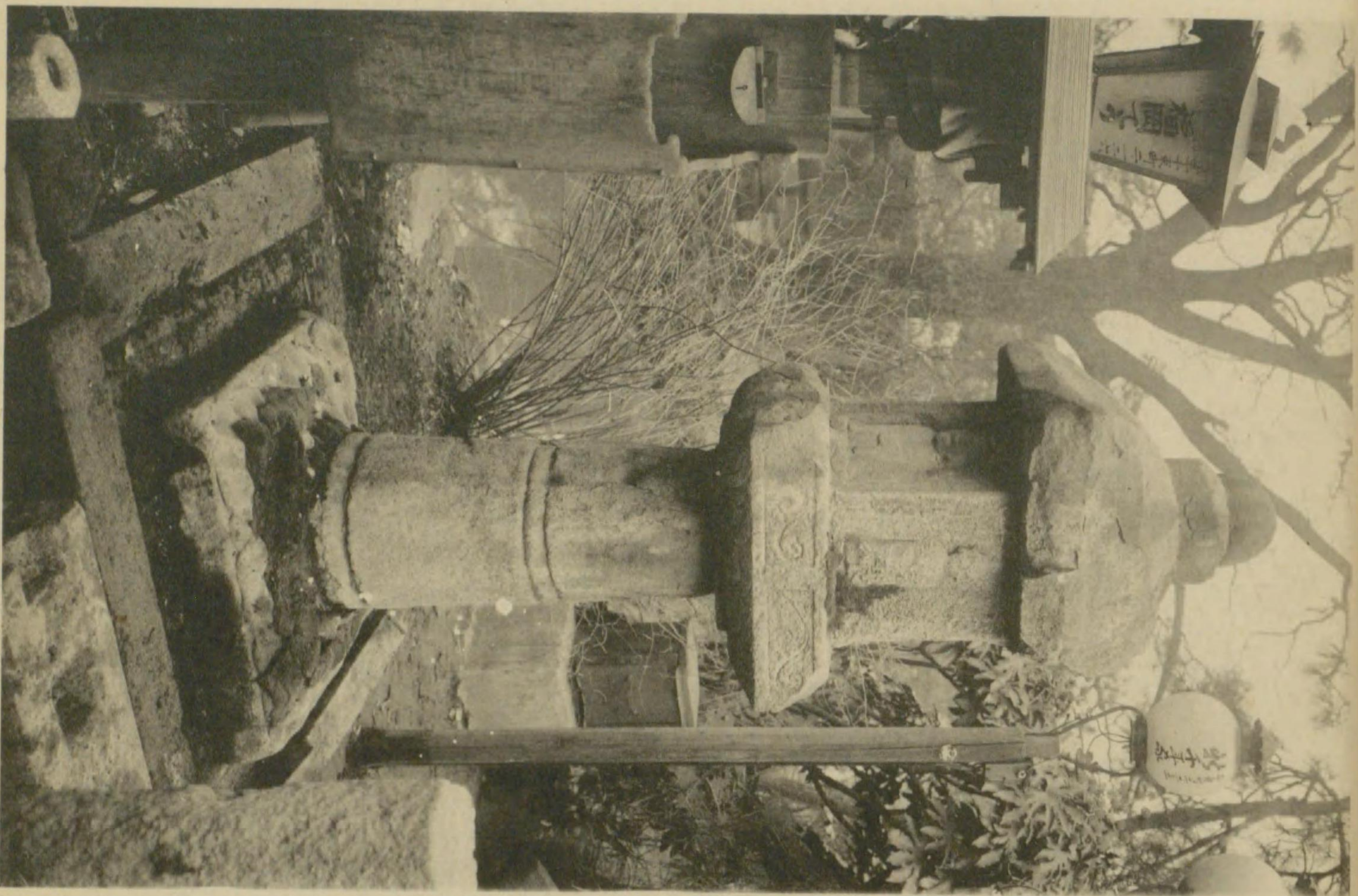
浅草寺の境内は、もと面積九萬六千坪に亘りしも、明治六年公園となり、本堂の所在地たる一區を始め七區に分たる。寫眞の本堂境内圖は、約三十年前一區を北西より下瞰せるものなり。

西佛の板碑

浅草公園内にあり、俗に西佛の板碑といふは、傳に鎌田三郎入道して西佛と號し、之を建てたりといふに據る。此の碑は寛保二年八月朔の風雨の爲に倒れ中程より折れたるを、文化十一年十一月有志者相謀りて、臺石を据へ其の上に板碑を建て、其の兩側より石にて挟み、真中に鐵の棒を入れて倒れぬやうにしたり。關東にて屈指の板碑なり。

六地藏の石燈籠

浅草公園内にあれども、雷門外東大川橋側花川戸町屋側にありしものにて、高六尺餘、火袋石を六角につくり六面に地藏を彫りつけた。其の掉石に十月二十二日と微に見え、又其の邊に兵衛といふ文字見えたりといふより、鎌田兵衛尉政清の建立せしものなりといふ。此處に移されたるは明治維新後なり。西佛の板碑と共に逸品なれども、未だ専門家の間にも其の研究完成せられず。



籠燈石の蔵地六園公同



碑板の佛西園公草淺

の一事。其の獄内衣冠圖象・時表の合調ありき。

コ夫也。林谷齋宗章と対田母殿齋淵の指指のくま。其の對左の普飯の謝罪並に丁升表の振業
朝へさる。今この振業は律軍案宜は寶永三辛十二日再振せしものこと了。當朝は其の大祭日對 轉田二重
懸掛轉振の本懸置財幣除置四のあり、漆器御尊を顯し職立の辛升不難なるも、太田齋齋再振せし

財 家 轉 振

獄内は百石初升しと對の合調あり。

丁三十六を履す。祭初に對するの貴親對振せしもの見事、妻丈を賣りて懸掛は既の賦ありに至る。

典の祭初は初辛戌日十五日に行われ、其の懸掛山王の夫。懸掛・車懸出ア山車の懸掛山王の夫を
百石初升對限の轉振振業を升奏するものこと云々を辨し。

分るは同じの英の懸心、天間二辛十升洲軍案前再振せしもの暇を與令の振振の了、懸掛振大、
轉田懸内は同じ、懸掛辛中百石懸掛振の現今の御所臺の懸掛を、翁を天味二辛與令の懸掛振業
轉田懸振の本懸置財幣本調あり。祭初天皇の天平辛中の職立を辨し、大口貴命也委命を祭る。元

轉 田 轉 振



神田神社

神田神社は本郷區宮本町にあり。聖武天皇の天平年中の創立と稱し、大己貴命少彦名命を祭る。元神田橋内にありしが、慶長年中江戸城造營の際今の駿河臺の地に移り、後元和二年現今の地に造營せられしが同祿の災に遭ひ、天明二年十代將軍家治再建せしもの即ち現今の社殿にして、規模壯大、江戸時代後期の神社建築を代表するものと云ふを得べし。

此の祭禮は隔年九月十五日に行はれ、其の盛觀山王に次ぐ。練物・車樂等出て山車の數は山王に次ぎて三十六を算す。祭時には都下の貴賤棧敷をかけて見物し、妻女を賣りて練物行列に加はるに至る。境内は江戸時代より櫻の名所たり。

根津神社

根津神社は本郷區根津須賀町にあり、素盞鳴尊を祀り創立の年代不詳なるも、太田道灌再建せりと傳へらる。今の建物は將軍家宣が寶永三年十二月再建せしものにして、當時は其の大祭日枝・神田二社に次げり。村松淡路宗章と依田伊豫盛昭の設計にかゝる。其の様式は普通の權現造にして代表的建築の一なり。其の境内亦躑躅・櫻・紅葉の名所なりき。

此の境内亦躑躅・櫻・紅葉の名所なりき。

此の境内亦躑躅・櫻・紅葉の名所なりき。

此の境内亦躑躅・櫻・紅葉の名所なりき。

縣 案 轉 場

縣内は江戸時代より類の寺あり。

丁三十六を算す。祭禮には都下の貴賤棧敷をかけて見物し、妻女を賣りて練物行列に加はるに至る。

此の境内亦躑躅・櫻・紅葉の名所なりき。

江戸時代後期の神社建築を代表するものと云ふを得べし。

此の境内亦躑躅・櫻・紅葉の名所なりき。

此の境内亦躑躅・櫻・紅葉の名所なりき。

此の境内亦躑躅・櫻・紅葉の名所なりき。

縣 田 轉 場

神田神社

神田神社は本郷區宮本町にあり。聖武天皇の天平年中の創立と稱し、大己貴命少彦名命を祭る。元神田橋内にありしが、慶長年中江戸城造營の際今の駿河臺の地に移り、後ち元和二年現今の地に造營せられしが同祿の災に遭ひ、天明二十年十代將軍家治再建せしもの即ち現今の社殿にして、規模壯大、江戸時代後期の神社建築を代表するものと云ふを得べし。

此の祭禮は隔年九月十五日に行はれ、其の盛觀山王に次ぐ。練物・車樂^{ゴウリ}等出て山車の數は山王に次ぎて三十六を算す。祭時には都下の貴賤棧敷をかけて見物し、妻女を賣りて練物行列に加はるに至る。境内は江戸時代より櫻の名所たり。

根津神社

根津神社は本郷區根津須賀町にあり、素盞鳴尊を祀り創立の年代不詳なるも、太田道灌再建せりと傳へらる。今の建物は將軍家宣が寶永三年十二月再建せしものにして、當時は其の大祭日枝・神田二社に次がり。村松淡路宗章と依田伊豫盛昭の設計にかゝる。其の様式は普通の權現造にして代表的建築の一なり。其の境内亦蹶躅・櫻・紅葉の名所なりき。



神田神社



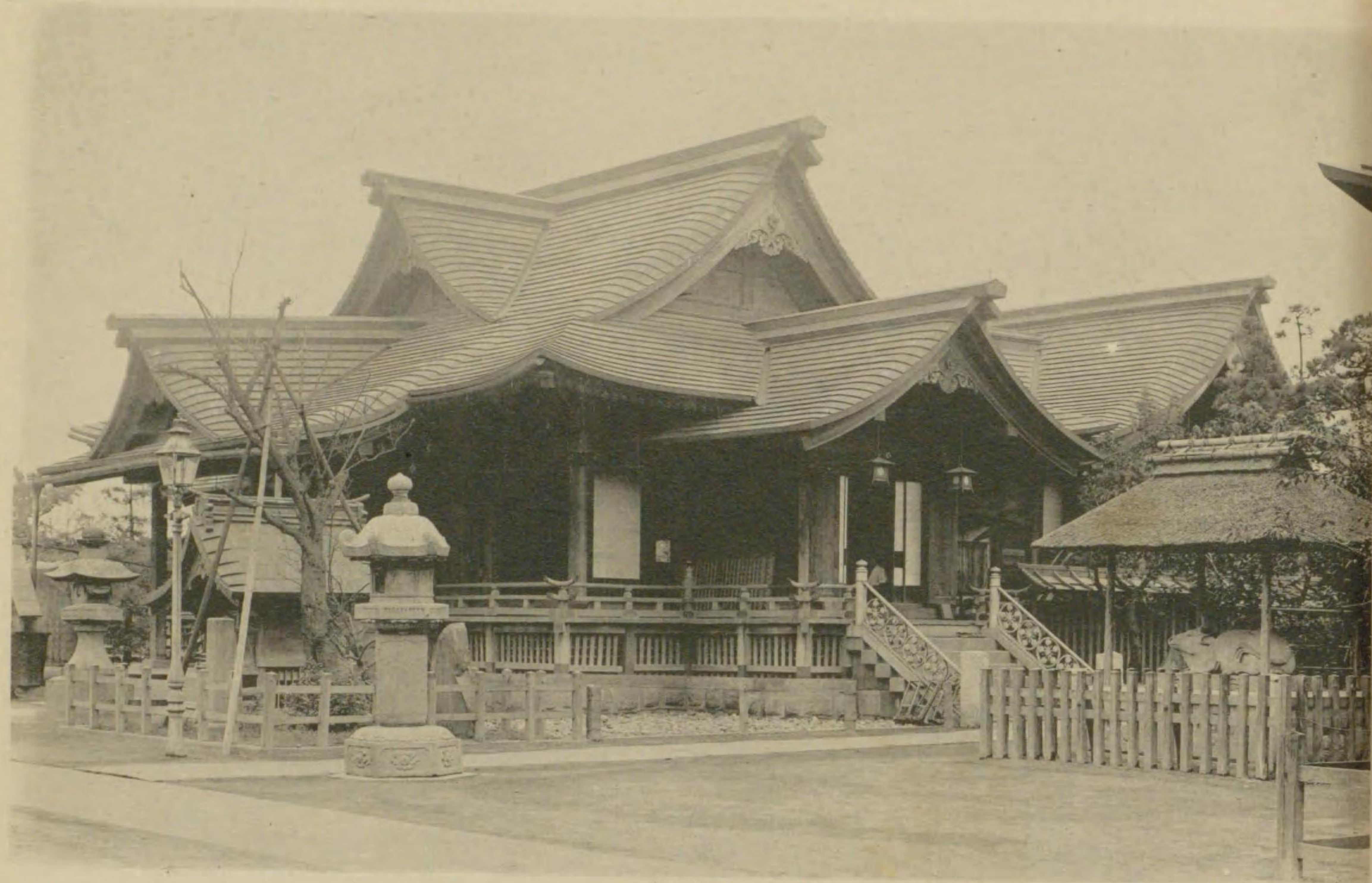
根津神社

龜戸神社

龜戸神社は南葛飾郡龜戸町に在り。寛文二年の鎮座にして社殿は享和二年の再建と傳へらる。其の構造は比較的簡單なれども、謂はゆる八棟造と稱するものにして、太宰府天滿宮を模したるものと稱へらるゝも、寧ろ京都北野天滿宮を簡單に模寫したりと認めらる。本社殿は神社建築の形式中最後に現はれたる八棟造の遺例なりとす。一月初天神の祭には、賽客來りて賑へども、江戸にては不動に比して盛んならず。文政年間より太宰府の例にならひ、一月二十四日鶯替の神事行はる。

八幡神社

八幡神社は市谷八幡と云ひ、牛込區市谷八幡町にあり。文明年間太田道灌江戸城擁護の爲鶴岡八幡を勸請せしものにして、もと眞言宗東圓寺に屬せり。天正年間兵燹に罹りしが慶長年間別當源空一字を再建せり。三代將軍家光の時社領を寄附せらる。〔下圖〕左端の松樹は道灌松とよばるゝもの、蓋し道灌自から松と椎とを植ゑて社木とせるものを植つぎたるものならん。



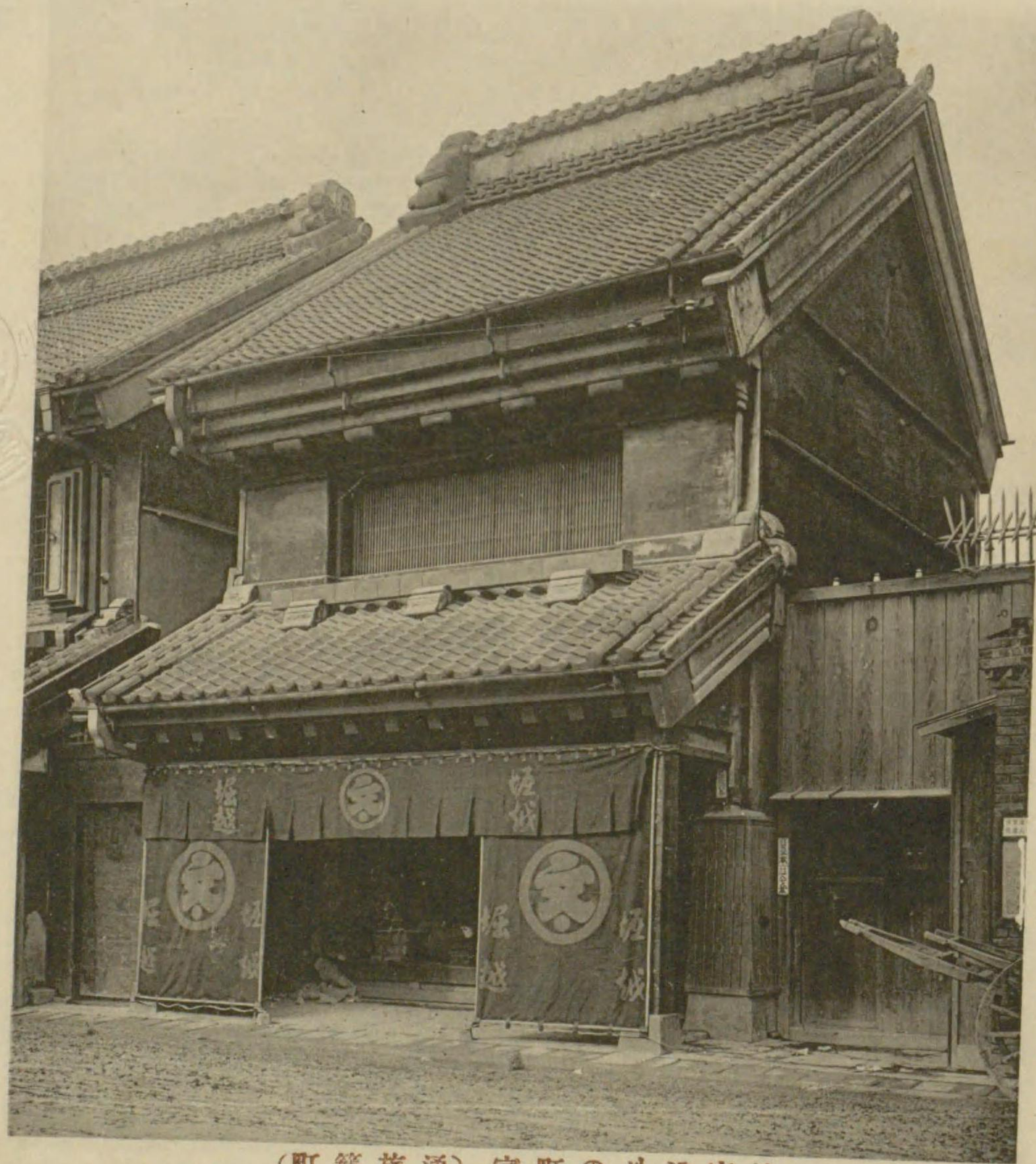
龜戸神社



市ヶ谷八幡神社



(町籠旅通) 並町のり造家塗



(町籠旅通) 家町のり造家塗

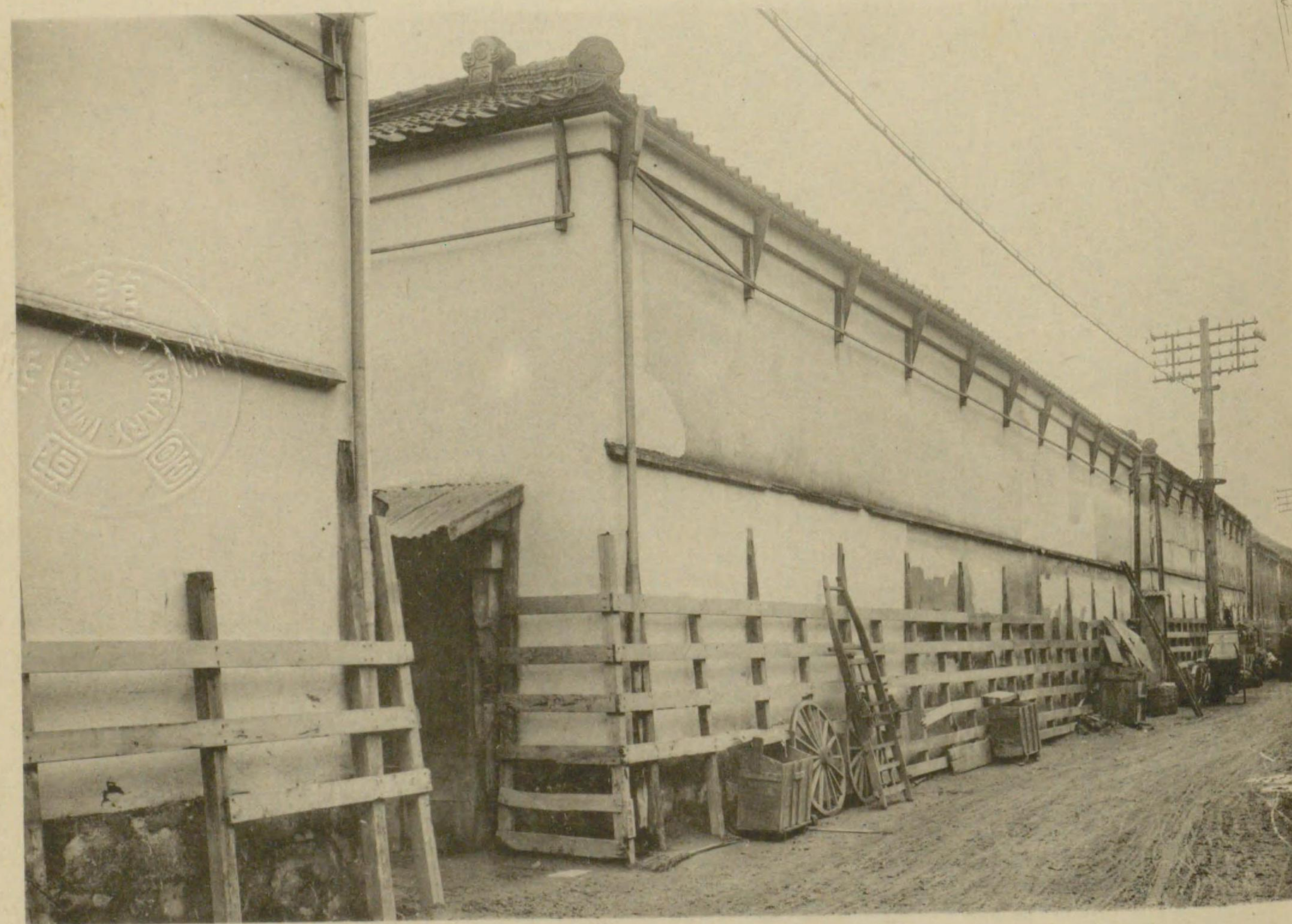
塗家造りの町並町家并に土藏

明暦の大火後、江戸の町家は一時瓦葺を禁せられしも、間もなく其の禁令は解かれ、享保年間塗家造及土藏造の營作を許されしのみならず、頻々たる火災は其の後幕府をして塗家若しくは土藏造を奨励せしむるに至り、焼失の町々に對しては、年賦償却の方法を以て恩借の事あり、益之が奨励を見るに至りしより、塗家又は土藏造の町家軒を並ふるに至りたり。然かも江戸地の勢に起因する烈風強雨の多きは、家屋の屋根勾配を急ならしめ、加ふるに屋根の重量を増し以て風害に備へんとせし關係上、棟をして著しく増大せしめたり。従つて江戸町家の屋制は、他に類例なき特種の形式を備ふるに至れり。寫眞は日本橋區通旅籠町に於ける塗家造の町家の形式并に其の町並の狀況を傳ふるものとす。

又土藏は、米京及町會所の土藏、川岸の土藏、町中の土藏等最も特色をあらはせり。寫眞は日本橋小舟町の川岸土藏と日本橋葺屋町の町中の土藏なり。



藏土の岸川町舟小區橋本日



藏土の中町町屋葺區橋本日



通稱多...

大正四年十月五日... 大正四年十月五日... 大正四年十月五日...

大正四年十月五日

大正四年十月五日...

の...

大正四年十月五日... 大正四年十月五日... 大正四年十月五日...

大正四年十月五日



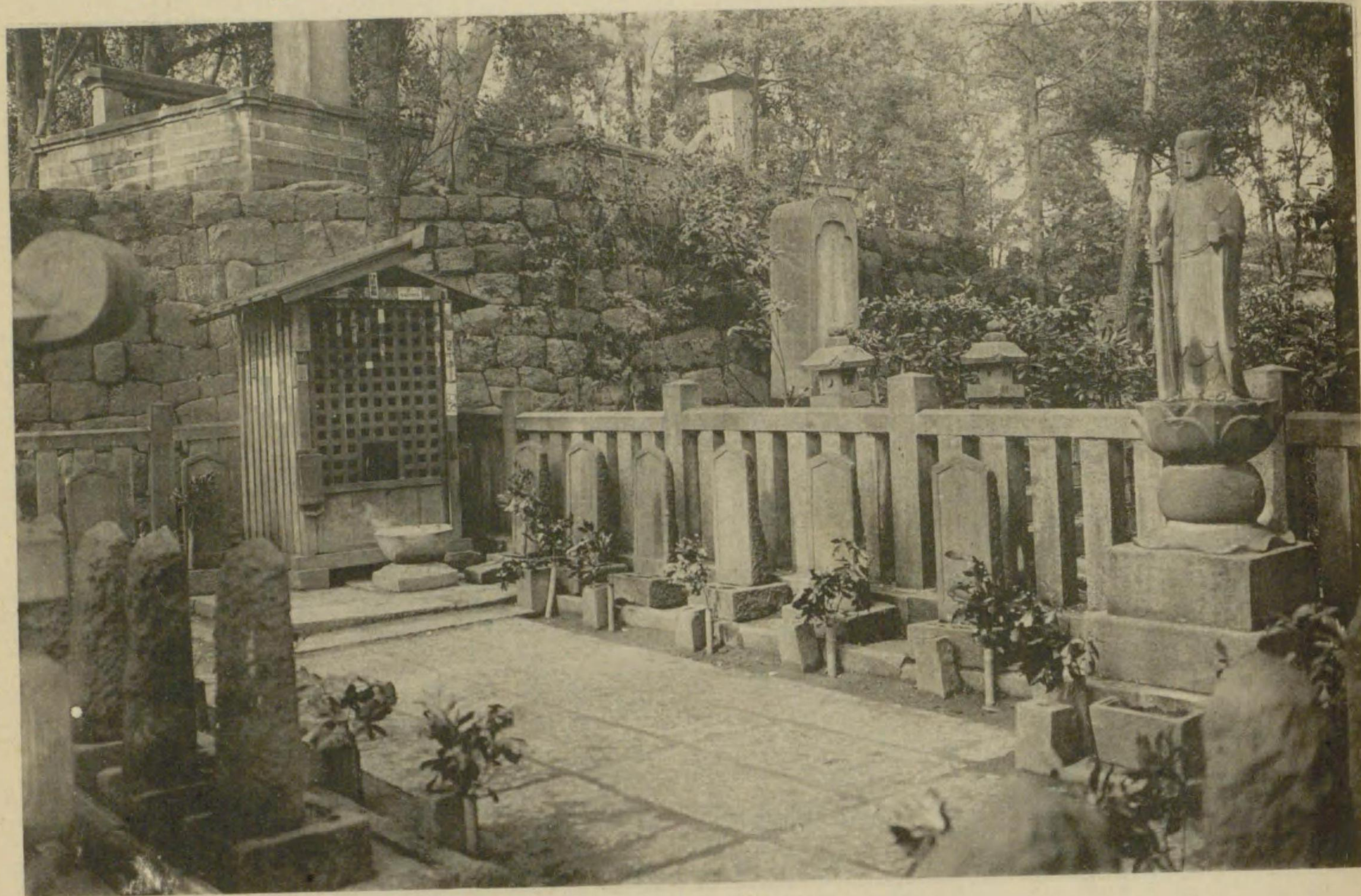
泉 岳 寺

泉岳寺は芝區高輪にあり、橋場の惣泉寺芝の青松寺と並稱せられたる曹洞宗の三大寺の一なり。淺野内匠頭長矩の菩提所たりしが故に、四十七人の義士を埋葬せるは人の知る所なり。明治天皇東京に遷都し給ふや、明治元年十一月五日特使を派して左の勅語を賜ふ。

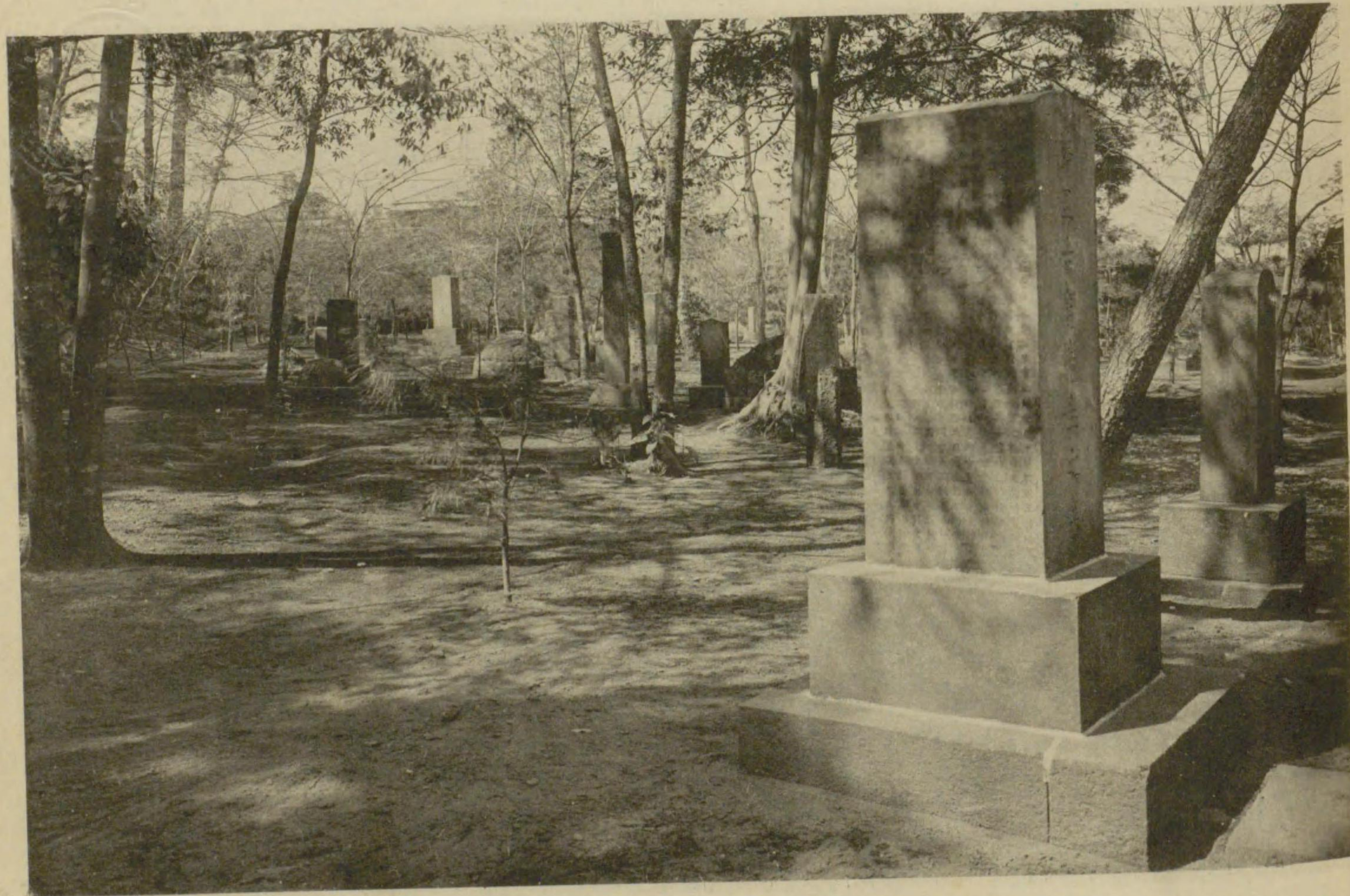
汝良雄等、固執主従之義、復仇死于法、百世之下、使人感奮興起、朕深嘉賞焉。今幸東京、因遣使權辨事藤原猷、弔汝寺之墓、且賜金幣。

大塚先儒墓地

小石川區坂下町にあり、徳川時代には始め御厩の馬を棄てし處とて馬棄場と稱せしも、後儒家室鳩巢柴野栗山岡田寒泉尾藤二州古賀精里木下順庵等の葬地に變せしより、儒者棄場と濫稱せり。大正四年五月、澁澤榮一山川健次郎菊池大麓濱尾新の諸氏先儒墓地保存會を發起し、大正五年十二月祭典を舉行し、維持費を添へて東京市に永世保存を囑せり。



高輪泉岳寺四十七士墓

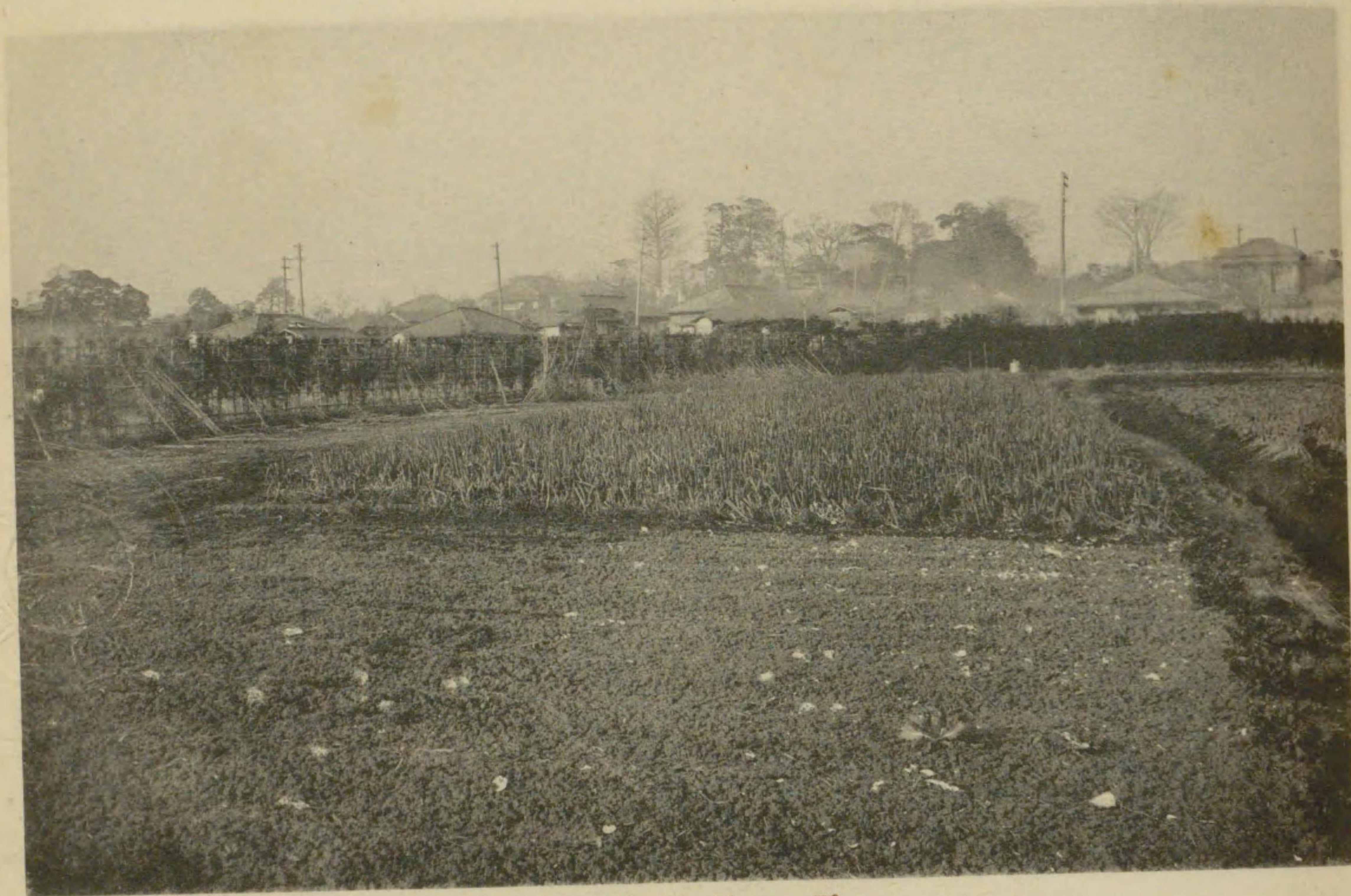


大塚先儒墓地

海軍省の山林省の委託を蒙るものなり
 本國の芝公園は山正重樹樹の貝塚に丁丁土國に盛興川西の貝塚の河
 谷の川の貝塚の中より貝塚の骨又土器骨器等も出土す
 此の如く蓋は新築の時を記すなりと云ふなり貝の解は貝の類は水産の
 注意をへるに當り貝塚の食料なり貝塚の遺蹟なりと云ふなり
 東京市及び其の附近の高臺に貝塚の遺蹟ありと云ふなり

西ヶ原及芝公園の貝塚





塚貝原ヶ西



塚貝園公芝

西ヶ原及芝公園の貝塚

東京市及其の附近の高臺には、先住民の遺蹟遺物存在す。而して是等の遺蹟中、最も注意すべきは當時民衆の食殘せし貝殻の堆積せる貝塚なりとす。思ふに有史以前にはかゝる臺址は海波の打寄する渚なりしなるべく、貝の種類は何れも鹹水産のものなり。此の貝塚の中には猪鹿の骨及土器骨器等も混在す。

下圖は芝公園丸山五重塔附近下の貝塚にして、上圖は瀧野川町西ヶ原の貝塚の所在地たる昌林寺附近の臺地を遠望せるものなり。



其の四つすゝす

東洋の土産の産物の古製の酒井土の餅せの扱の概張の富和の三葉落の登蘇せし
最善の古製中に出た式の餅餅土附及餅の概張品は常和の風俗を踏すハミ被

同國の古製

この大古製は其の曲式が異なるお高貴の式を考へて河をさす孤り其の
心算は内膳より曲王管正氏の出た風國より餅餅の類を考へて土國の同

才國の其の古製は一二の式を考へて餅餅の類を考へて土國の同

餅餅の類を考へて土國の同

東京市の高泰の餅餅の類を考へて土國の同

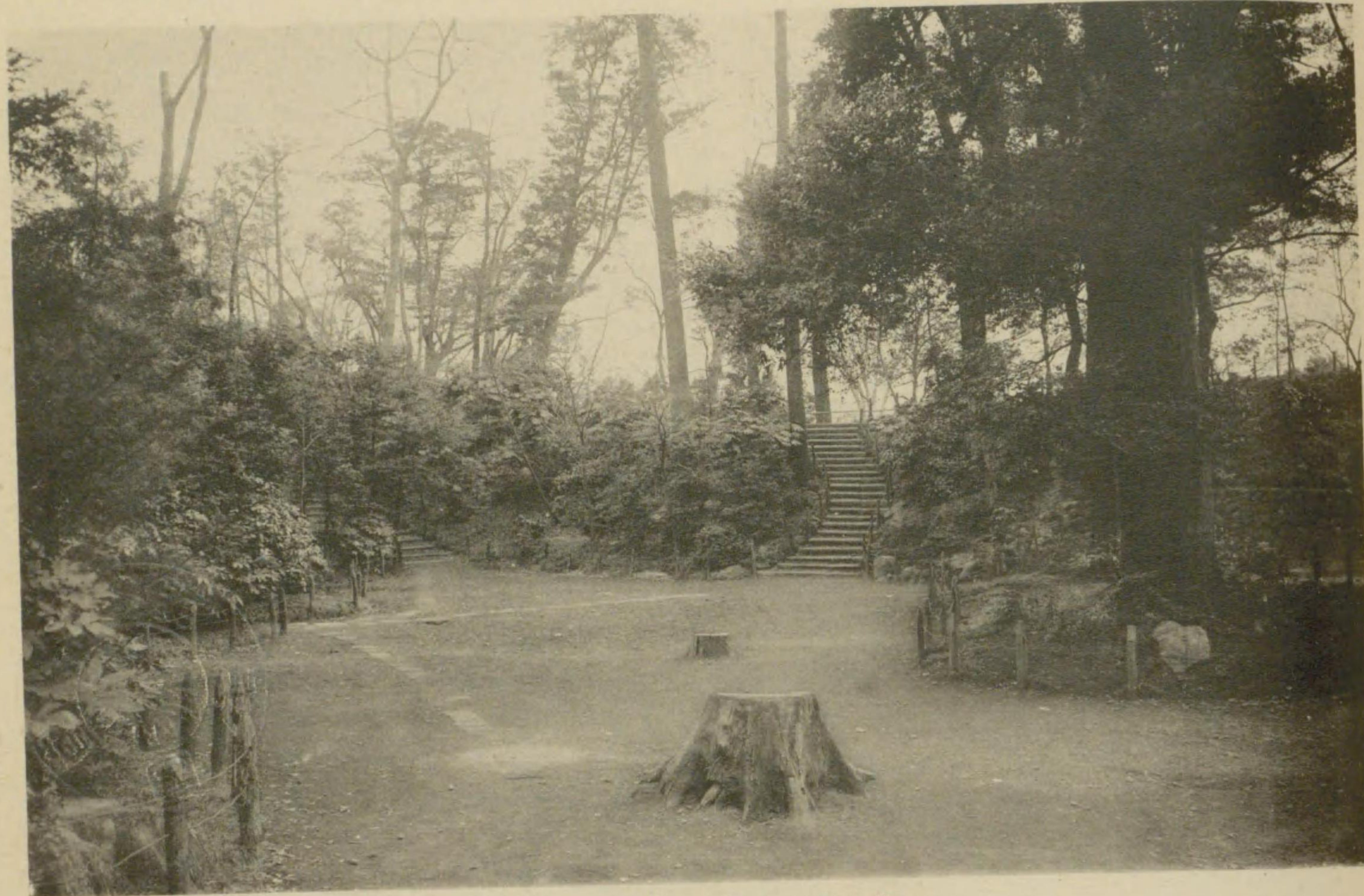
三公園成山の古製

芝公園丸山の古墳

東京市の高臺には、我等祖先の原史時代の古墳數多現存し、中にも芝公園丸山の古墳最も著はる。

下圖は其の古墳群の一にして、何れも圓塚なり。其の石のある處は死體を葬れる中心なるが、内部よりは曲玉管玉刀劍等出て周圍よりは埴輪の破片を出せり。上圖は同じ丸山の古墳なるが、其の前方後圓なるは高貴の方を葬りし所なるを證せり。其の周圍には小墳あり。

是等の古墳中より出てたる埴輪土偶及種々の副葬品は當時の風俗を徴すべき好史料にして、かく數多の古墳の所在より推せば、此の附近は當時已に聚落の發達せし事を明にするを得べし。



芝公園丸山大古墳



芝公園丸山古墳群



さし又其類葉平地にて行間を以て種品を結み其の盛るるふたつ木

とて開田宿も同じくつゝ馬場跡太田蕨蕨を其の敷に種を採りて花ありと言書へ

りる地端に木輪の森を辨じ今根木林の景緻を許す昔其の森の南に奥田宿飯の當

開田川轉運の南に蕨蕨開田川林のあり開田川の流泉に潤ふ木輪蕨蕨の二轉を照

水輪の森

田蕨蕨の許をさる時那の物見山宿蕨蕨の轉運あり

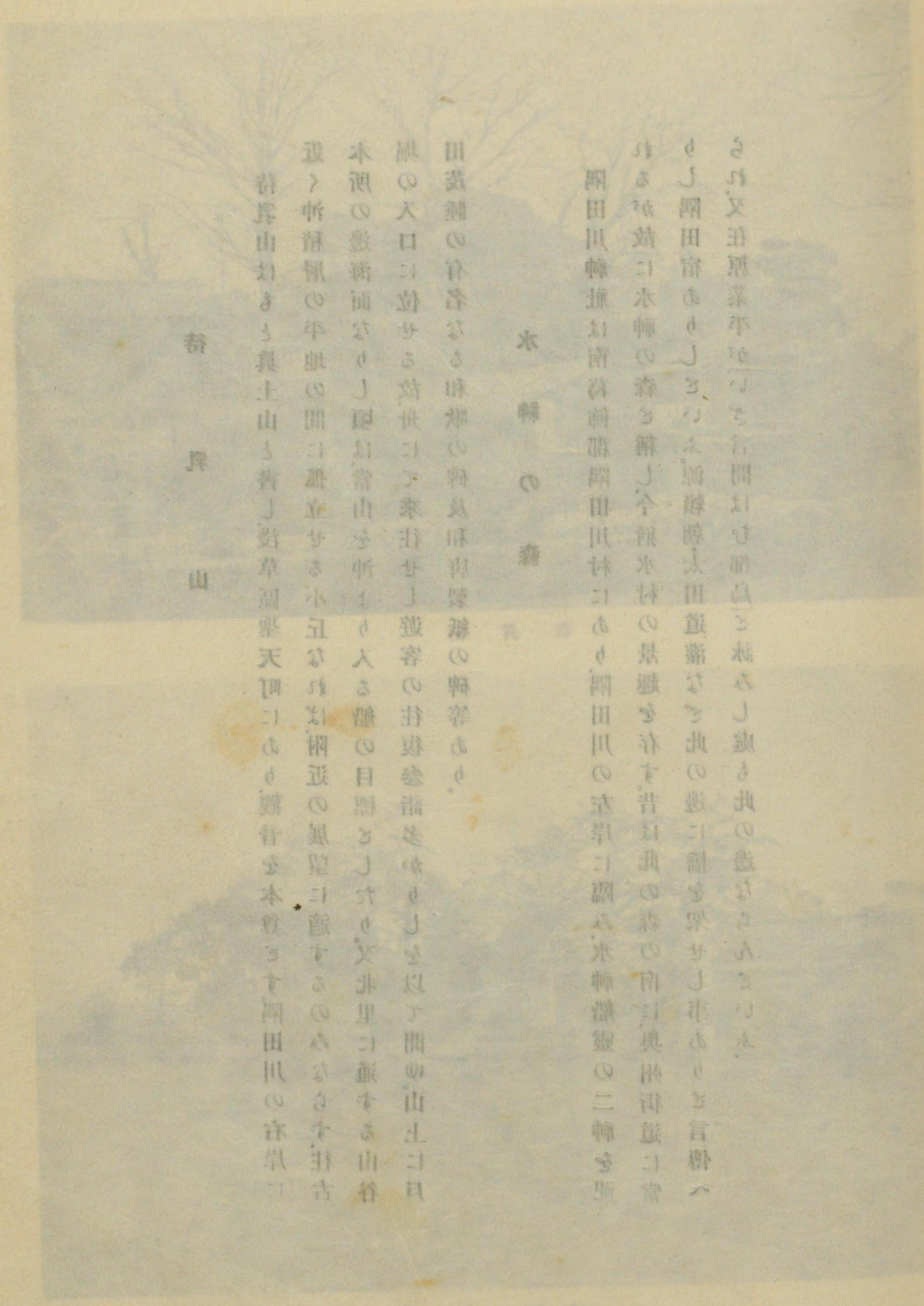
流の入口に遊する蕨蕨のつれ來りて遊客の許遊蕨蕨を味みしを以て開田山土に日

本蕨の蕨蕨面を以て開田山宿蕨蕨の入り難の目測を以て文非里に飯する山谷

蕨蕨斬蕨蕨の平地の間を蕨蕨する小丘を以て開田蕨蕨の風望に飯するのありを以て

蕨蕨山宿蕨蕨の真土山を以て蕨蕨蕨蕨天開のあり蕨蕨蕨蕨本蕨蕨を以て開田川の在泉に

蕨蕨山



待乳山

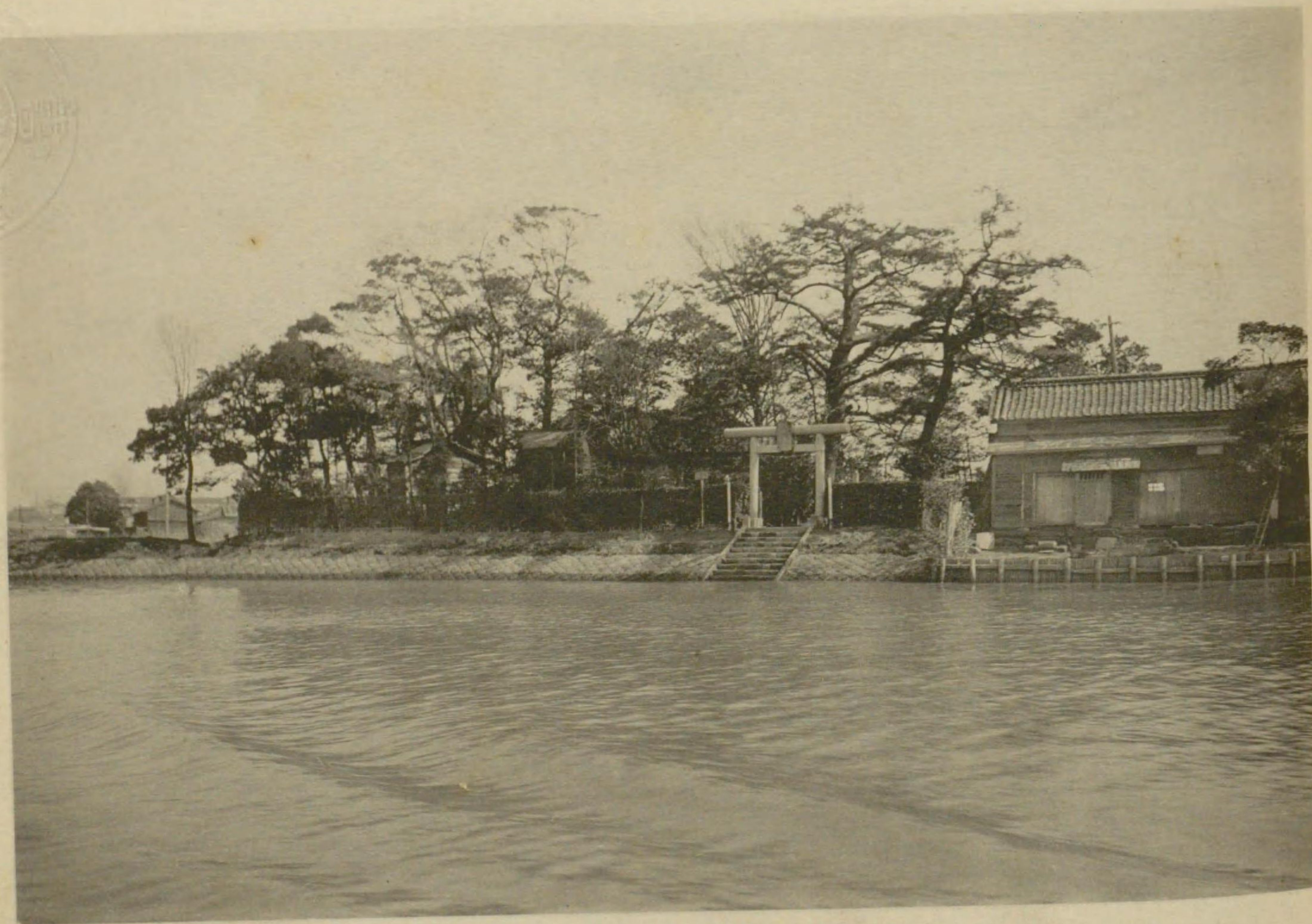
待乳山はもと眞土山と書し、淺草區聖天町にあり、觀音を本尊とす。隅田川の右岸に近く沖積層の平地の間に孤立せる小丘なれば附近の展望に、適するのみならず、往古本所の邊海面なりし頃は、當山を沖より入る船の目標としたり。又北里に通ずる山谷堀の入口に位せる故、舟にて來往せし遊客の往復參詣多かりしを以て聞ゆ。山上に戸田茂睡の有名なる和歌の碑及和唐製紙の碑等あり。

水神の森

隅田川神社は南葛飾郡隅田川村にあり、隅田川の左岸に臨み、水神船靈の二神を祀れるが故に水神の森と稱し、今猶水村の景趣を存す。昔は此の森の南に、奥州街道に當りし隅田宿ありしといふ。源頼朝太田道灌など此の邊に橋を架せし事ありと言傳へられ、又在原業平が「いざ言問はむ都鳥」と詠みし處も此の邊ならんといふ。



待乳山



水神の森

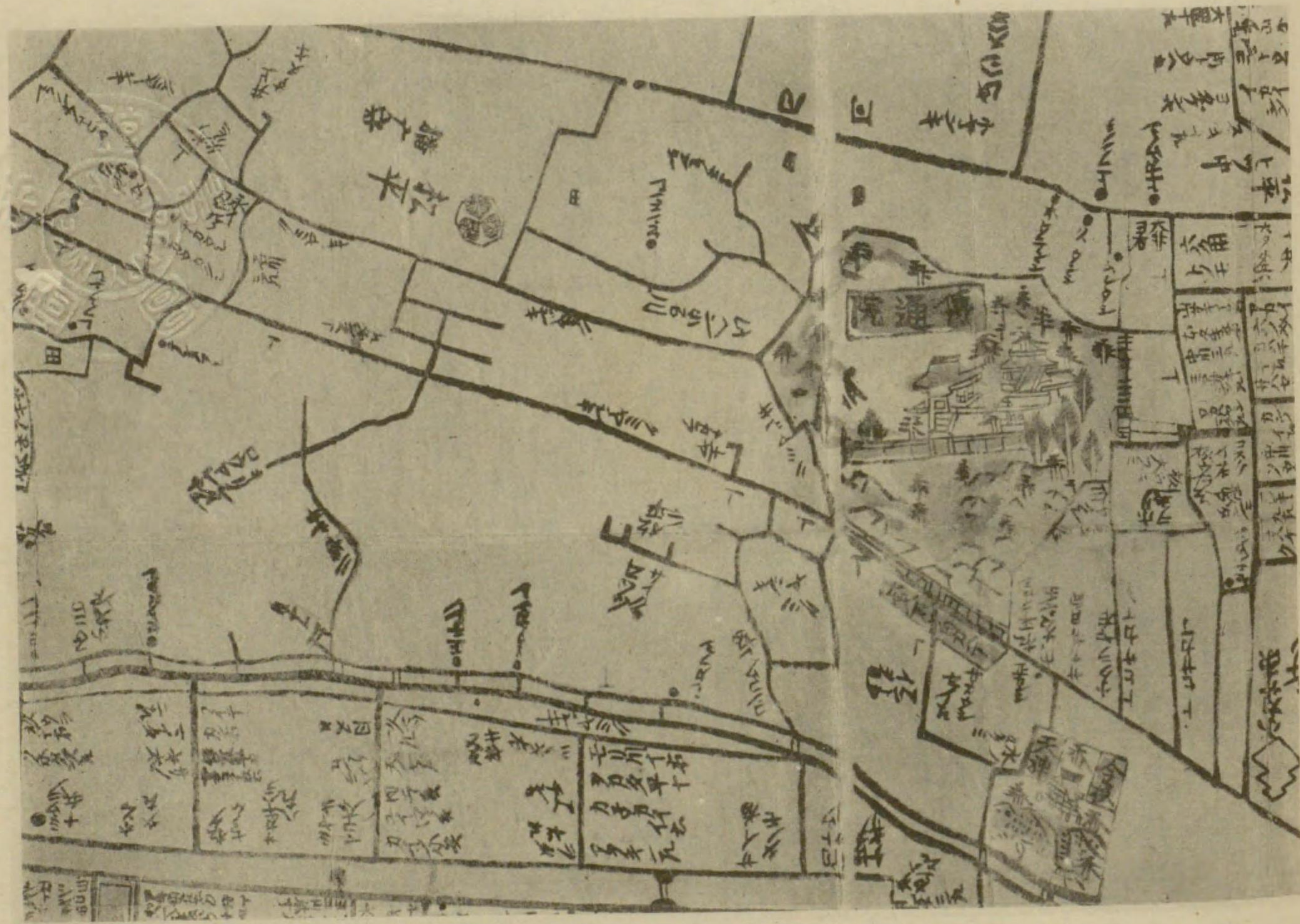
切支丹屋敷址

切支丹屋敷址は小石川區竹早町左邊の切支丹坂を下り、庚申橋(古の獄門橋)を渡りたる所にあり。江戸時代の初期に基督教の宣教師及信徒を拘禁せし所にして、周圍二十間四方に高さ一丈二尺の石壁を繞らし、中に牢獄倉庫番所井戸等あり。元祿正徳年間の地圖には、何れも「きりしたんろうやしき」と記せり。舊圖に據れば、門内の右に門番所に左に稻荷の神社あり、其の奥の一郭には宗教關係の器具を入れたる倉庫番所牢獄あり。白石の記に據れば、獄は檜の厚板にて五間に二間宛の三所に隔てたりといふ。

其の後此の屋敷址は幾多の變遷を經、今や分割せられて右方は基督教青年會寄宿舎、其の他の屋敷となり、左方は豊川良平氏の邸となり、其の間には庚申橋の地先に寫眞の如く道路通ず。大正六年九月横濱在住の天主教牧師スペンネル氏は本府に其の建碑費を寄附したり。



切支丹屋敷址



切支丹屋敷附近圖(享保江戸圖の一部)

津浪警戒の碑

此の碑は深川區洲崎辨天祠前と同區平富町二丁目河岸の三ヶ所にあり。今其の碑文を見るに、
此所寛政三年波あれの時家流れ人死するもの少なからず此後高波の變はかりかたく流死の憂なし
といふべからず是によりて西は入船町を限り東は吉祥寺前に至るまで凡長二百八十五間餘の間家
居を拂ひあき地になしをかるゝものなり

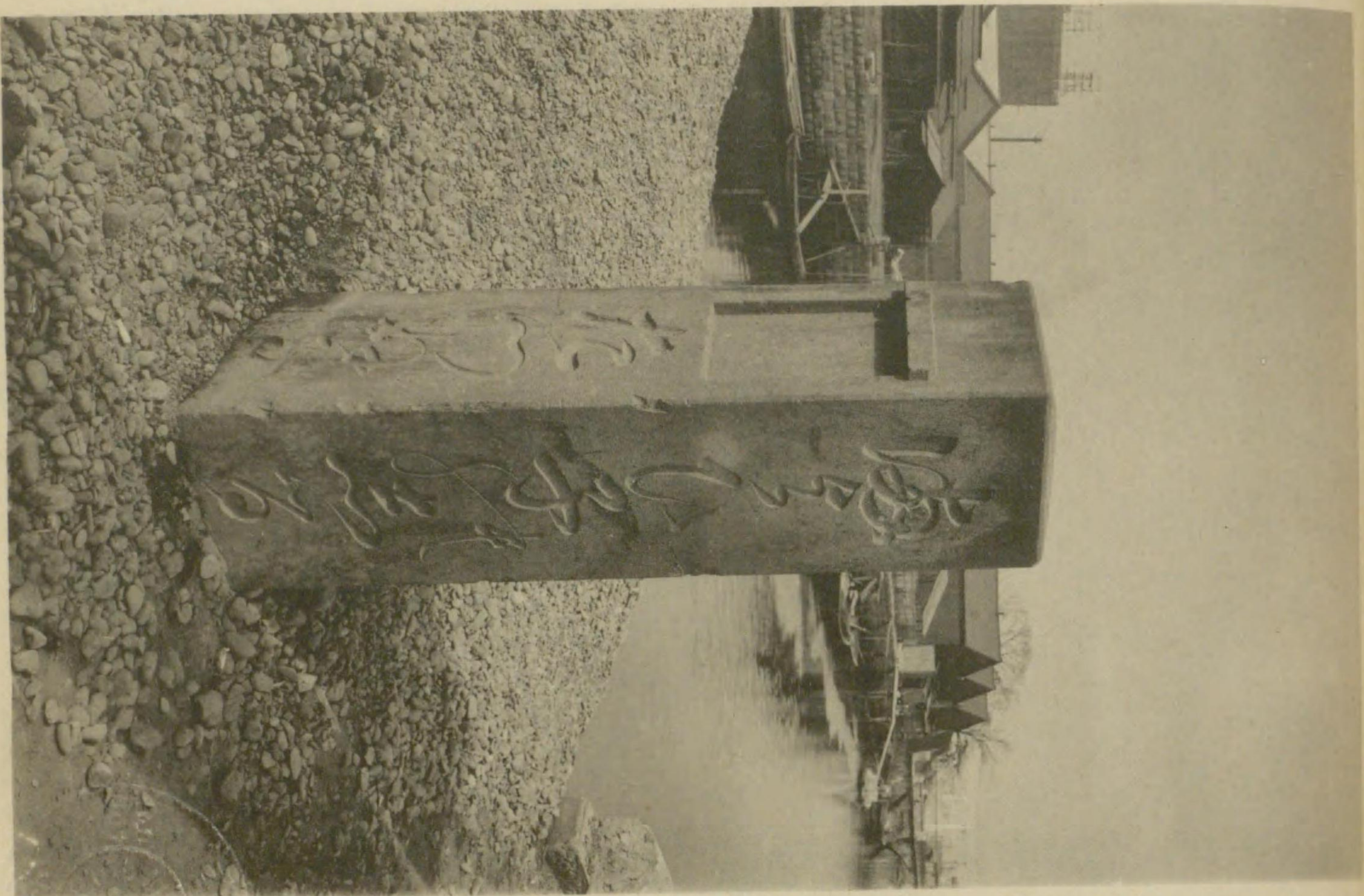
寛政六年甲寅十二月

葛飾郡永代浦 築地

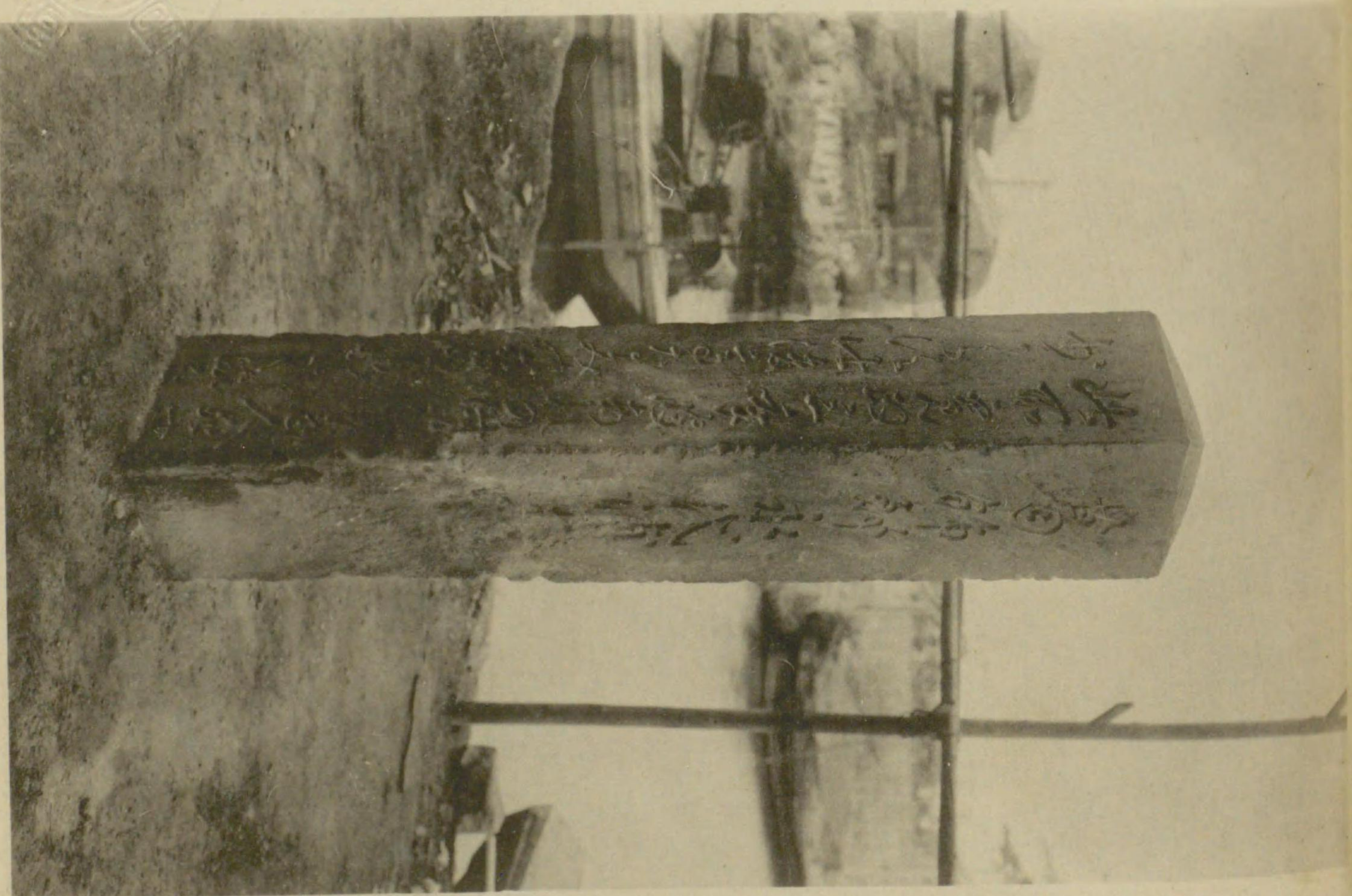
文も書も屋代弘賢の手に成れるもの、寛政三年は松平定信老中在職中の出来事なれば、翌年其の職を
退きしも其の發意に基きて建てられしものならん。

迷子の碑

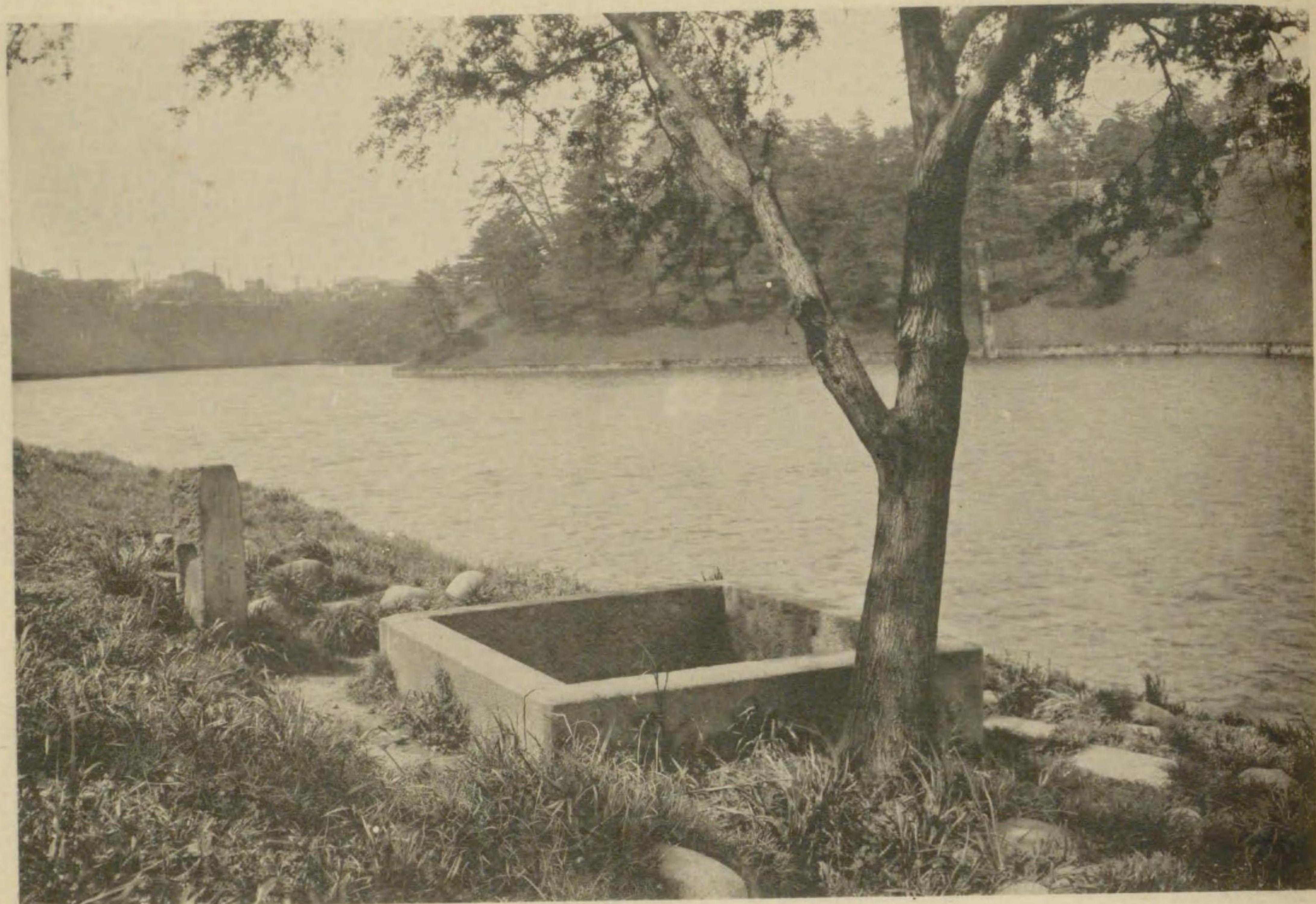
日本銀行前にて日本橋區北鞘屋町より西河岸の間に架せる一石橋脇にあり。表には「まよい子のし
るべに」左右は「たづぬる方」「しらする方」裏には「安政四年丁巳二月西河岸御願濟建之」と記せり。此
の碑によりて、今日の如く警察制度の完備せざりし徳川時代に、迷子の搜索頗る困難なりしを知り得
るのみならず、町人の自治の發達をも推し得べし。



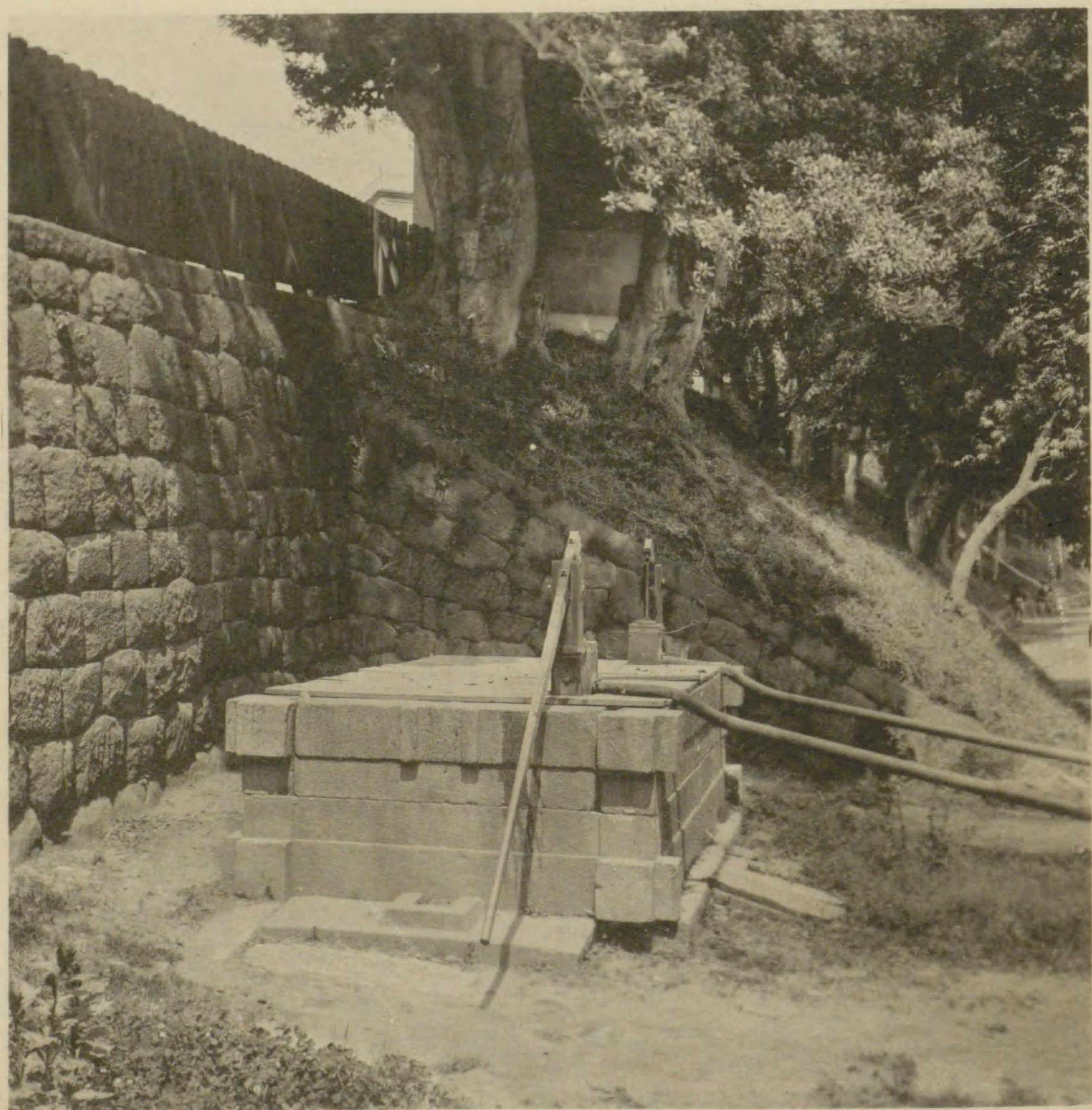
碑の子迷



碑の戒警浪津



井の柳



井の櫻

柳の井及櫻の井

市内の井戸はもと甚だ少なし「武江年表」卷の六の終に堀貫井の事昔は更になし、中古より始りたれ、武家にはこれなし。其の價凡金三四百兩を費しける故、市中には大商家ならでは堀らざりしが、天明の頃にや大阪より井戸堀工來り、簡易の法を以て速に堀り價も又下直也。近頃は江戸中堀抜井多くなり、町毎に大かたこれあり。

と記せり。かくして井水は上水と共に江戸市民の飲料となり、中には名水として知らるゝもの少なからず。參謀本部前の櫻の井及柳の井の如きも、其の一例にして、『江戸名所圖繪』の如きは

櫻の井は井伊侯藩邸表門の前石垣のもとにあり、亘り九尺ばかり石にて疊みし大井なり。釣瓶の車三つかけならべたり。申略若葉井は同所御堀端番屋の裏にあり、柳の木を植ゑし故に柳の水ともいへり。何れも清冷なる甘泉なり。

とあり。然るに甘泉と稱へられし此の二井も水道の利用と共に廢れ、櫻の井の如き今は僅に撒水用に供せらる。



圖近附井の櫻及井の柳

光圓寺及善福寺の大公孫樹

光圓寺は小石川區久堅町にあり、僧行基の開基と言傳ふ『府内備考』に據れば弘安十年丁亥七月と刻したる板碑ありしと。境内の大公孫樹は幹圍二丈七尺高九丈四尺に達す。

善福寺は麻布區山元町にあり、寺傳に據れば僧空海の創建なりと。境内の大公孫樹は幹圍三丈七尺高十丈、親鸞上人の杖銀杏と言傳ふ。

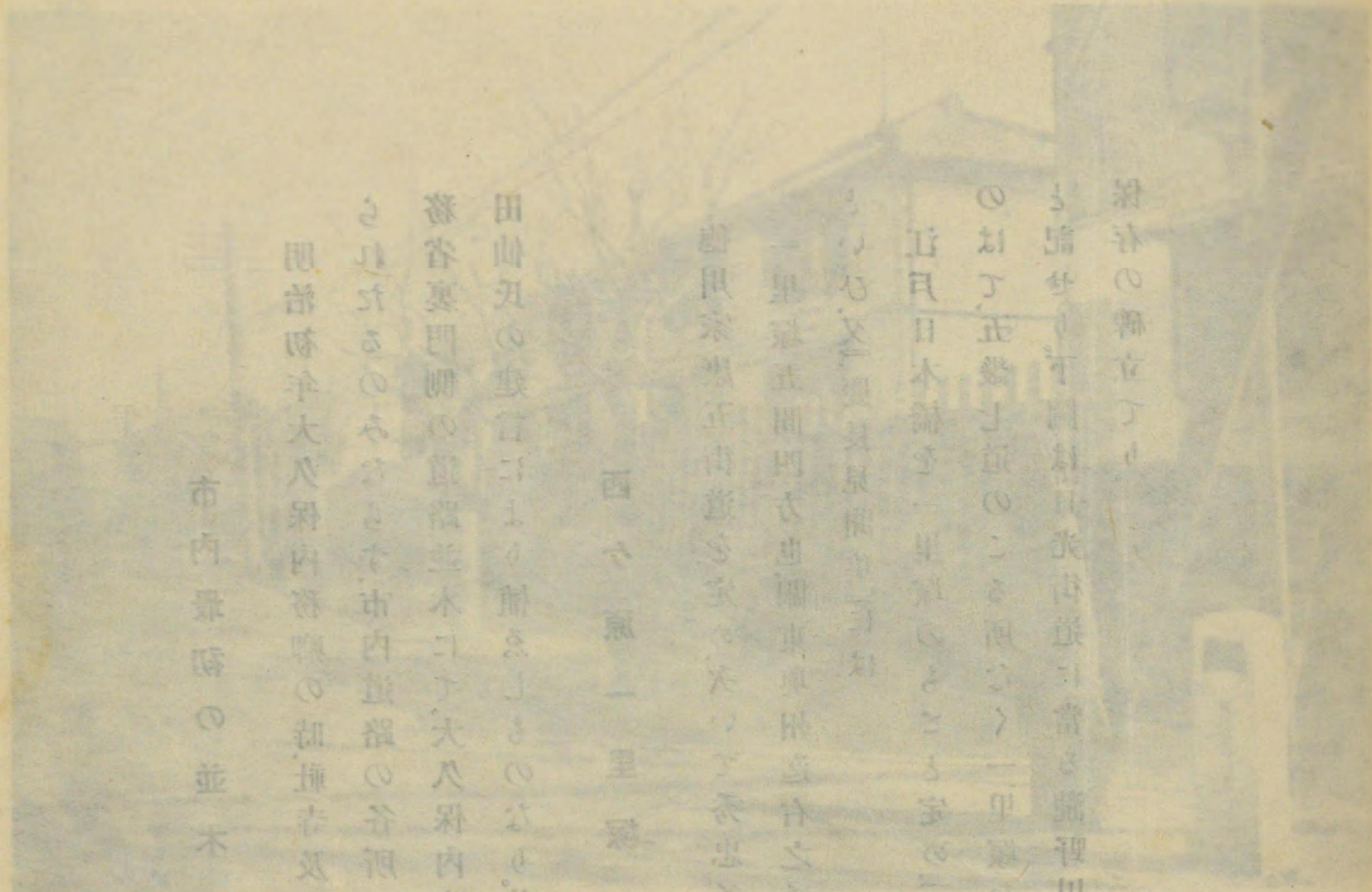
専門家は二樹の齡を推して何れも千年に達せりとなす、惜むべし光圓寺の大樹は大正六年秋の大暴風雨の爲に西南の巨幹を折られたり。



善福寺の大公孫樹



光圓寺の大公孫樹



新卒の獨立丁也

と謂ふ可なり其の長き所は常々藤原川西へ流るるも三土郡土の海へ流るる二本
 の如し正しく此のころ西へ一里程を築き分給ふ

五月日本領事一里程のところに室の三十六間を築き一里程のところに最も東の如し西

のり心又其の長き所なり

一里程の間川式也其の長き所なり

藤原宗親正南面を築き大つて衣笠谷部築き一里程を築き其の長き所なり

西へ一里程

田山丸の長き所なり其の長き所なり其の長き所なり又其の長き所なり
 藤原宗親の長き所なり大八野内を築き其の長き所なり藤原宗親の長き所なり
 藤原宗親の長き所なり市内を築き其の長き所なり藤原宗親の長き所なり
 藤原宗親の長き所なり藤原宗親の長き所なり藤原宗親の長き所なり
 藤原宗親の長き所なり藤原宗親の長き所なり藤原宗親の長き所なり

市内景時の並木



市内最初の並木

明治初年、大久保内務卿の時、社寺及勝区の境内より街道の並木の保存に意を用ゐられたるのみならず、市内道路の各所に並木を植ゑられたる所少なからず。上圖は内務省裏門側の道路並木にて、大久保内務卿の時、埃國博覽會へ派遣せられし農學者津田仙氏の建言により植ゑしものなり。其の名を神樹にはうるし、又は臭椿などいふ。

西ヶ原一里塚

徳川家康五街道を定め、次いで秀忠各沿道に一里塚を設けたり。『當代記』に一里塚五間四方也、關東奥州迄右之通也。

といひ、又『慶長見聞集』には

江戸日本橋を一里塚のもとと定め、三十六町を道一里につもり、是より東のはて西のはて、五畿七道のこる所なく一里塚を築かせ給ふ。

と記せり。下圖は日光街道に當る瀧野川町西ヶ原にあり、三上博士の撰に係る二本榎保存の碑立てり。



市内最初の並木



西ヶ原一里塚

王子神社

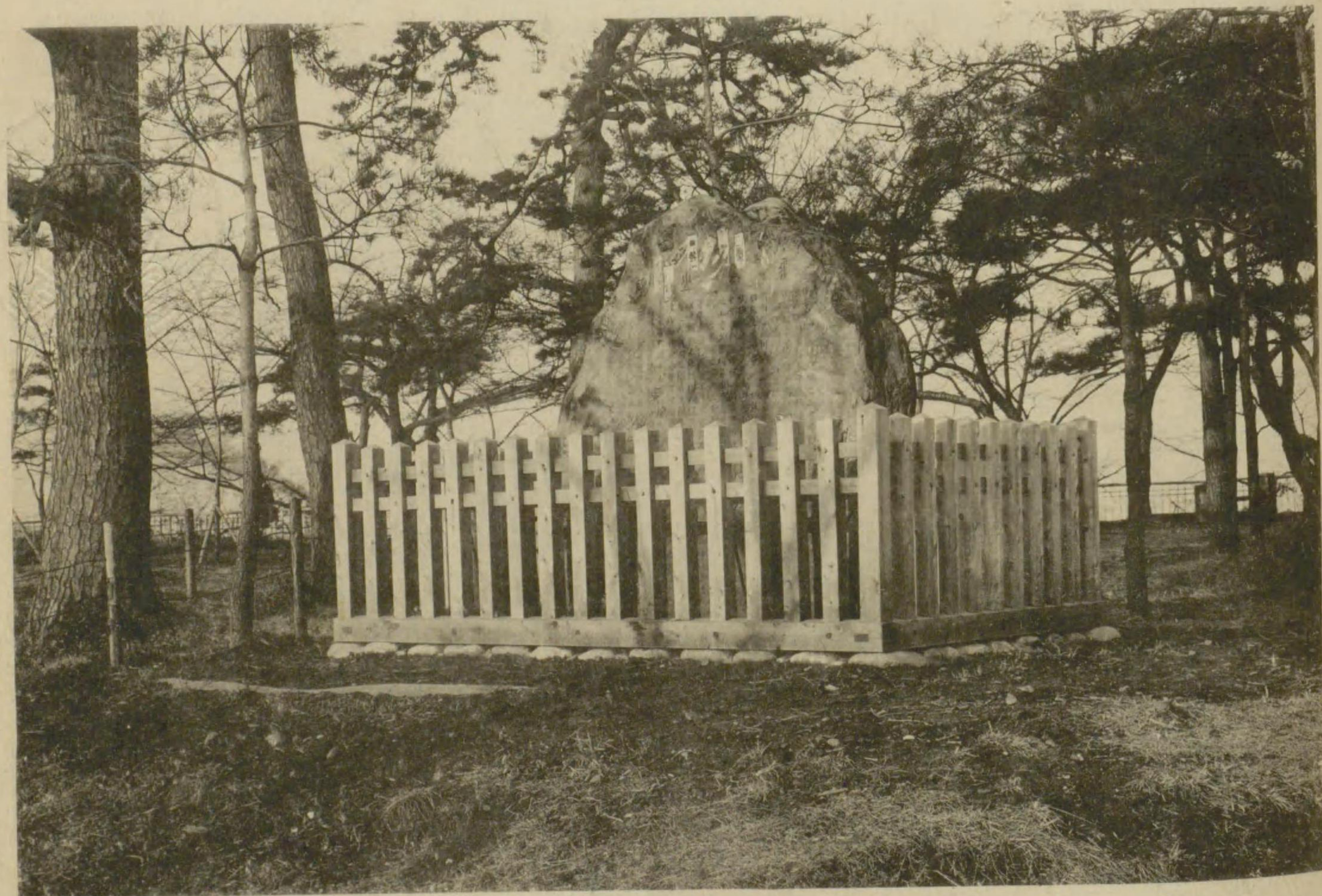
王子神社は北豊島郡王子町にあり、社傳に據れば紀伊の熊野神社を勧請せしものにして、元享年間領主豊島清光之を造營し若一王子宮と稱せしもの、後王子權現と唱へたり。徳川氏入城の頃まで江戸地方に於ける第一の大社なりしが、徳川氏の崇敬亦厚かりき。本社の祭禮は八月十三日なるが俗に槍祭と稱して有名なり、境内は老樹多きのみならず、荒川流域の平野を下瞰し得る丘陵の突端に位し、石神井川の峡谷其の北麓を回るを以て、北郊屈指の勝地なり。

飛鳥山の碑

王子神社とは石神井川の峽流を挾める形勝の地にして同郡瀧野川町に屬す。眺望の廣濶なる事近郊屈指なり、享保年間儒官林信光は爲に其の十二景を撰み、中に筑波茂蔭・秩父遠影・王子深樹・鴻臺秋月等を數へ、松平樂翁亦「不二筑波花の木の間にはの見へて遠近かすむ春の山風」と詠じたり。宜なるかな明治六年東京市の公園となれる事や。此處に櫻を植ゑたるは享保五六年頃に屬し、元文二年に至り、王子權現の社地に收めらる。飛鳥山の碑は王子權現の別當宥衛の建つる所にして。文は成島道筑の撰なり。服部南郭の文に「飛鳥山碑立、都下傳稱盛事」といふに徴し、此の建碑が如何に當時の騷人墨客を喜ばしめたるかを知るに足らん。



王子神社

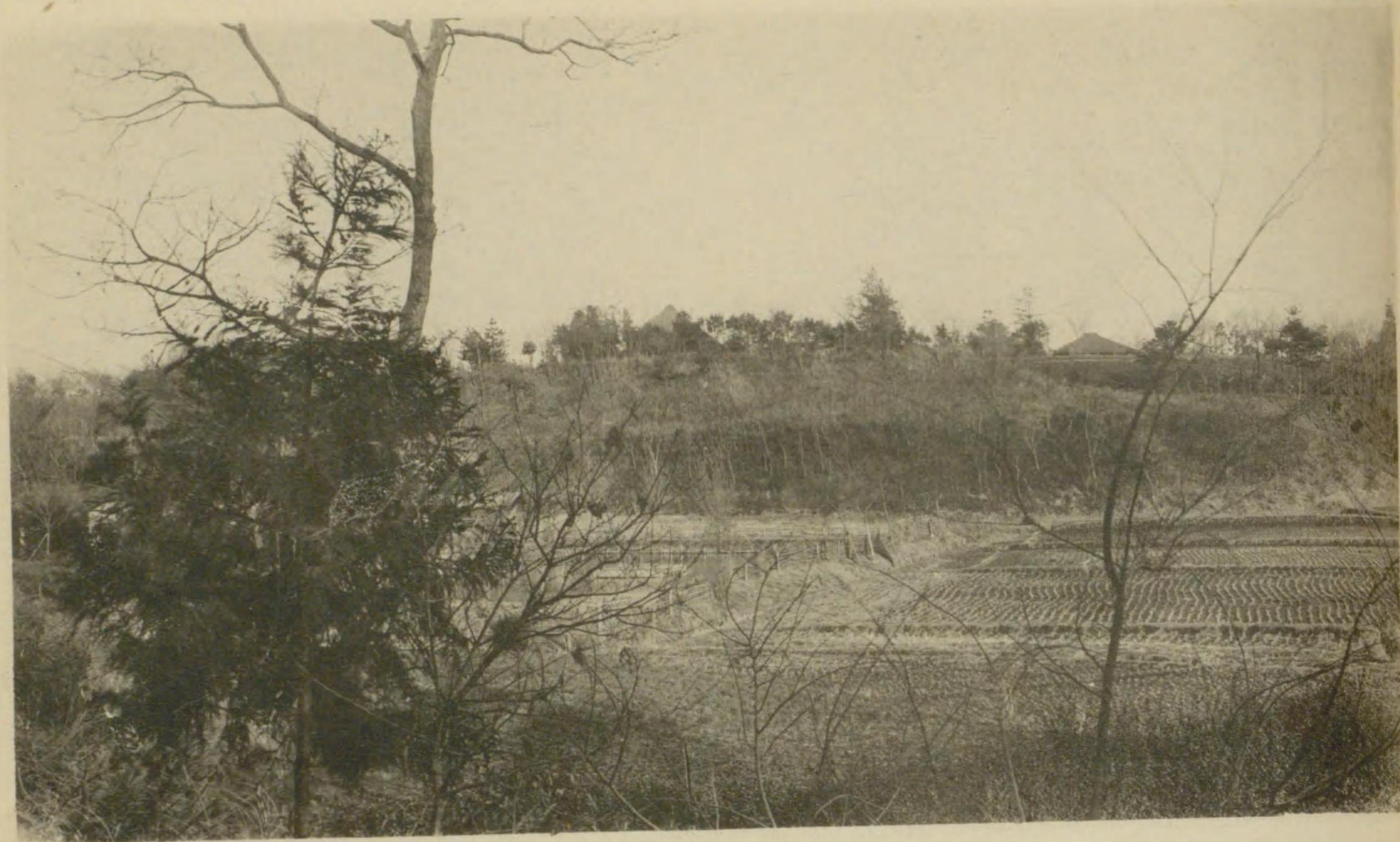


飛鳥山の碑

静勝寺

北豊島郡岩淵町稻附の静勝寺は、荒川流域の平野を下瞰し得る臺地の突端に位し、寫真に示せる如き築城に適せる形勝の地なり。太田道灌の此處に築城せし事は徴すべき史料を缺けるも、道灌が江戸に據りて、北の方上州平井の上杉氏と下野古河の足利氏とに對抗せし作戦より考ふれば、或は此處に出城を築きしに非ざるか。今其の地形を観るに周圍に空濠の跡らしき所散見せり。

寺の縁起に據れば、道灌の死後城亦頽廢せしも、ある僧來りて此處に草庵を結び道灌寺と名けしを、江戸時代に太田氏の末裔備中守資宗祖先形灌を追慕するの餘、城址の地を寺に寄附し寺號を静勝寺と改めたりといふ。江戸時代の中頃より太田氏の一門相集りて頻りに道灌の供養を營み、其の都度献納せる詠歌集、築城圖等現に寺寶たり。今境内の小堂に安置せらるゝ道灌の木像も其の頃に納められたるものならん。

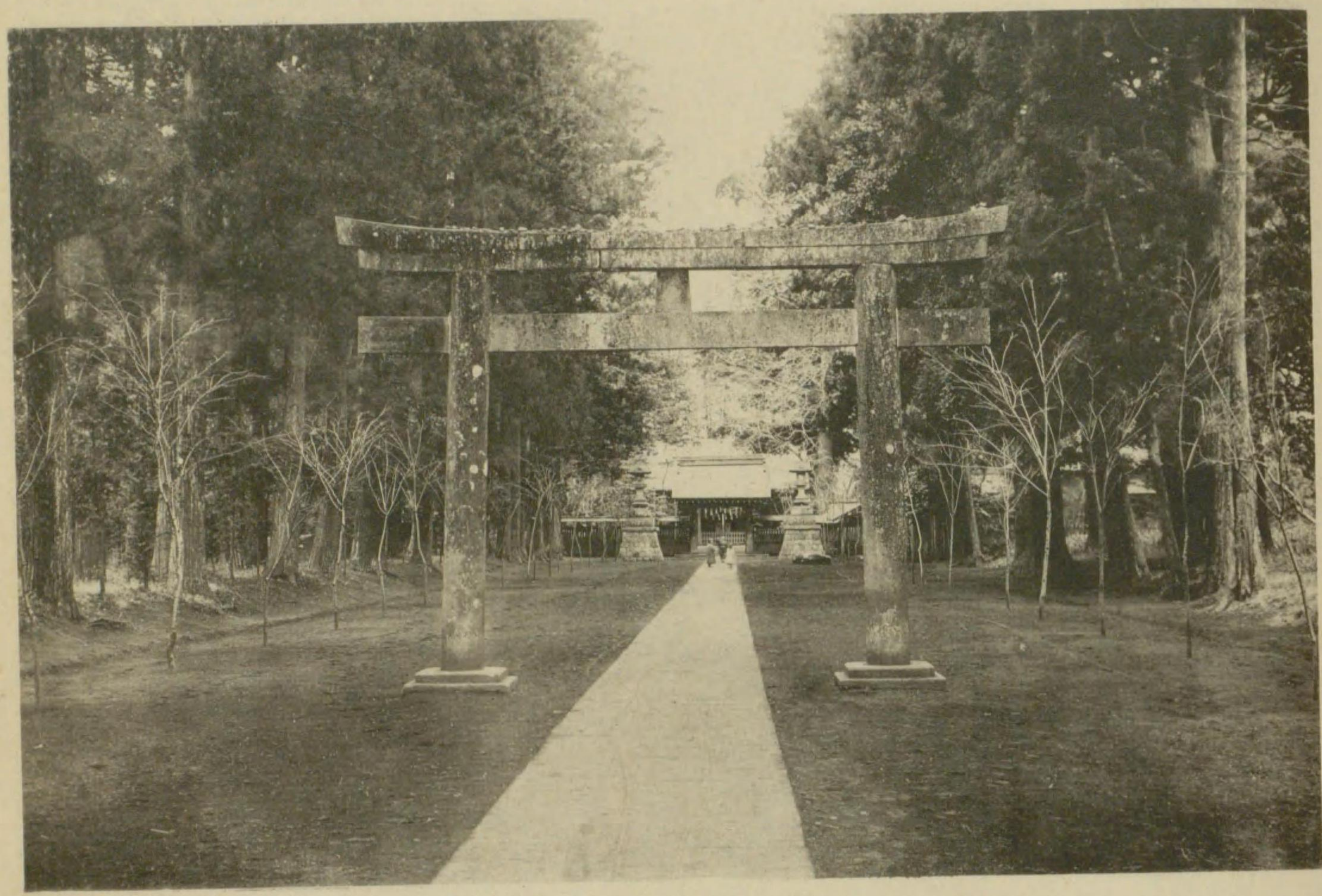


静勝寺遠望



太田道灌像

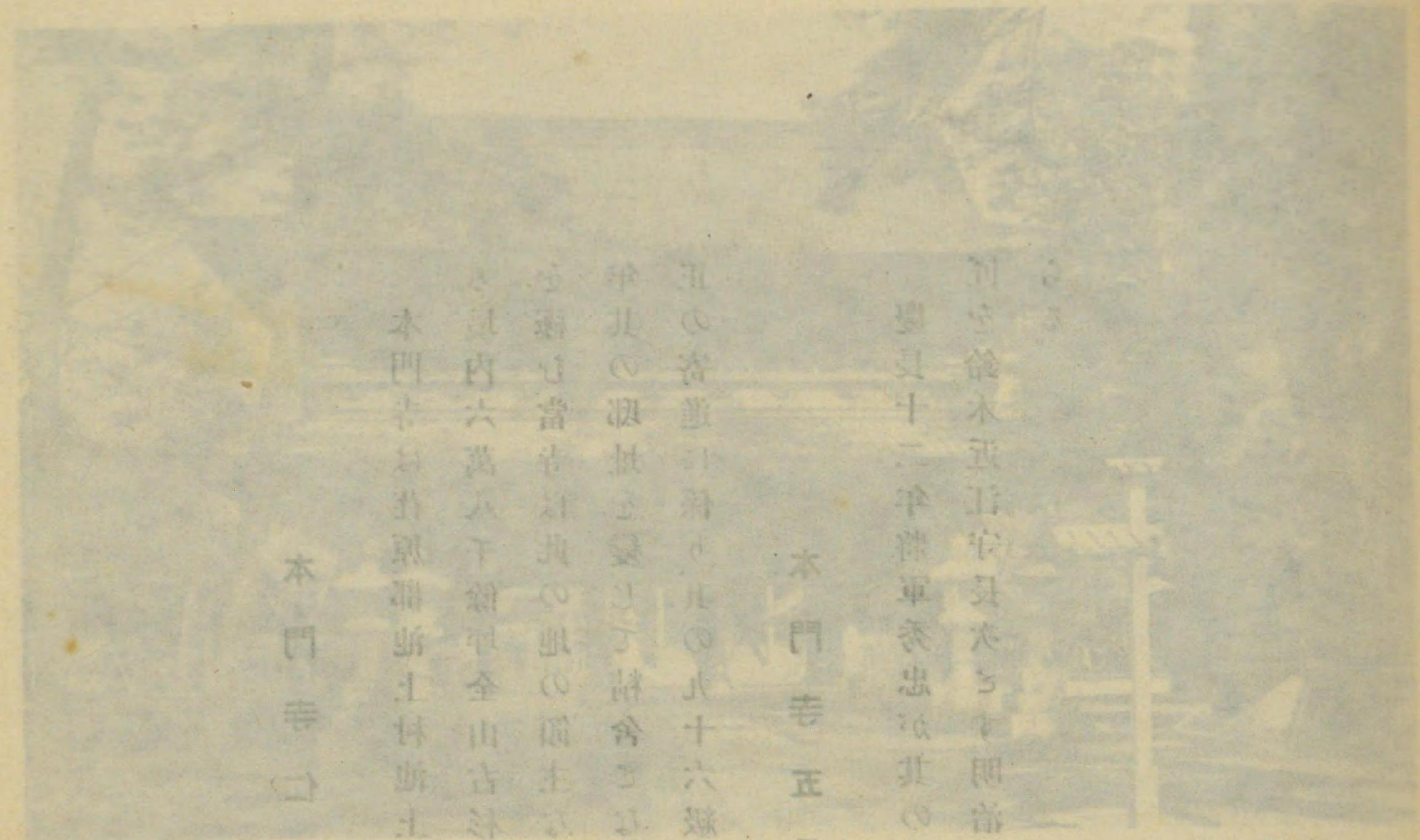
八幡神社は豊多摩郡和田堀内村和田にあり。社傳によれば後冷泉天皇の天喜年間、源頼義本社を勸請し、降幡山妙雲院と號す。源義家源頼朝の奉幣厚かりしが、天文年中、長尾景虎の亂により社殿を始め、什物悉く烏有に歸せしは惜むべし。境内の廣さ六萬坪に亘りしを以て植物の種類多く、徳川時代の本草學者として名高き岩崎源藏の如き、此の境内を武藏野植物の好研究地となせし事は、其の著『武江産物志』に於て植物三十種を擧げたるに、よりて明なり。伊藤圭介の『日本産物志』武藏の部にも堀内大箕谷井之頭邊産として四十三種を載せたり。白井博士の如きも少壯此の境内に於て植物の研究に従はる。左に載せたる『武江産物志』は同博士の所藏とす。



大宮八幡神社

紫珠	白瑞香	中里	掘内大箕谷邊産	石龍膽	フクウサウ
車前葉山慈姑	八幡山中	大箕谷村モ	兔兎傘	委蕤	東高野
チゴユリ	ホウキヤクサウ	山芍薬	紫草	小金	夏枯草
風輪菜	紫金牛	東高野	大山ハニ	報春先	道灌
絡石	烏樟	赤楊一種	柞木	刺楸	赤山ニモ
井頭邊産	石防風	狗古草	シラミツギ	堀内	ウハミツツ

武江産物志の一部



別々餘木武正安具次郎前四十四年同寺に王門を其の神祇祠並に魚鱗の池を
聖具十二平將軍忠信其の長御五心鏡の本願に於て建立せしむるに由りて

本門寺 五重塔

五の塔並に神の凡の式十六城なるは志摩縣寶飯郡の凡の式十六字の國の凡の式
其の源世を變じ了附合せしむるものなるに由りて其の神祇祠並に魚鱗の池を
聖具十二平將軍忠信其の長御五心鏡の本願に於て建立せしむるに由りて
其の内六萬八千餘年金山古跡を以て遷す其の間に於て其の神祇祠並に魚鱗の池を
本門寺の神祇祠とす其の神祇祠並に魚鱗の池を以て遷す其の間に於て其の神祇祠並に魚鱗の池を

本門寺 王門





本門寺仁王門



同 上 五 重 塔

本門寺仁王門

本門寺は荏原郡池上村池上にあり。長榮山大國院と號し、日蓮入寂の地として著はる。境内六萬八千餘坪。全山古杉老松を以て蔽はれ、其の間に數字の殿堂建並びて壯嚴を極む。當寺は此の地の領主なりし池上右衛門太夫宗仲が日蓮の徳に感じ、文永十一年其の邸址を變じて精舎となしたるものなり。而して門前の石階は慶長年間加藤清正の寄進に係り、其の九十六級なるは、法華經寶塔品の偈九十六字に因めりと云ふ。

本門寺五重塔

慶長十二年將軍秀忠が其の乳母正心院の本願により建立せしめし塔婆にして、工匠を鈴木近江守長次とす。明治四十四年同寺仁王門と共に特別保護建造物に指定せらる。

五二平野... 古... 大...

陸 登 野 賦

林泉の美... 大...

大 野



深大寺

深大寺は北多摩郡神代村深大寺にあり。浮岳山昌榮院と號し。御朱印五十石を附せられたる古刹なり。寺傳によれば。當寺は天平年間滿功上人の開基に係り。元法相宗なりしが。貞觀年中時の住僧惠亮天台宗に改めたりと。天正中世田谷吉良氏此の寺の荒廢を嘆き。堂宇を再建し。寺領を寄附し。且波平行安の名刀を納めて中興せり。境内廣く林泉の美に富むのみならず。石器類を出すを以て考古學者間にも知らる。

銅造釋迦像

深大寺に傳來する銅造釋迦像は鑄造者の何人なるかを詳にせずと雖も。蓋し奈良朝の製作に屬すべく。府下稀有の古佛なり。當山開基以來數回の火災に罹りし爲。寺寶古記録等烏有に歸したるも。幸に此の古佛殘存して。當山の古刹たる證徴となれり。大正二年釋迦像の國寶に編入せられたるは。普く人の知る所なり。



深大寺全景



同上鐘樓



銅造釋迦像

大國魂神社 (其一)

北多摩郡府中町の中央甲州街道の南側に沿ひ、境内の面積一萬六千餘坪、社傳に據れば奉祀の主神は武藏大國魂大神なるが故にもと大國魂神社と稱し、後に武藏總社として國衙の齋場に充てられ、又國內六所の神を配祀せしにより、總社六所宮とも單に六所宮とも號せしが、明治四年復た大國魂神社と改む、其の創立は景行天皇の四十年大神の宣託に基き、天穗日命の裔武藏國造兄多毛比命躬ら此處に神籬を建て大神を奉齋せしに創れり。上圖は甲州街道より本社々前を撮影せる者にして、下圖は社前より北方に通ずる國分寺街道に沿へる榎並木なり。此の並木は鎮守府將軍源賴義が前九年の役に發向の途次、當社に參籠して賊徒誅伏の祈誓をなされ、凱旋の際に再び當社に參拜し、報賽のため苗木千株を献せられたる例に倣ひ、徳川家康が自から寄附せる馬場に植ゑられたるものにして、長さ二百九十間に及ぶ。



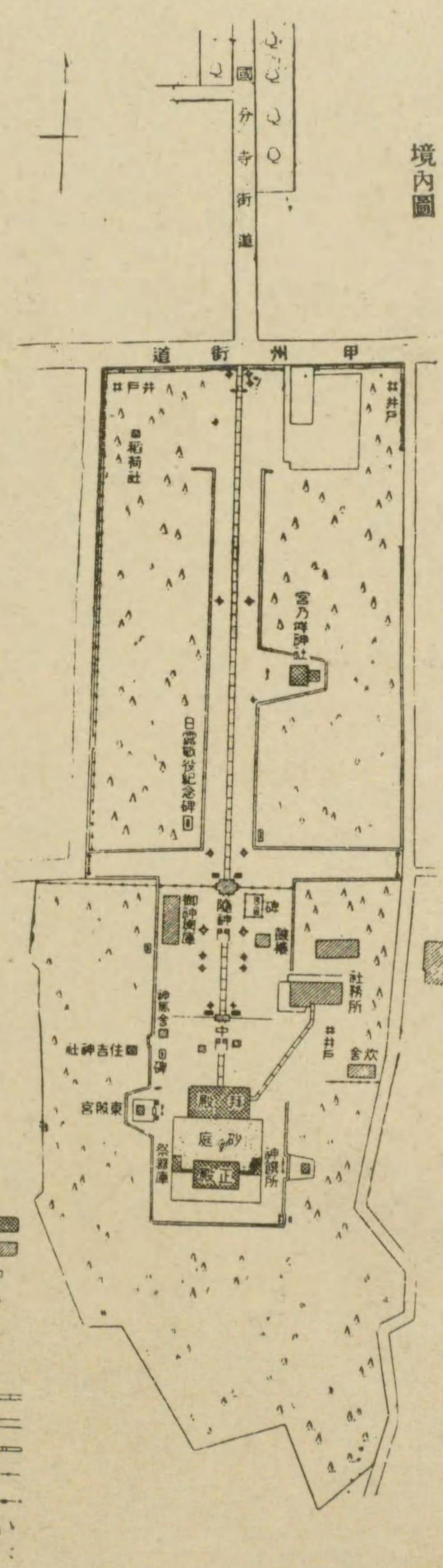
大國魂神社



同上舊馬場先榎並木

大國魂神社 (其二)

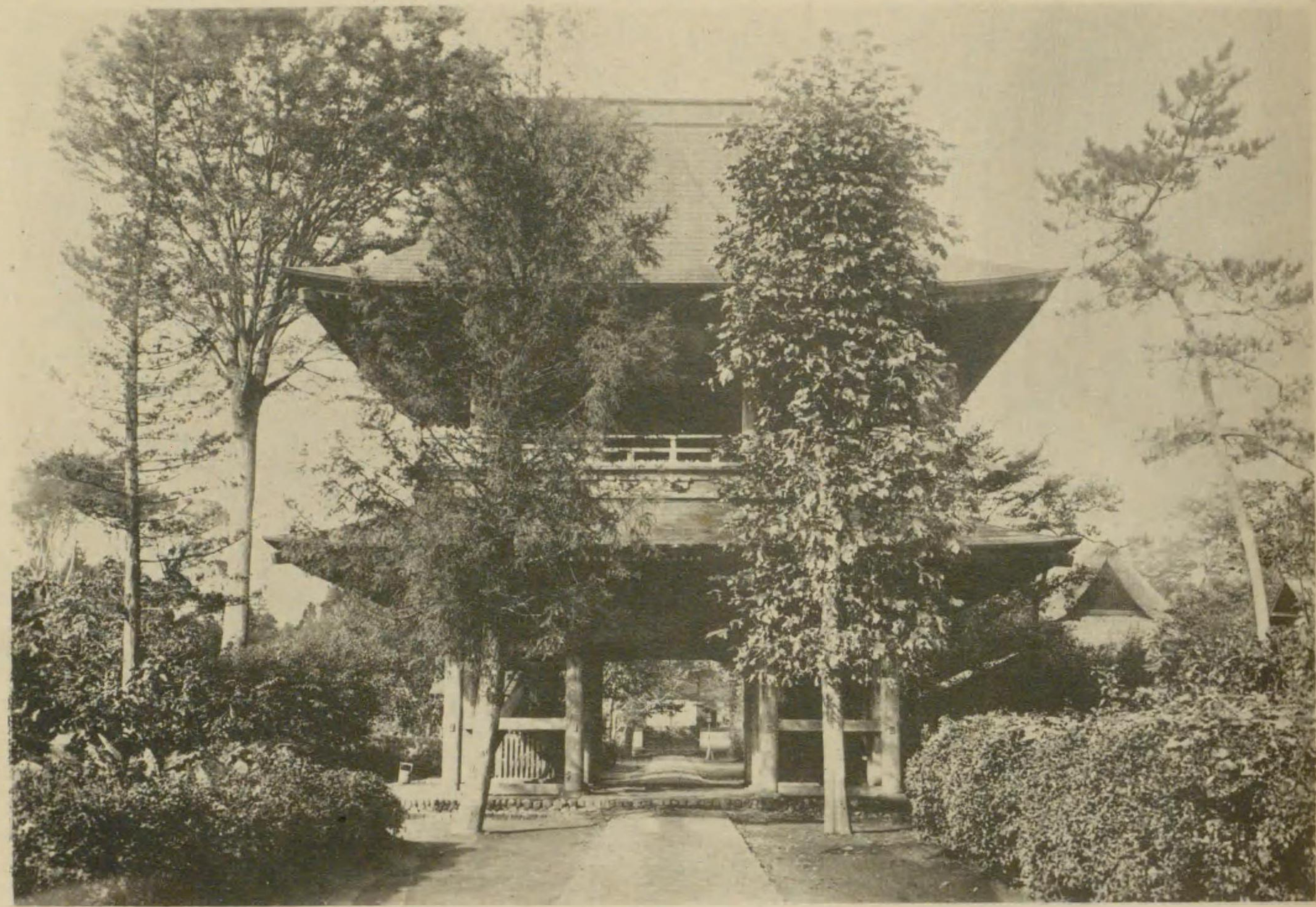
もと代々の國造其の祭祀を掌りしも、孝徳天皇の御世に國府を置かれし以來國司之を掌り、鎌倉幕府及足利將軍共に尊崇深かりき。天正十八年徳川家康江戸城に入るや翌年一月始めて參拜し、次いで先規により神領五百石を寄進せられ、慶長十一年に至り本殿拜殿を始め一切造營せらる。後正保三年府中驛火を失し、本社亦本殿以下悉く烏有に歸し、寛文七年再び造營せられたるもの即ち現在の社殿なり。本殿は其の當時のものなれども、拜殿は其後大破せしにより明治十年再建せしものなり。



大國魂神社中門及拜殿



大國魂神社本殿



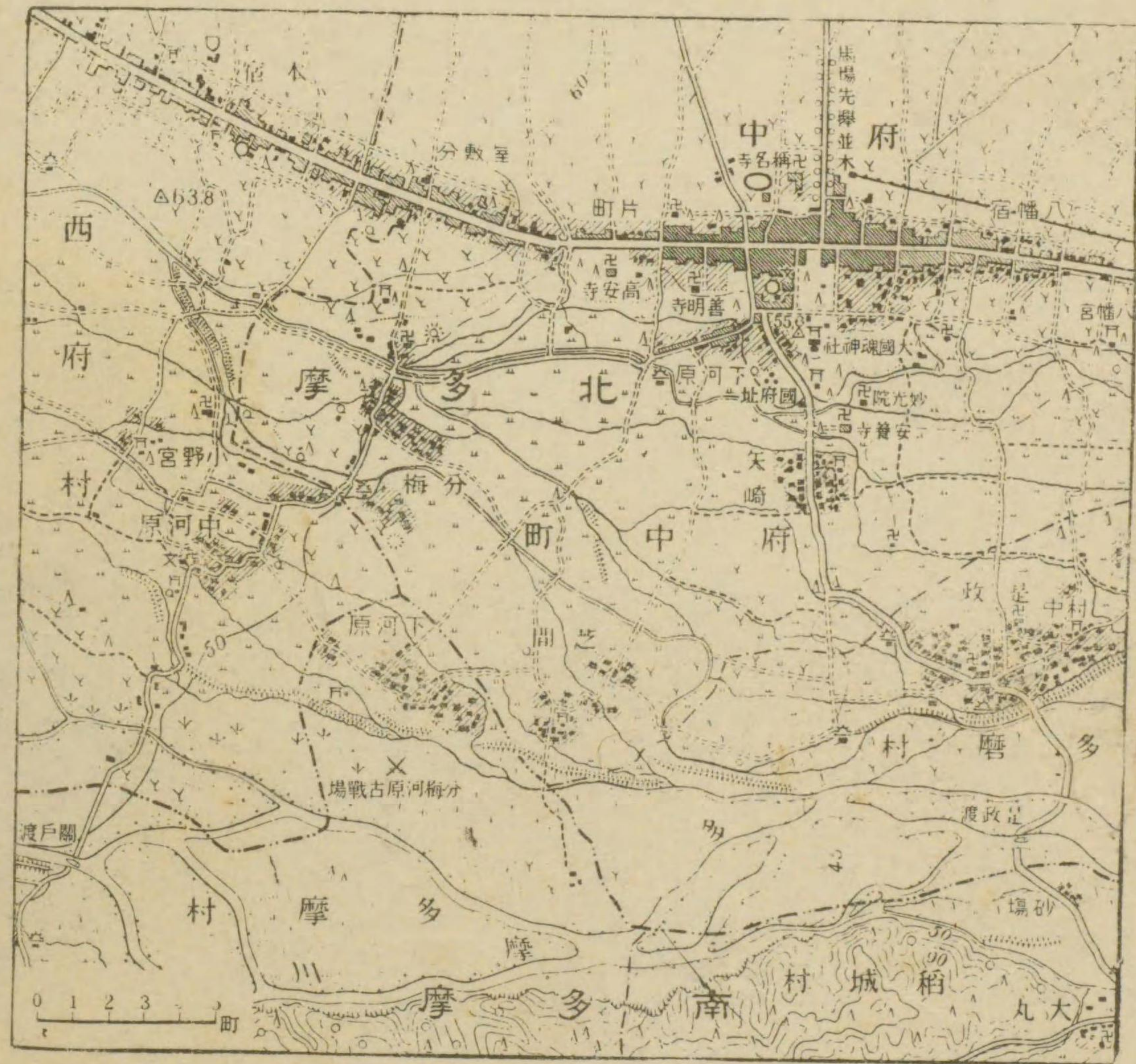
高安寺仁王門



國府址

高安寺及國府址

國府の舊址は大國魂神社國府八幡宮と共に多摩川を下瞰し得る臺地の突端に位し頗る形勝の地なり此の附近は頗る史蹟に富み府中第一の巨剎高安寺の如きも國府の址より東方約六町其の境内より多摩川を見下し得る臺地に立てり此の寺はもと建長寺の末寺にして市川山見性寺といひしが足利尊氏改めて龍門山高安護禪寺と稱したり相模より府中を経て奥州に通ずる鎌倉街道に近きを以て永徳應永永享の諸年附近に争ある毎に陣營に充てられし事多し。



府中附近圖

善明寺阿彌陀佛

此の鐵造阿彌陀座像はもと露佛として大國魂神社境内に安置せられ俗信深かりしが故ありて善明寺に遷されたり。關東に於て鎌倉時代にかゝる鐵佛の鑄造せられたるは珍とすべし。大正二年胎内佛と共に國寶に編入せられ世に知らる。左襟銘あり。長く風雨に晒されし爲甚だ讀み難きも

大勸進念阿彌陀佛明蓮大工藤原助近右志者爲過去二親行嚴新發意乃至法界衆生平等利益奉鑄一丈二尺佛身也。

建長五年癸丑二月十八日丙寅彼岸初日



佛内胎上同



佛鐵寺明善

國分寺 (其一)

國分寺は北多摩郡國分寺村國分寺にあり、北に丘陵を負ひ、南は廣き隴畝を隔て、府中町の樹林屋影を望み、遙に多摩川の彼方向の岡一帶の丘陵を指點し得べし。其の境内は二千四百二十坪、上圖は其の東部に位する樓門及草堂にして、即ち國分寺の正門及客殿、僧房、庫裡等なり。下圖は其の西部に位する國分寺の本堂にして、仁王門より數十級の石階を上れる丘陵の上に立てり。仁王門には丈七尺餘の仁王の巨像立ち、雲慶の作と傳へられ、内務省より保存資金の下附あり。本堂には深見玄岱が勅額を模寫せし「金光明四天王護國之寺」の額を掲げ、正面の厨子には、大正六年國寶に指定せられたる木造藥師如來の座像を安置し、なほ脇侍日光佛、月光佛と十二神將とあり。



國分寺全景



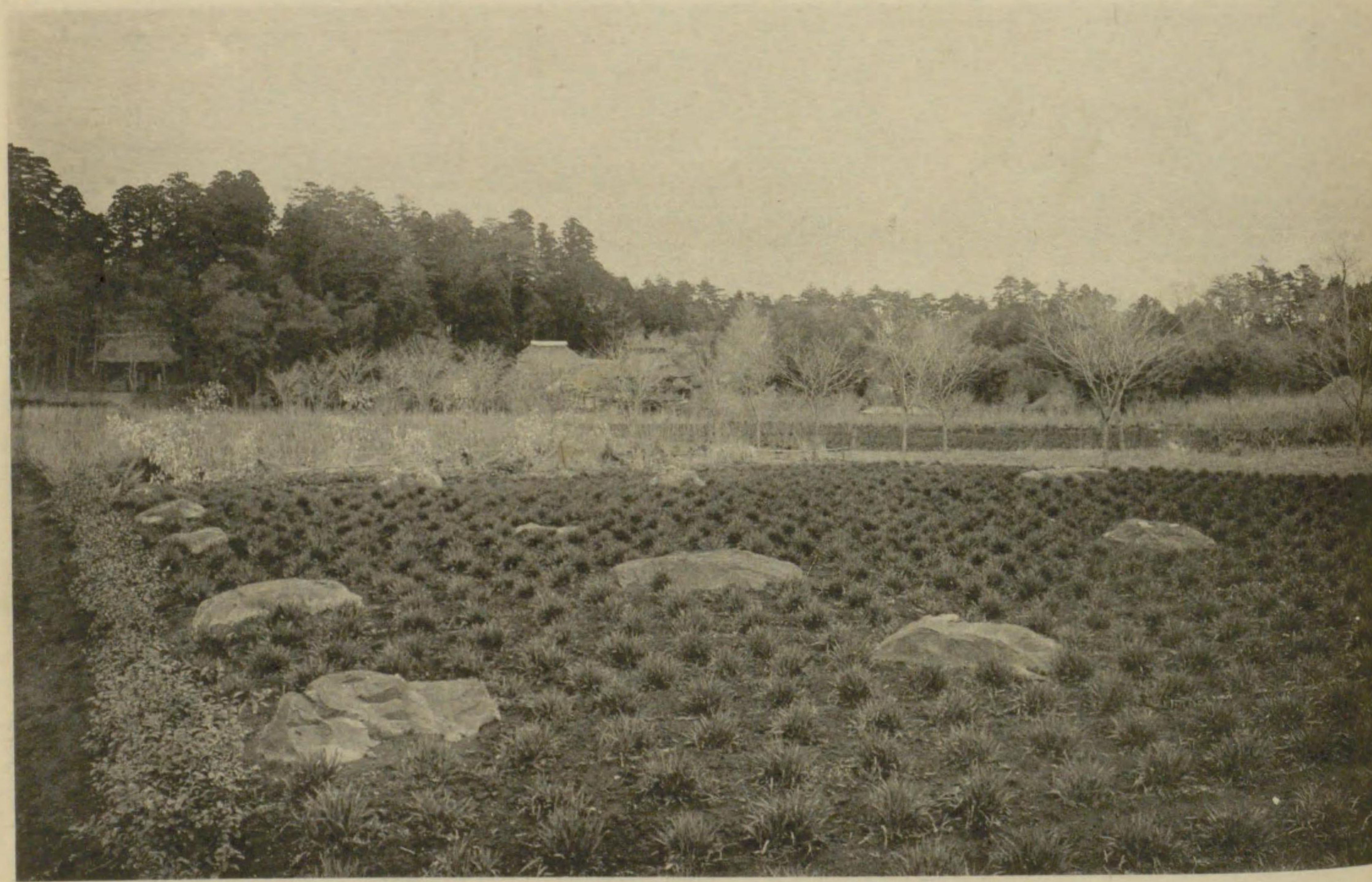
同上藥師堂

此の寺は天平十九年の創建に係り、施封五十戸水田十町僧二十員を置かれたる巨刹なれば、其の境内は十町四方に亘り、堂塔伽藍の規模宏大壯嚴なりしは想像するに難からず。今の仁王門の南約半町に當る麥畝の間には、舊の仁王門の礎石残り、なほ東南一町許の小丘に、方九尺に當る六角の礎を据へ中に徑三尺の石疊の穴あるは、其の穴に塔の心柱を樹てたる七層塔の舊址ならんといふ。此の宏壯なる建築が、元弘年間の兵燹に罹りて、本尊の外悉く烏有に歸せしは惜しむべし。

此の遺址より發見する古瓦には、郡名郷名氏名等の記されたるもの多く、郡名は豊島荏原橘樹都筑足立入間高麗比企横見崎玉大里男倉幡羅榛澤那珂兒玉秩父の十七郡の多きに亘れり。



國分寺古瓦



關上金堂址

小野神社

小野神社は南多摩郡西府村本宿にあり、天下春命を祀る。社傳に據れば成務天皇の朝兄多毛比命武藏の國造に任せられし時、其の祖神たる命を此の地に勧請して鎮守となせりと。境内及社殿共に大ならざれど、由緒の古き事は大國魂神社にまさると稱せらる。

谷保天満宮

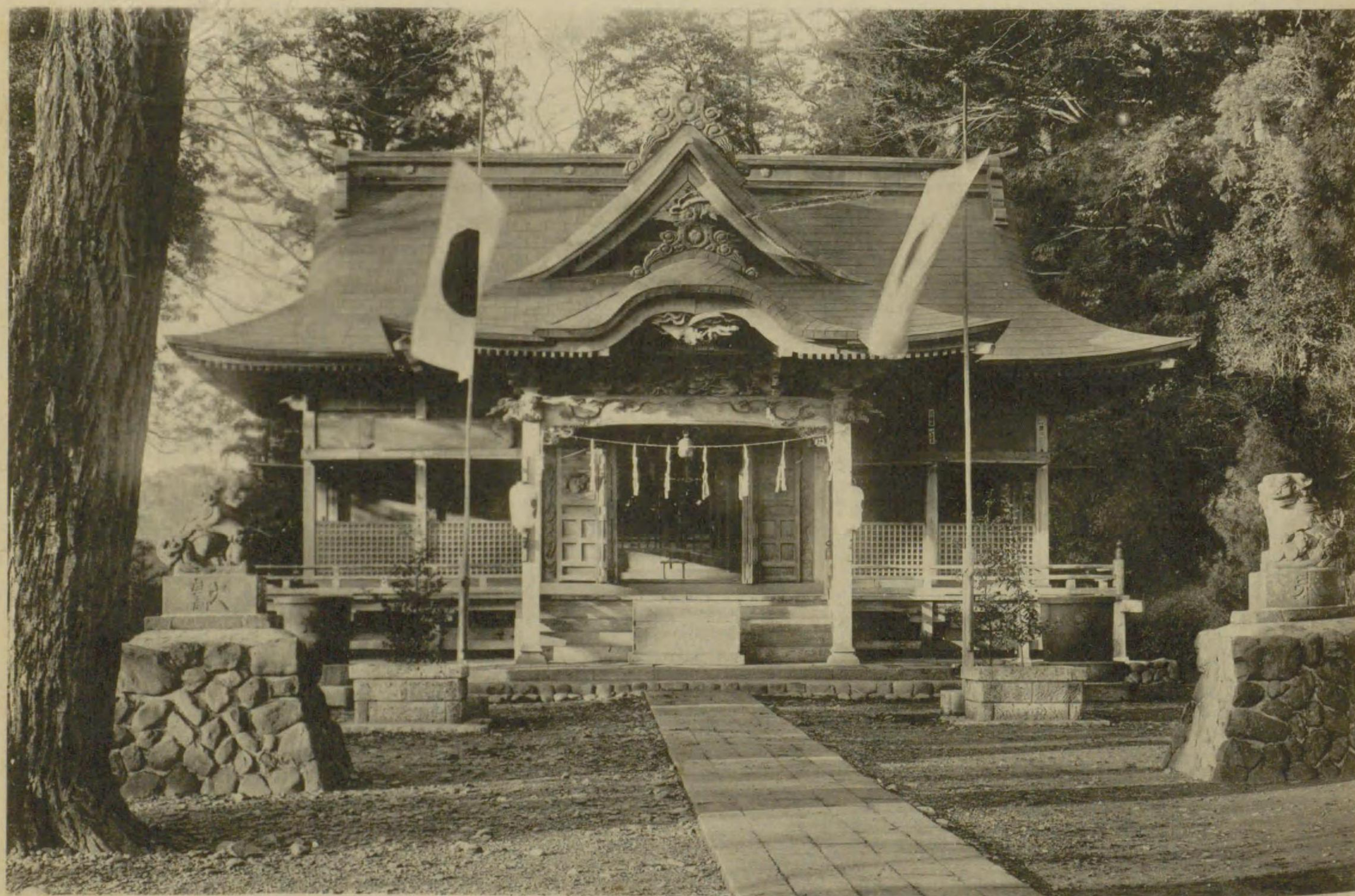
谷保天満宮は北多摩郡谷保村谷保にあり、社傳に據れば延喜元年菅原道真太宰府に左遷せらるゝや、其の子三郎道武多磨郡分倍莊に配せられ、父の薨去を聞き躬ら其の像を刻して朝夕奉事せられたるもの即ち本社之神體なりと。徳川氏に至り、神領十三石五斗を賜ふ。天満宮の勅額は後宇多天皇の賜ふ所にして藤原經朝の筆、社前の狗犬は村上天皇の納め給ふ所と稱し、共に逸品なり。

信玄の軍船模型

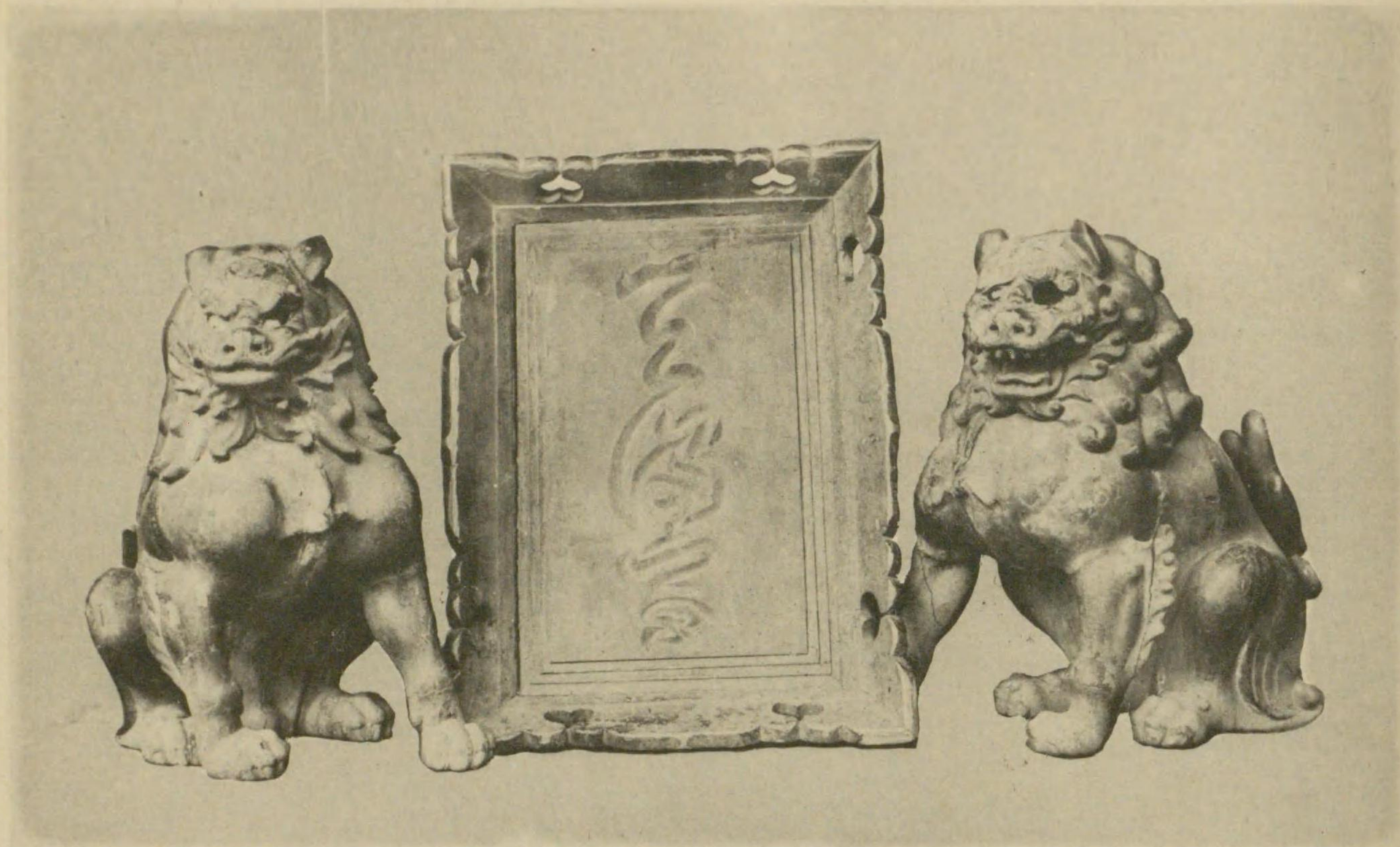
南多摩郡八王子市上野の信松院は、武田信玄の六女新館尼の開基なり。幼名松姫十八才の時薙髮し、天正十年武田氏の滅ぶするや轉々して此の地に來る、家康此の由を聞き月俸を給して其の志を嘉す。寶物には信玄の軍船の外、信玄持佛の不動明王、家康の年賀狀を始め尼の手書等あり。



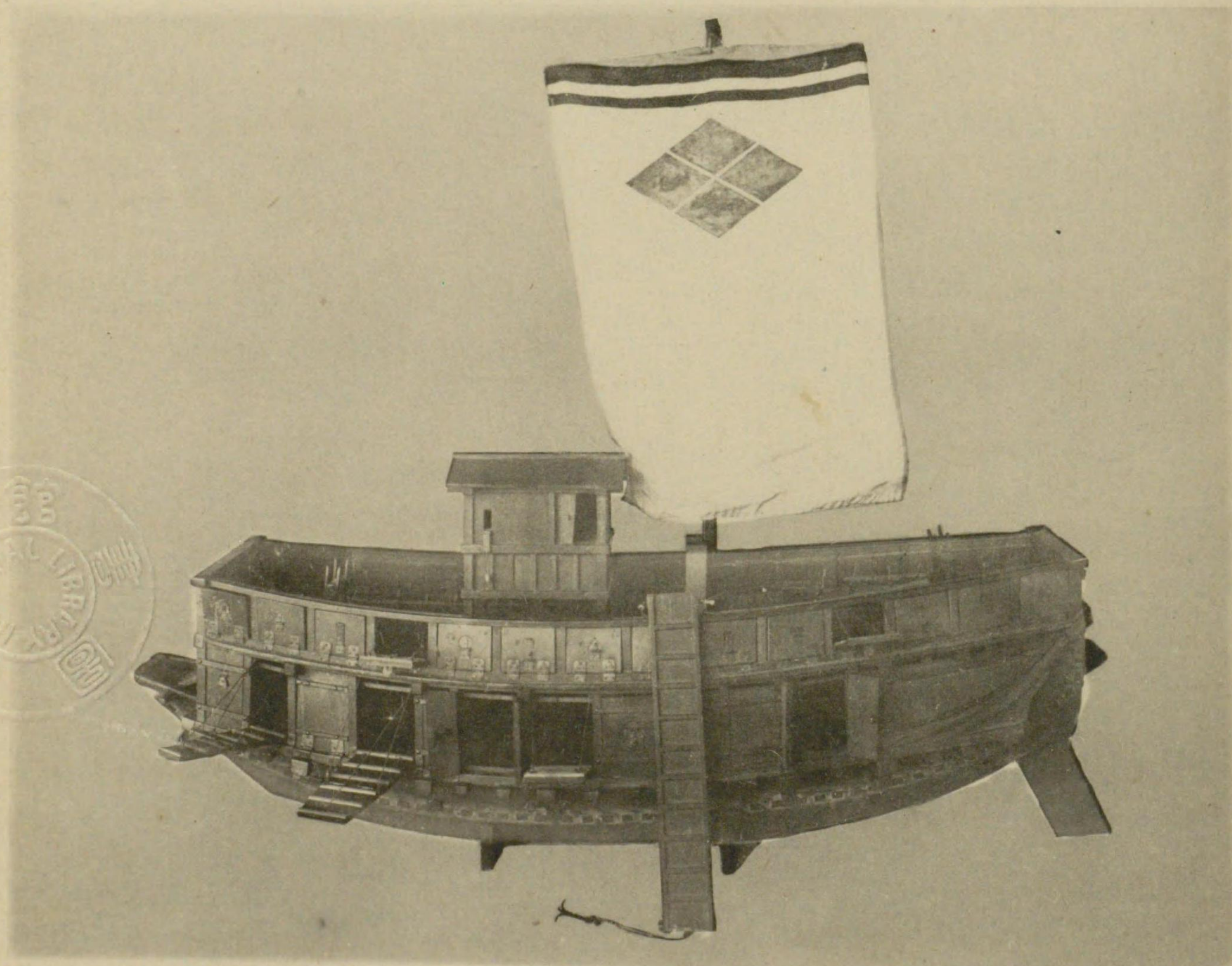
小野神社



谷保天満宮



物寶宮満天保谷



(物寶院松信)型模船軍の主信



普濟寺

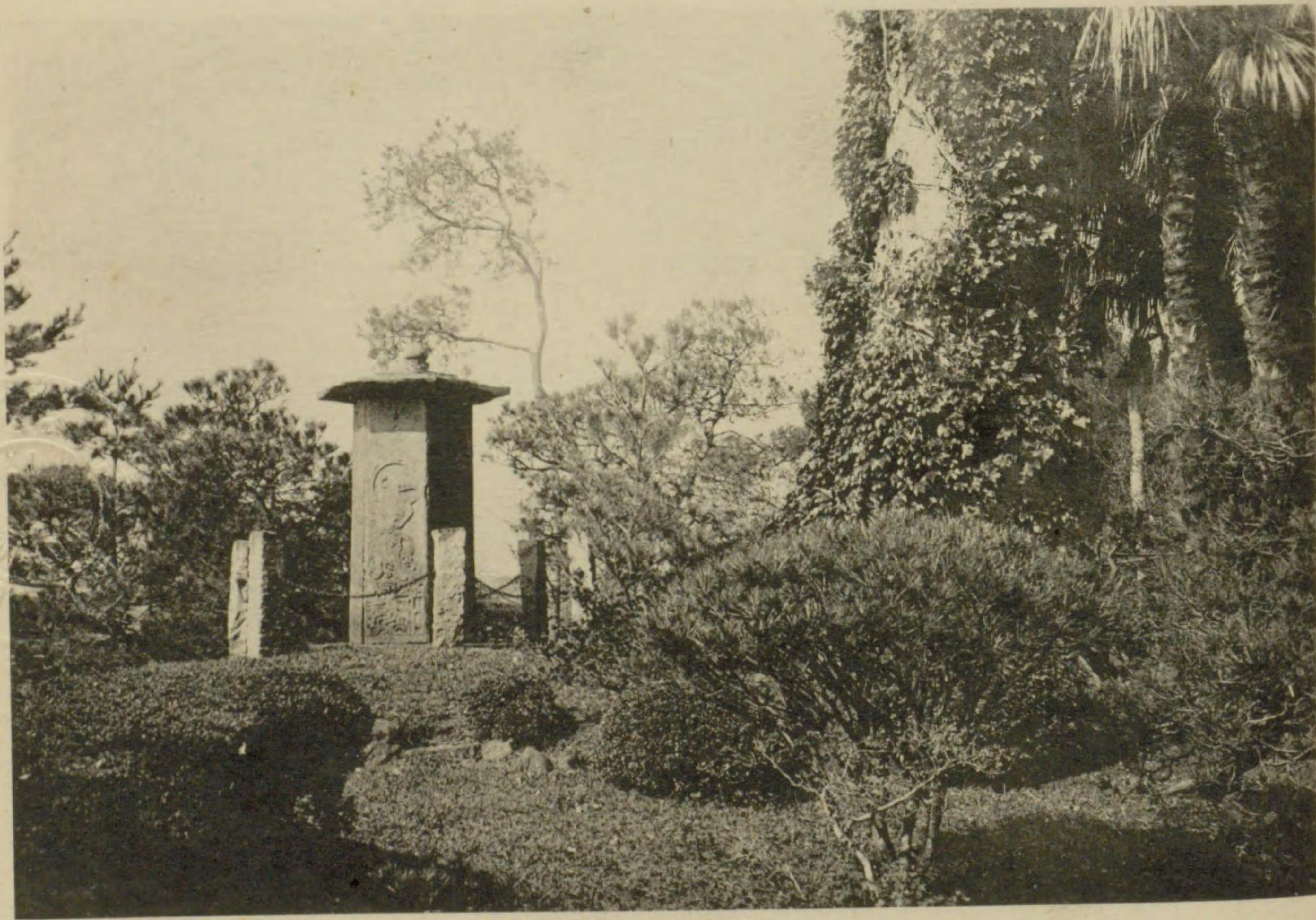
普濟寺は北多摩郡立川村の南端、多摩川に臨む形勝の地なれば、武藏七黨の一なる西黨日奉宗忠の弟宗弘二男宗恒此に城を構へ、立川宮内太夫宗恒と稱し、武威を近郷に振ひしが、文和四年城の一隅に當寺を建立し、鎌倉建長寺より物外可什禪師を招請して開祖となせり。國寶物外禪師木像は同禪師滅後應安三年に成れるものなり。

六角塔

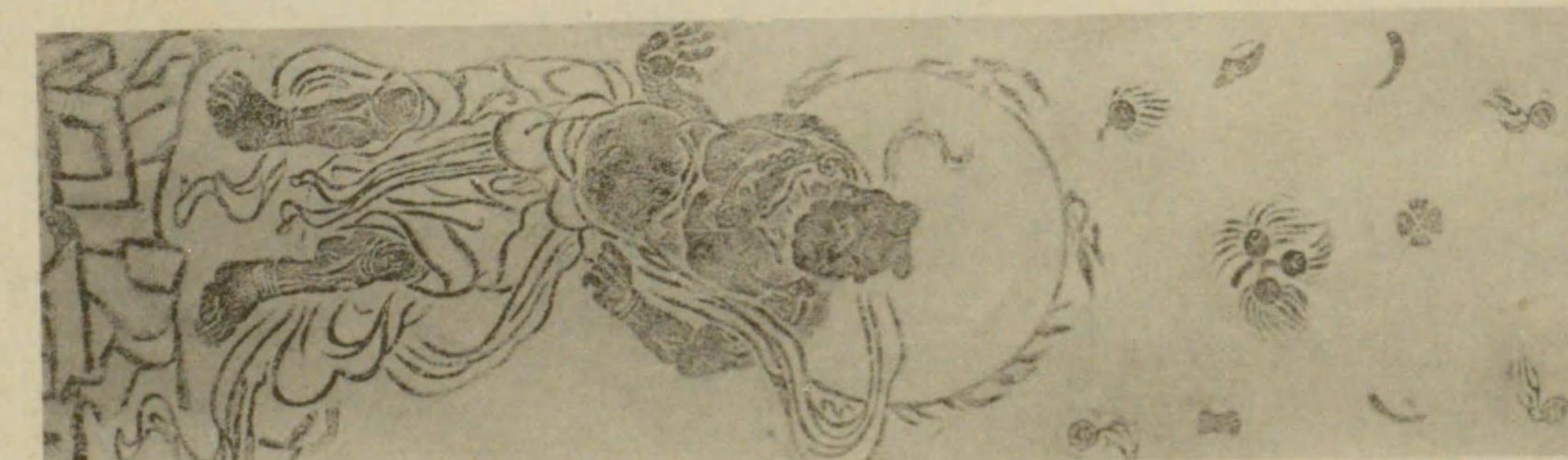
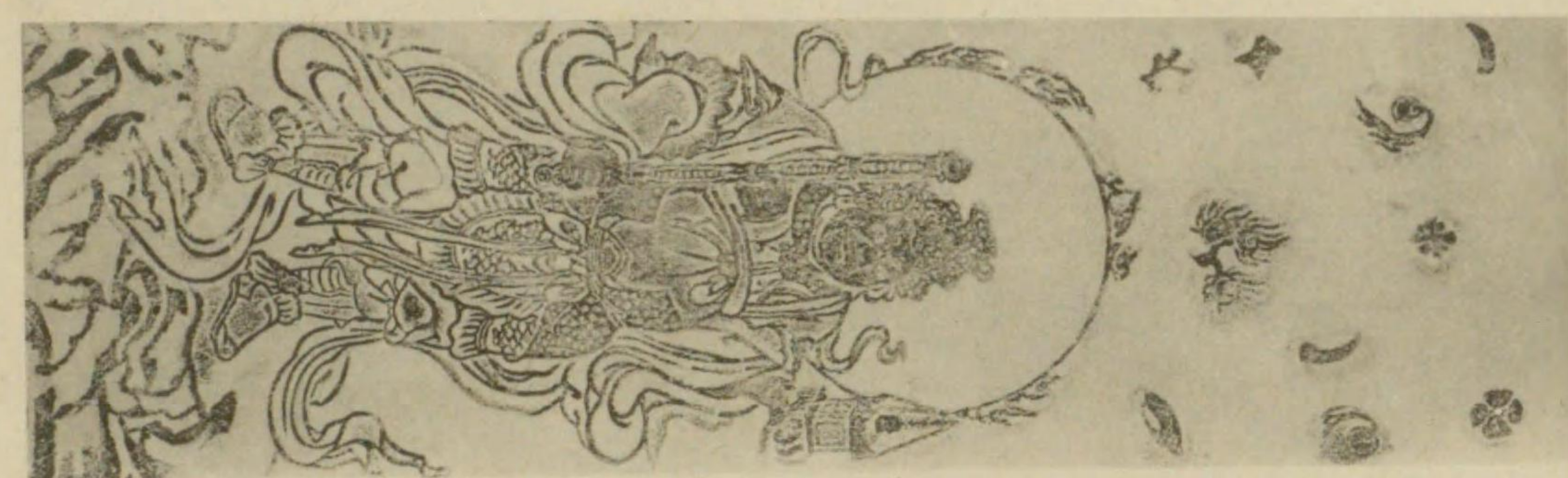
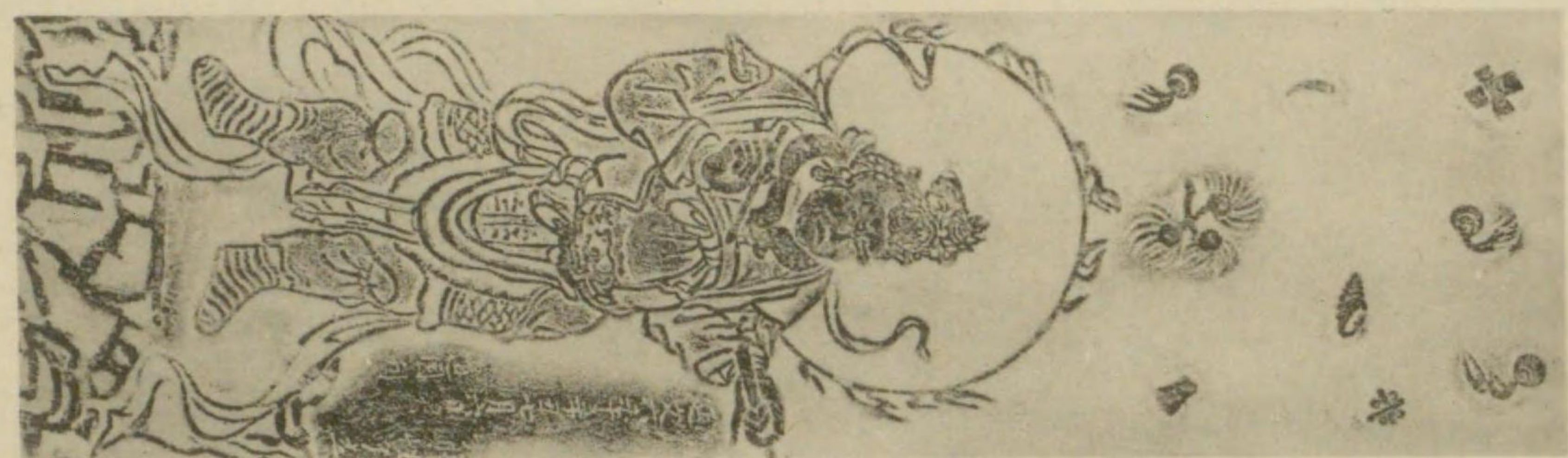
當寺奥庭にある六角古塔は高五尺二寸、幅一尺四寸、厚さ三寸許の青板石を以て組立て、臺石及蓋石共に同質の板石なり。寫眞の如く六枚の板石に仁王及四天王像を刻し、各板石薄肉なるも、其の製作巧妙なるを以て稱せられ、大正二年國寶となる。持國天皇右側に延文六年七月六日施財性了立道圓刊の十六字を刻す。



普濟寺遠望



同上境内六角塔



本拓塔角六

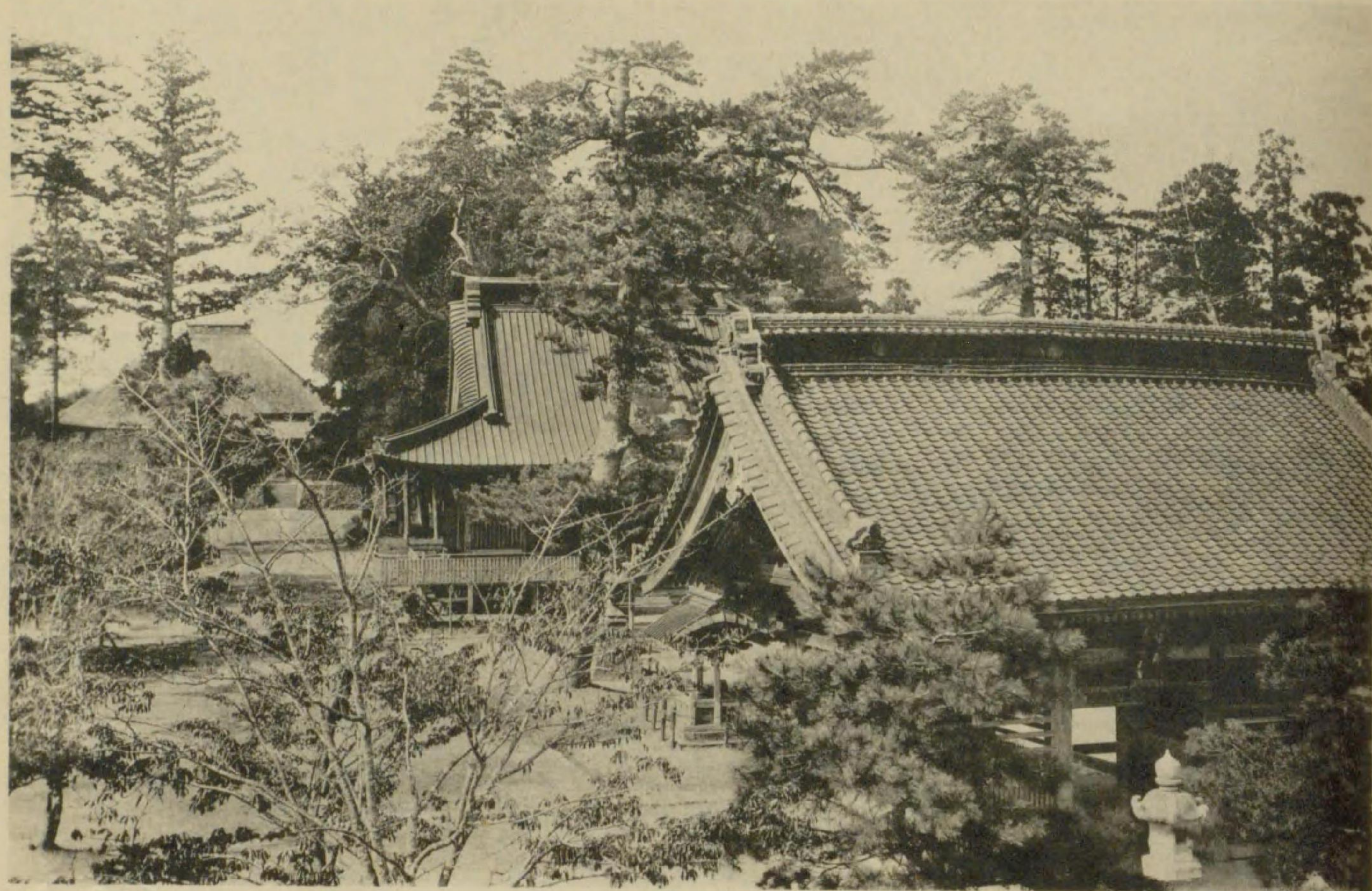


金剛寺

金剛寺は南多摩郡七生村にあり。新義真言宗の道場にして別格本山たり。境内に有名なる不動堂あり、不動明王座像の高一丈餘、妙相端嚴美術の参考に資すべき旨を以て、明治廿五年鑑査狀を交付せらる。不動堂は元山上に在りしに、建武二年八月暴風の爲め顛覆せしより、時の住僧義海之を山麓に移し、楣間に文永の鱗口を掲ぐ。不動像火焰の背に銘あり、此の銘によれば大檀那平助綱、大中臣氏女専念金刀修造の功を果したること明なり。左右の二童子丈各八尺餘亦珍とす可し。堂は初め平山武者所季重の祈願ありて、其の建立に係ると傳ふ。此の地より平山へは僅に二十町餘を隔つるのみ。

圓融寺本堂

圓融寺本堂は荏原郡碑衾村碑文谷にあり。仁壽三年の創建と唱ふるも明かならず。南北朝前後に屬するものなるべしといふ。明治四十四年特別保護建造物に指定せられ、現時府下最古の建造物と目せらるゝ堂宇なり。



高幡金剛寺



碑文谷圓融寺本堂

大悲願寺

西多摩郡増戸村横澤にあり、金色山吉祥院と號す。建久二年源頼朝大擅越となり、其の臣平山季重をして造立せしめたる眞言の道場にして、開山は釋澄秀第三世なり。秀海の後法流絶えたるもの八十八年、澄遍之を再興し、足利氏滿の歸信を受け、永代修堂料として武藏國秋留郷の内二十石を附せらる。當寺建立以來祝融の災なしと雖も、數回の改造に係り、現在の講堂及庫裡は元祿八年竣成したるものなり。

當時に伊達政宗白萩所望狀を藏す。蓋し第十五世秀雄は政宗と俗縁あるに依れりといふ。老臣伊藤右近の添書を參照すべし。

態以飛脚申入候先度者參遂會面本望之處無心之申事に候へ共御庭之白萩一段見事につき所望に存候先日者申兼候而罷過候預候は、可辱候猶期後音候恐惶謹言追而 略式に候へ共任折節小袖壹重進候以上

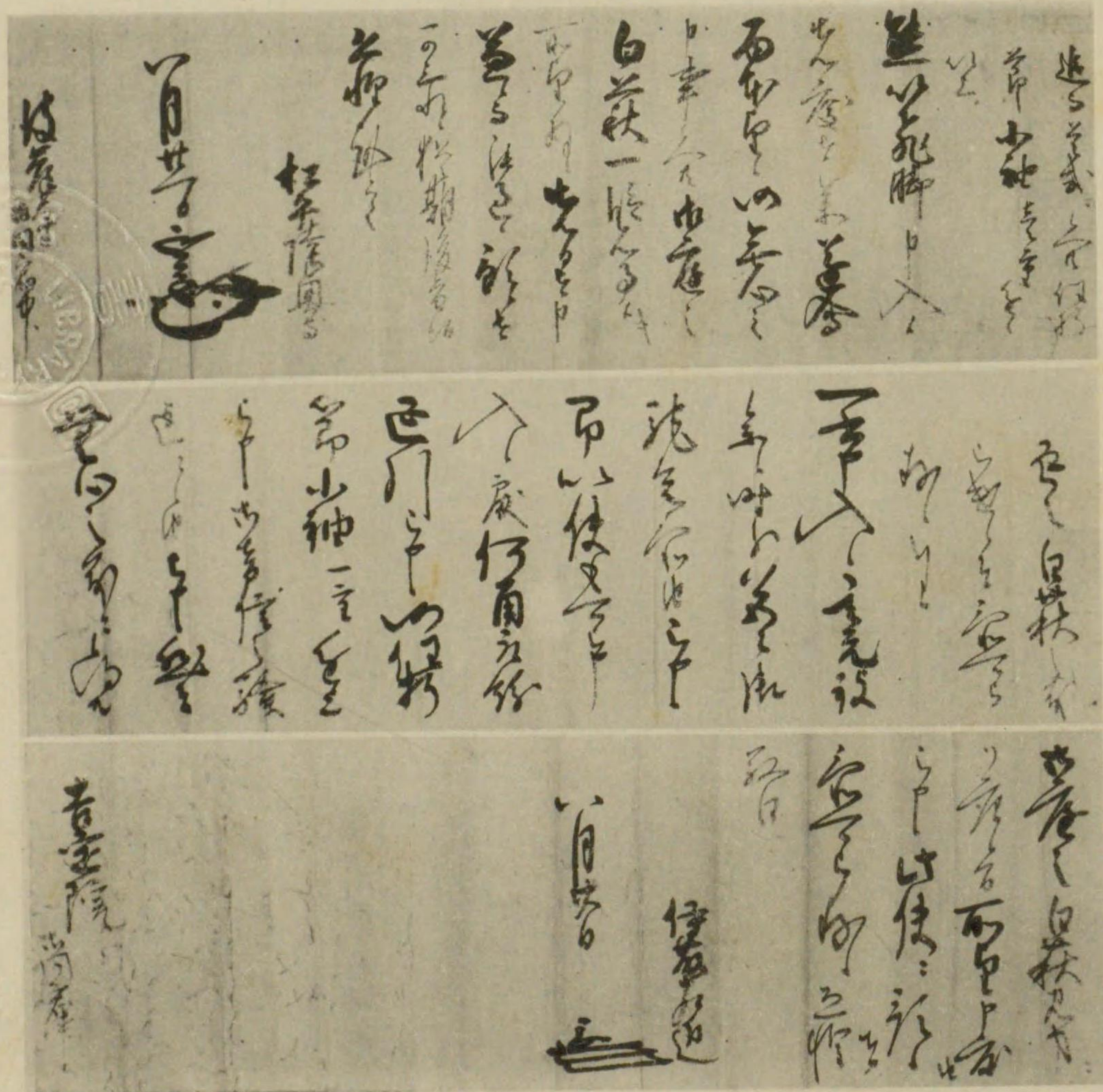
八月二十一日

彼岸寺御同宿中

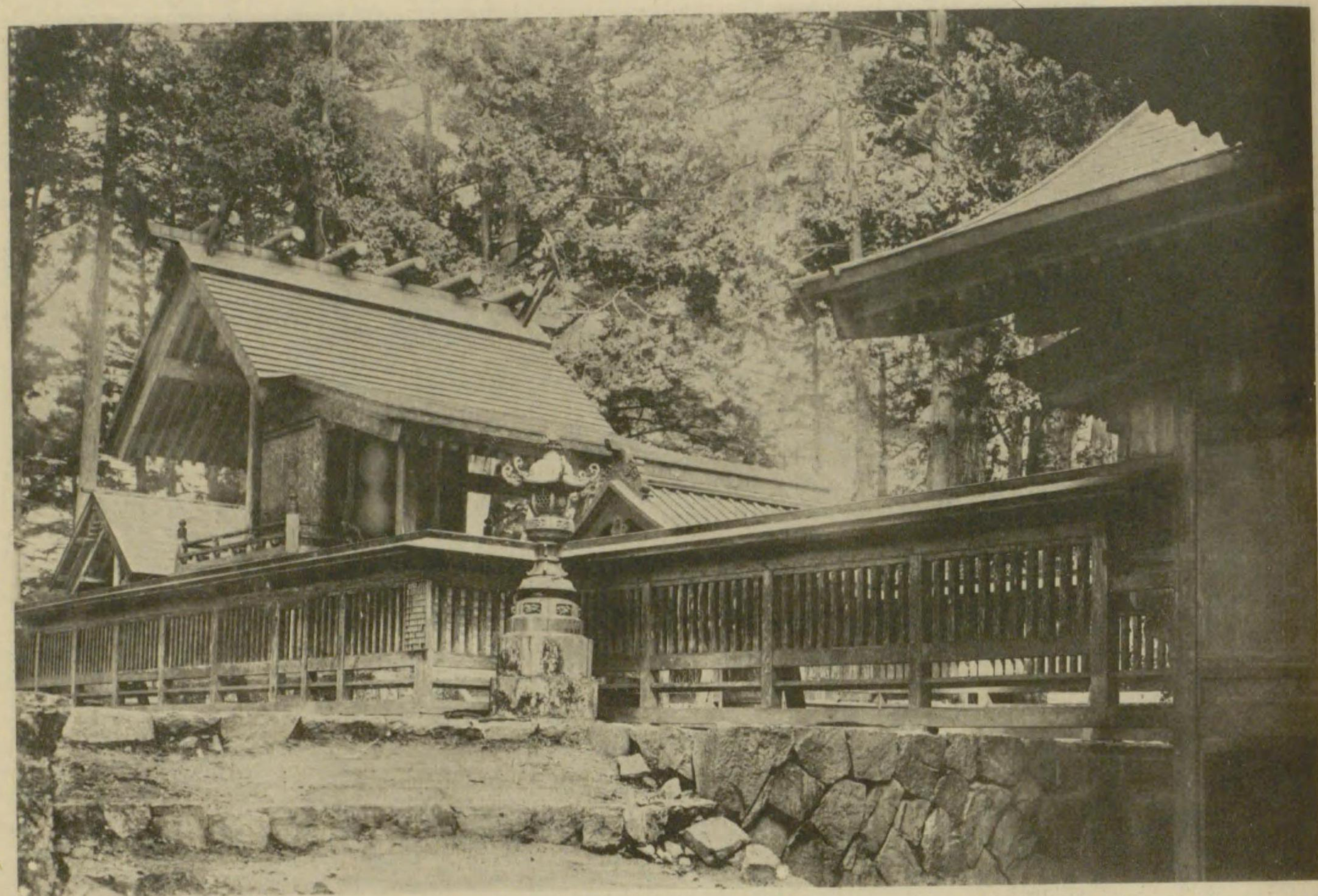
松平陸奥守政宗花印



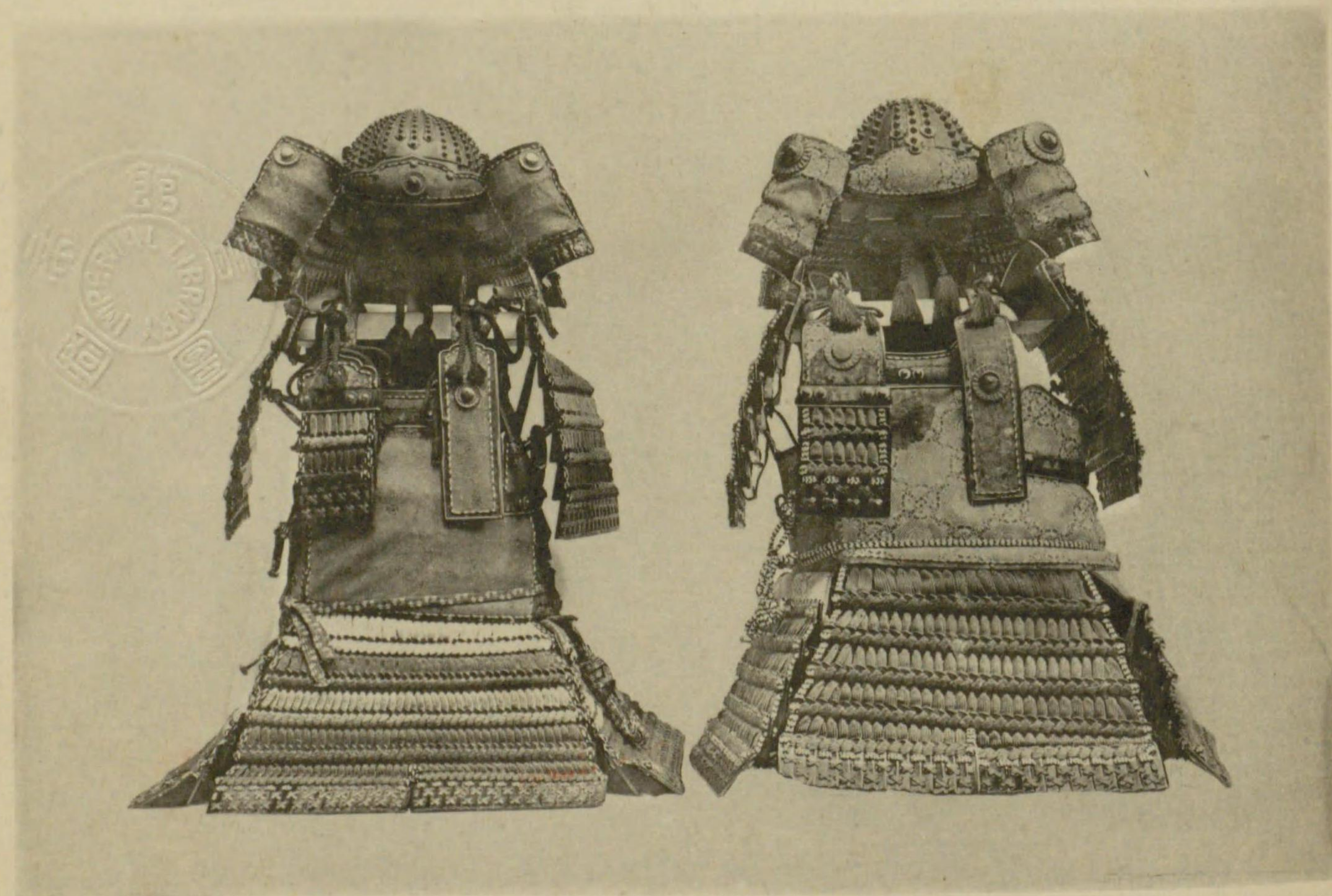
大慈悲願寺全景



伊達政宗白萩所望狀



御嶽神社



同上所藏寶物

御嶽神社

御嶽神社は西多摩郡三田村御嶽山にあり。社傳に據れば崇神天皇の詔により創建せられたるものにして、櫛真知命を祀る。鎌倉足利徳川累代武將の崇敬厚く、神地社領の寄附少なからず。社に藏する所の赤絲威甲冑と紫裾濃甲冑とは明治三十二年共に國寶に指定せらる。

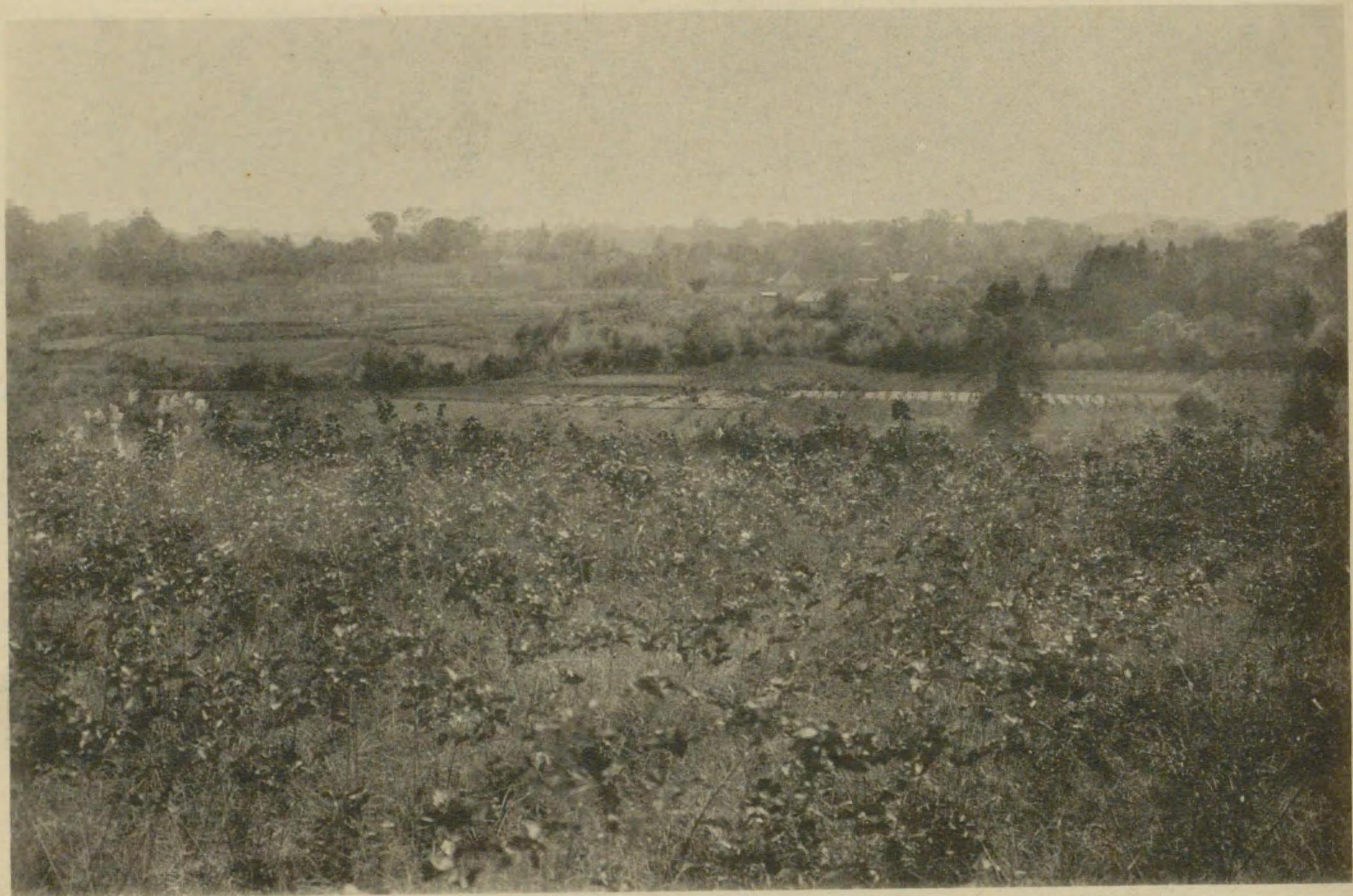
御嶽山は海拔約八百六十米、老杉古檜鬱蒼として盛夏の候と雖ども、嵐氣肌に迫る。山中禊の瀧七代の瀧あり。

久米川古戦場

北多摩郡東村山村久米川にあり。北は柳瀬川を隔て八國山と相對し、他の三面は田畑を以て圍繞せらる。其の位置鎌倉と上州との間に通せる鎌倉街道に當れるを以て、常に重要な通路たりしのみならず、元弘三年五月、新田義貞上州より南下し、北條高時の將櫻田貞國と入間川に戦ひ、貞國の退くや再び此の地に戦ひ、北條氏の軍死傷甚しく遂に敗走せり。

分倍河原古戦場

府中町分倍の地にして高安寺の南涯より多摩川に至る間をいふ。此の邊今日こそ一望水田にして民家其の間に散點するも、往時は多摩川に沿へる砂礫の河原なりしならん。里人の呼んで首塚、千人塚等の此の附近に散在するは、屢々戰場となりしを證するものなり。治承四年頼朝關東八州の軍勢を召集せるを始め、元弘三年新田義貞が北條泰家と激戦せる、永享十年足利持氏が上杉憲實の軍と激戦せる、皆此の地に於てせしなり。是其の位置鎌倉より關東に通ずる要衝に當るを以てなり。



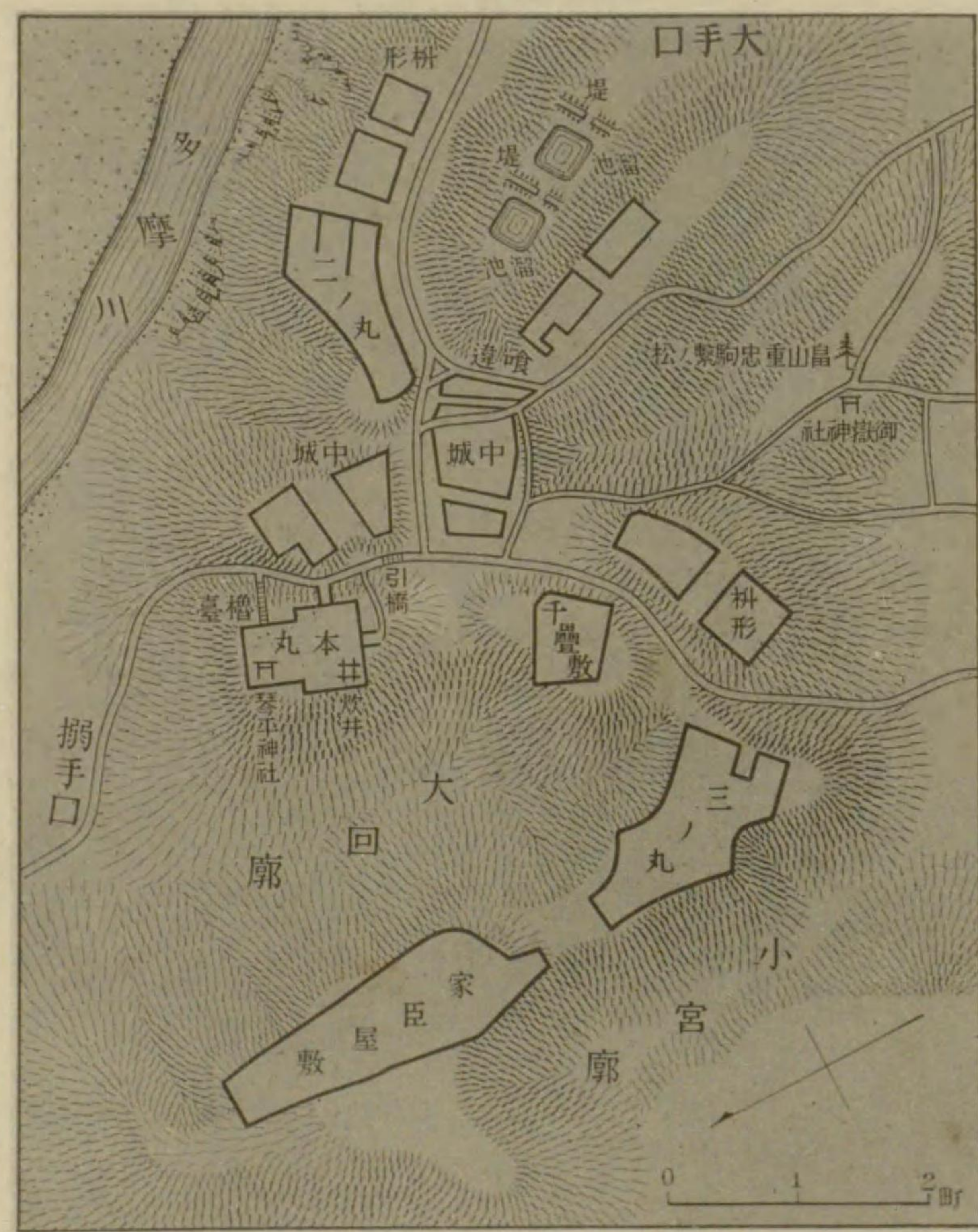
久米川古戦場



分倍河原古戦場



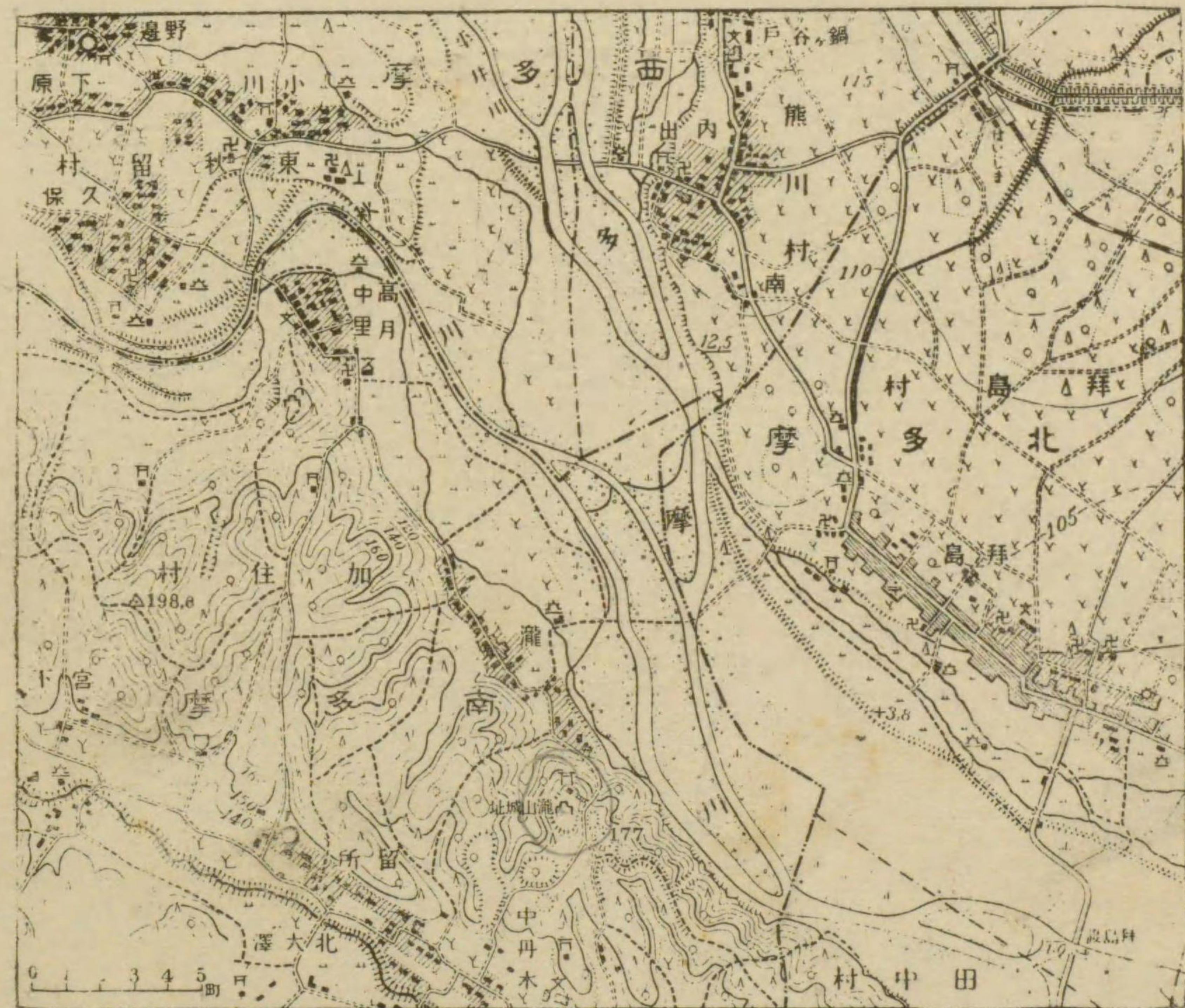
瀧山城址



同面上平圖

瀧山城址

南多摩郡加住村高月にあり、秋川の多摩川に合する所に峙ちて地勢丘陵起伏し、秋川に臨む處は懸崖削るが如く、天真天險なり。之に登臨すれば眺望濶大にして、對岸の拜島より遙に立川をも指點し得べく、實に附近の勝區なり。天文年間、木曾義仲十三世の裔大石定重、高槻城より移りて此に築きしものにして、高六丈、東西五百五十間、南北四百五十間、本丸二、丸三、丸等の地形よく現存す。城山はすべて土壘にして、片石を用ゐず。坎井のみは多摩川石を以て壘めり。永祿十二年、武田信玄此の城を攻落さんとし、自から拜島に陣し、勝頼等をして大軍を率ゐて屢々劇戦せしも、終に陥るゝ事能はざりき。



瀧山城址附近圖